Faster Bigger 3

げんじあきら

目次

パリからの脱出

月連絡船からの実況中継

２１１４年の湯花邪無。ジャカルタと東京に住んでいる。たまたま放浪中にジャカルタの大学のスパイス学に入れられた。33歳独身である。ジャカルタの大学に入った。入ったというより入れられた。スパイスをつくって新宿とジャカルタで販売している。もうすぐカサブランカでも販売する。
２メートル88キロ。大きい方ではない。ニューヨークゴジラに３メートルのピッチャーが入団した。東京ライオンと同じリーグである。
上海ドラゴンにも３メートルのピッチャーがいるようだ。ジャカルター東京50分である。
時代はエネルギー大変革。アースバッテリーを開発した先里風香が世界の救世主である。エネルギー代がタダなのだ。地球にも人にも、何も害を及ぼさない。スマホも冷蔵庫もレンジもドンドンアースバッテリーに変わっていく。アースカーが世界の50％を占めた。
先里風香はフロリダに住んでいるらしい。誰も顔を見たことがない。先里風香を支援したのは、フロリダのバッテリー会社であるワールドバッテリーである。ワールドバッテリーはアースバッテリーの世界シェアーの32％を持っている。
先里風香は、地球や人に良いことをしているのに自分に危険が迫ることを承知している。従来の地球資源によるエネルギーの役割が縮小するのだ。先里風香と行動を共にしている華美美鈴は、日本にアースバッテリーを紹介するために帰国した際に、東京駅ビルのホテルで２人組みに拉致されそうになった。ハダシで体育大学で一緒だった沢風ゆりを頼った。北千住のマンションに住んでいた。北千住のスポーツジムのインストラクターをやっている。
湯花邪無は北千住の自分のマンションにテレビでよく見る華美美鈴がいることに驚いた。湯花邪無は、東京では北千住のマンションに住み、ジャカルタではタベットのマンションに住んでいる。
８月21日月ホテルの電源が故障して月の１８２人全員が地球に一時帰還し

た。しかし、途中で行方不明になった。電源が故障したのではないかと言われている。９月13日華美美鈴は月アースバッテリーを持って月へ向かった。月連絡船のアースバッテリーと月タクシーと月駅からホテルまで宇宙服を着ないで行ける施設タクシーとホテルのライティングを、月アースバッテリーに変更したのだ。
そして、今日９月17日15時に、華美美鈴は月を出発する。フロリダ到着は19日の日本時間の15時だ。
「わたし先に出るから」
ジンとは、もう４年になる。スパイスｙｕｈａｎａの社長になったばかりだ。湯花邪無は会長になっている。タベットの湯花邪無のマンションに一緒に住んでいる。ジンは、多分実家だが、時々タベットのマンションに来ないことがある。
湯花邪無は、何も聞かない。
「今日は料理教室に新宿ね」
「そうだ」
スパイスｙｕｈａｎａの社員は、ジンと湯花邪無のことを誰も知らない。知られないようにしている。もう４年になる。
「おはよう」
「おはようございます」
ジャカルタカレット駅にあるスパイスｙｕｈａｎａは、２１０８年にオープンした。インドネシアでの唯一の販売店だしネット販売の唯一の拠点である。
湯花邪無は、アースカーでタベットのマンションからカレットのスパイスｙｕｈａｎａに通っている。
スパイスｙｕｈａｎａの社員は、コーラスのように湯花邪無にあいさつをする。
「ジンはもう出かけました」
ジンの秘書のリニがやってきた。
「シンガポールです」
「なにかあったのですか？」
「レストランに営業です」

「ハーブティだけど」
「ありがとう」
「すぐに料理教室に行くのか」
「ハーブティーを飲んだら行く」
今日の日本時間の15時に、華美美鈴は月を出発する。中継などないのだろう。
月には誰もいないのだから、中継のしようがない。
８月21日の月連絡船の不明事件の時も、中継などしていなかった。
「ミスターユハナ、まだ先だが、10月９日の招待されているレストランは大丈夫か」
料理を教えてくれているミナは、８人の生徒がいるのに、ほぼ湯花邪無にしか話さない。生徒は、ミナがイケメンの湯花邪無にいかれているとわかっているのだ。
「調整している」
「ゼッタイにダメだから」
ミナにこういわれると湯花邪無は返事がなくなる。
「今日は何だ」
夜のレストランに勤めている若者のヤユクが話を料理に持っていく。
「ジャジャバンタル」
「レシピを配ります」
「みんなレシピはどうしてますか？」
「ミスターユハナはどうしてますか？」
「このようにバインダーに閉じている」
「感心です」
「買い物に行ってください」
８人は、いつものように近所のスーパーマーケットに買い物に行く。
「わたしが買い物する」
２人の主婦のうちの１人であるナミラが言った。
ここのところずっとスイーツをやっているのだが、スイーツになって積極的になっている。
もち米とココナツミルクと砂糖を使う。

「蒸し器が３つしかないので協力して使って」
蒸し器を使うことは珍しい。インドネシア料理では蒸し料理は少ない。
「ミスターユハナのジャジャバンタルを持ってきてください」
「わたしのを食べて」
ミナは、湯花邪無の料理しか食べない。それでも、誰も不公平とは言わない。お互いに食べ較べて意見を言っている。
「ただいま〜」
「おかえりなさい〜」
「リニこれを食べてくれないか」
「ジャジャバンタルをやったのか」
「いただいていいのか」
「どうぞ」
「おいしい」
「ミナはおいしいとは言わなかった」
「料理の先生なのか」
「すぐに新宿に行くのか」
「そうだ」
「お昼はどうするのだ」
「空港でおそばを食べる」
「ジャカルタ空港でもおそばが食べられる」
湯花邪無は知らなかった。
「こんにちわ〜」
立ち喰いそばだ。空港ではみんな時間に追われている。ちょうどいい。
「こんにちわ〜」
「こんにちわ〜」
新宿南口にあるスパイス湯花でも、社員は、コーラスのように、湯花邪無にあいさつをする。
お客さんがたくさんいてもかまわずである。
「今日は水野まさみさんとジニがスパイス教室をやっています」
水野まさみは、スパイス湯花の社長になったばかりだ。湯花邪無は会長である。スパイスの仕事は、ほとんど何もしない。牧野由香は、水野まさみの秘

書である。
「出ますか？」
湯花邪無は、水野まさみスパイス教室のファイルを持ってプレゼンルームに急いだ。
ジニが今日のレシピを持ってきた。
カレイのスパイス煮と書かれてあった。日本の女性は、魚をあまり食べなくなっている。臭いが上手く処理できないのだ。カレイは、もともと臭いの強い魚ではないが、魚にスパイスを使うことはグッドではないかと湯花邪無も思った。
ジニは、インドネシアから日本に和食の勉強に来ている社員である。午前中は大学で午後はスパイス湯花にいる。アルバイトだ。
最近は、スパイス湯花がわさびの仕事をすることになって忙しい。
日本時間の15時になった。
華美美鈴が月を出発する時間である。
ニュースも何もないからわからない。８月21日の事故は、１８２人が乗った月連絡船から連絡がとれなくなって気がついた。
それしかないのだろう。
「今日はカレイのスパイス煮をやってみます」
「気に入りました？」
「みんなおいしいと言って食べていた」
「１食しかないけど」
「アイデアだと思った」
「醤油そのものも日本のスパイスなんだけど」
確かにそうだ。世界中で醤油が食べられるようになっているのだが、スパイスだと思ったらわかりやすい。
「お先に」
湯花邪無は17時になってスパイス湯花を出た。
「お先に〜」
「おつかれさまでした」
スパイス湯花の女子社員は、どこかで練習するのだろうか。
湯花邪無は、北千住のスーパーマケットで、スマホからアース炊飯器のス

イッチを入れた。２合は食べられないのだが、スイッチを入れた。魚を買って帰ろうと思った。
カレイを三つにカットしてもらった。サバも半身を３つにカットしてもらった。イカはそのまま１匹を買った。アース鍋を３つつくって冷凍庫に入れておこうと思った。
水野まさみのカレイのスパイス煮のようなことをもっと早く気がつけばよかった。
日本酒を買って帰った。落ち着かないだろうからと思った。
カレイのスパイス煮は10分でできてしまう。アース鍋は素晴らしい。スイッチが二重になっているのだが、スイッチを入れるだけで鍋になる。10分でカレイのスパイス煮ができてしまう。
ダイコンとニンジンとこんにゃくとしいたけとサケで味噌汁をつくった。
こんなところは、ジャカルタの料理学校のおかげだと思う。
北千住のマンションには、沢風ゆりと一緒に住んでいた。２１１３年11月に、湯花邪無が会員になっていた北千住のスポーツジムからの帰りに、焼き鳥屋で会って、そのまま湯花邪無のマンションで一緒に暮らしていた。８月17日に沢風ゆりはいなくなった。
「ゴメンなさい」を残した。
華美美鈴が日本で何度も拉致されそうになった時、湯花邪無が助けたことを嫉妬した。公安の真野裕也と有村聡に売ったのだ。拉致されている華美美鈴は、拉致を訴えないので、事件にならずに、警察も動きようがないのだ。
沢風ゆりが華美美鈴と湯花邪無の関係を話せば、今華美美鈴が狙われていることが、同じ理由で、湯花邪無が狙われ始めるのだ。
アースバッテリーは費用がゼロなのだ。
アースバッテリーの開発者の先里風香は、誰も見たことがない。写真もいない。代わって、華美美鈴が表で動いているのだ。何度も狙われる。
今のところ、沢風ゆりが、マスコミに情報を売ったとは思えない。他に、真野裕也と有村聡が知っているが、２人は警察官である。湯花邪無のリスクを承知している。先里風香とは、韓国で華美美鈴を助けた時に、仁川国際空港で見かけた。
「いつもありがとう」

先里風香は老人だった。湯花邪無を追い越すときに一言言った。
19時だった。
湯花邪無は、まだ日本酒を飲んでいた。カレイのスパイス煮と味噌汁とごはんは上手くできておいしかったのだが、落ち着かなくて日本酒を飲んでいる。
「わたしは今月を離れて６時間になります」
「現在のところ順調です」
「月を離れるときは月アースバッテリーを使用しました」
「連絡船内も月アースバッテリで動いています」
「どこかで地球からも月からも遠くなりますので、バッテリーで動くことになります」
「そして、どこかで自動的に地球のアースバッテリーが動きはじめます」
「現在のところ、月アースから離れているので、バッテリーが動いています」
「順調です」
「それでは連絡船内を案内します」
「２００人乗りです」
「明るい映像で船内が見れると思いますが、バッテリーは、連絡船が10日動くほどの大きな蓄積ができます」
「ここは客席です」
「２００席があります」
「バッテリーで地球と同じ空気の状態をつくっています」
「重力だけはコントロールできないので、わたしはこのように浮いてしまいます」
ニューヨークのライブテレビにしてあった。
いきなり華美美鈴が月連絡船から実況中継をはじめた。

地球帰還

９月18日木曜日である。

華美美鈴は月から帰還中である。湯花邪無は昨日はよく眠れた。月連絡船から中継ができるのだから、何かあったら情報が入るのだと思った。
昨日パンを買って帰るのを忘れた。ごはんが余っている。お茶漬けにする。たまごはない。梅干がある。
テレビをずっと見ていた。ニューヨークのライブテレビだ。こんなに華美美鈴のことが気になるのは何だろうか。こんなことでは、沢風ゆりが嫉妬するのも当たり前である。このままではジンにも読まれる。ジンを失うと辛い。
北千住のマンションから羽田まではアースカーである。アースカーでもライブテレビを見ている。運転はアースカーに任せている。アースカーに運転を任せると遅くなる。安全運転だからだ。それでも、湯花邪無は、ライブテレビを見たいからアースカーに運転を任せる。
ジャカルタまで50分である。時には、北千住から羽田までの方が時間がかかることがある。
火曜と木曜と土曜日はジャカルタのスパイスｙｕｈａｎａに出勤する。出勤してもスパイスの仕事はしない。ジャカルタはジンが社長だし、新宿は水野まさみが社長である。
ジャカルタ、新宿に続いて、カサブランカに３つ目の販売店をつくろうとしている。そういう時だけ湯花邪無は忙しい。
ひょっとすると、次は上海の可能性が高いのだが、まだ動いていない。小さな会社で社員も少ない。自分が動けばバラバラになってしまうかもしれないと思っている。慎重にしている。
「おはよう」
「おはようございます」
「ミスタージャム今日は何かありますか？」
「今日は大学に行きます」
「お昼はどこですか？」
「大学で食べます」
リニがハーブティーを持ってやってきた。ジンはまだ来ていないのだろうか。
「ジンはムンバイに行きました」
「何かあったのですか？」

「ムンバイからネット販売が多くて通信販売を開始するかどうか迷っているようです」
「そんなに注文が多いのですか」
「もともとスパイスをたくさん使うから」
「ムンバイをやったらスパイス工房はパンクするんじゃないですか？」
「だからジンは頭が痛いと思います」
「なるほど」
湯花邪無の考えは決まっている。ムンバイのお客さんも大事なのだが、スパイス工房の生産力とｙｕｈａｎａの森の栽培力は、そんなに急には上がらない。
注文が多いことはありがたいことだが、それは、スパイスｙｕｈａｎａの品質の良さからきている。売上げを上げたいからで仕事がラフになったら、そこから崩れてしまうことはよくわかっている。
10時になって湯花邪無は大学に出かけた。
教授である。
まだ33歳だ。
湯花邪無はハーブを研究している。スパイスとハーブは同じジャンルなのに、湯花邪無はハーブのことを知らない。
これでもスパイス学者としてやっていけるのだから、困ったものだ。
図書室にこもってミントを調べた。
ハッカとペパーミントとスペアミントがある。
ハッカを刈り取って乾燥させて水蒸気蒸留して得られる製油を精製するとハッカ油が得られる。メントールの原料になる。アメリカやドイツなどでは合成メントールが生産されている。
ペパーミントはアメリカが最大の栽培国である。刈り取って乾燥させて水蒸気蒸留して得られるペパーミント油を抽出する。
モロッコでは、緑茶ミントでミントティーを大量に飲む。
12時になって食堂に向かった。
バジルのスパゲティーを食べようと思った。
ハーブをやっているせいかもしれない。
ジンやリニからは何も連絡がない。新宿からも何もない。

みんな仕事をしているのに、自分だけがゆっくりパスタを食べている気がする。必要がなければ口を出さない方がいいのだと思う。
16時になって湯花邪無はスパイスｙｕｈａｎａに戻った。
「ただいま〜」
「おかえりなさい〜」
「ジンは帰っています」
「ありがとう」
電話もないのだから、急な用事はない。
「今日はいいの？」
こういう会話は良くないと思うのだが、ジンは気にせずに話す。リニの様子をよく知っているからだろう。
「フツウです」
「インド料理テイクアウトしてきたから」
「わかりました」
湯花邪無は、バジルとミントについて、小論文を書いた。自分でオリジナルな研究をやっているわけではない。情報をまとめているだけだ。
「コーヒー」
「ありがとう」
「ムンバイなんだけどね」
「ええ」
「ジャカルタから送ると送料かかるから高くなる」
「出てくれないかというお客さんが多いの」
「レストランですか？」
「生活者からも」
「ああ」
「考えますとしか言えない」
「そうですね」
「インド生産のコショウとかもあるんだけど」
「ターメリックなんかすごい生産してる」
「それでもｙｕｈａｎａのスパイスが好まれる」
「考えておかないといけない」

「結局〜インド料理テイクアウトしに行ったようなもんなんだけど」
「顔を出すだけ誠意は示せるから」
「そうですね」
ジンはテイクアウトしてきたインド料理を丁寧に再現していた。
「けっこうの値段した」
「聞いてる？」
「ええ」
「ごはんも買ってきたけど」
「どうかわかんない」
「インドネシアのごはんの方がおいしいかもしれない」
「返事をしない湯花邪無を見ないで独り言のようにしゃべっている」
ジンがテイクアウトしてきたインド料理はおいしかった。
「すごいおいしいけど」
「わたしも驚いてる」
「10月の誕生会モロッコ料理だから11月の料理はインド料理にしよう」
「いいよね」
「どうぞ」
昼間にジンが言った「今日はいいよね」は、ベッドのことだった。
「ミスタージャムはまだ料理学校やってるのか」
「卒業というのはないのかもしれない」
「私が料理学校へ行くのはイヤなのか」
「楽しそうだし興味持ってくれるとありがたい」
「ミナのことが気になる」
「嫉妬なのか」
「よくないけど」
「なんでも話している」
「レストランに誘われてるのか」
「10月９日だ」
「お昼はいいけど夜はイヤだ」
「料理学校のみんなも知っている」
「わたしが気にしてることは知っておいて」

「わかった」
ジンが、ミナのことを気にしてるかもしれないとは思っていたのだが、言葉で言われたことに驚いた。
確かに、ジンは夜の接待はしない。
湯花邪無は、スパイスｙｕｈａｎａまでのアースカーでライブテレビを見た。
まだ月出発６時間後の華美美鈴のライブ映像が流れている。
その後は中継はしていないのだろう。
そもそもが、まだ無事なのだろうか。
全くわからない。
日本時間の15時には地球に帰還する。
「ミスターユハナ何か心配事があるのですか？」
「どうしてだ」
「晴れた顔をしていない」
「昨日睡眠不足だ」
「眠れないのか」
「昨日だけだ」
料理学校の７名は、ミナと湯花邪無の話を笑いながら聞いている。
そしてしびれをきらしたように、ラエルが言う。
「今日の料理はなんだ」
「エスチャンプル」
湯花邪無はスマホで調べた。
「レシピを配ります」
果物とかき氷とジュースとタピオカ入りの飲み物だ。
「買い物に行ってください」
「今日もわたしが買い物する」
ナミラが手を挙げた。
「果物は何でもいいのか」
「任せる」
「うれしい」
みんなはナミラがうれしいと言ったことに驚いた。

湯花邪無は、ミナの言っていることにもうまく反応できていない。気になっているのだ。８月21日には、月連絡船が１８２人の乗客と一緒にいなくなってしまったのだ。もちろん、どこに行ったのかすらもわからない。
「何か心配事があるのか」
１番若いと思えるラエルが言った。
「睡眠不足だ」
「悩みがあったら話したほうがよい」
しかし、華美美鈴のことはしゃべることなどできない。
「ただいま〜」
「おかえりなさい〜」
みんな湯花邪無が料理学校に行ってきたのを知っている。
ゴルフ教室などではなくて料理教室に行っていることに快く思っている。
「今日はなんだったのか」
「エスチャンプルだ」
「持って帰らなかったのか」
「みんなで食べ較べた」
「おいしくできたのか」
「まあまあだ」
「たまには料理してほしい」
湯花ジャムは驚いた。リニがハーブティーを持ってきていたからだ。
「そう〜たまにはお昼を担当してください」
「じゃ〜23日は私がやります」
ジンもリニも、顔を見合わせて驚いた。
「ホントなのか」
「ホントだ」
「85人前だけど」
「知っている」
「最初はデザートだけやらせてくれ」
「個人的な私からのサービスでよい」
「そういうのはダメだ」
「なぜだ」

「おいしくなくてもタダだからと思うから」
「どうするのだ」
「お昼の給食の費用でやる」
「どうするのだ」
「デザート分だけ予算を増やす」
「わかった」
「リニ手伝ってあげて」
「23日の給食の担当と相談します」
「レシピはあるのか」
「後でメールする」
「買うモノと量もメールをくれ」
「わかった」
「おいしくなかったらもうダメだから」
「わかった」
いつもの時間に湯花邪無は羽田に向かった。
ずっとライブテレビを見ているのだが、月連絡船のニュースはない。
エスチャンプルのレシピを開いてみた。かき氷が問題だ。コンビニでも売ってはいない。タピオカは大丈夫だ。かき氷がなかったら単なる果物ジュースになってしまう。
粉砕氷を検索してみた。
思いもかけないことだった。粉砕氷を売っている。しかもカレット駅から近い。
「粉砕氷を売っているのですか？」
「粉砕はどのくらい細かいのか」
「１ミリ四方のもあれば４ミリ四方のものもある」
「10キロ23日の朝取りに行きたいけど大丈夫か」
「９時からしかやってない」
「11時に行く」
マンゴとバナナとオレンジジュースとタピオカを計算した。85人前だ。
リニとジンにメールをした。
粉砕氷は自腹にしようと思った。

「こんにちわ〜」
「こんにちわ〜」
「今日は何をやったんだ」
「エスチャンプル」
「なんだ」
「インドネシアのかき氷のある果物飲み物」
「おいしそうだけど」
「23日のスパイスｙｕｈａｎａのお昼に私がやることにした」
牧野由香もいて驚いた。
「牧野さんコーヒーでも」
「承知しました」
湯花邪無は、15時が気になっていた。
水野まさみと牧野由香は一緒に出かけた。
「エスチャンプルはかき氷が必要ですがどうしますか？」
リニから質問が来た。
「私が23日の11時に取りに行くことになっています」
「わかりました」
湯花邪無が、普段やらないことをすると、みんながタイヘンかもしれないと思ってしまう。
15時になってニューヨークのライブテレビを見た。
まだ何もやっていない。
ライブテレビだから、常に、新しいニュースですがではじまる。したがって、今興味のないことだと思っていても、急に、華美美鈴の顔がアップで映ったりする。
いきなりだった。
「月連絡船が予定より30分も早く到着しましたので、華美美鈴さんの記者会見をお送りします」
それまでのニュースがどこかへ飛んでしまった。仕方がない。ライブテレビはいつもこうだ。
「月ホテルの電源はすべて月アースバッテリーに替えました」
「月タクシーも月施設タクシーも替えました」

「もう１度月に行って月駅の電源をすべて月アースバッテリに変更します」
「月アースバッテリーは安定しているので故障も起こりにくいと考えています」
「９月26日に再度月に向かいます」
「次は月駅で仕事をされる方も一緒に月に向かいます」
「月ホテルの方も一緒です」
「32人で月に向かいます」
「月連絡船はすべてアースバッテリーに替えました」
「月に近い場合は月アースバッテリーにして地球に近い場合は地球アースバッテリーにします」
「自動的に変更します」
「月連絡船の電源はかなり向上したと考えられます」
記者から質問があった。
「月連絡船で怖くなかったのですか？」
「先里風香さんからは何か連絡はありましたか」
こんな質問には華美美鈴は黙ってしまう。
「潜水艦のアースバッテリー計画に参加することを断ったそうだが」
「あんな重いものは動きません」
「メキシコシティーの新幹線は動いたが」
「車輪があるからだ」
華美美鈴は、早々に記者会見を終えた。
華美美鈴が月に行くことについては、反対する人や団体はなさそうだ。華美美鈴が狙われることはないと思った。
ただ、８月21日に１８２人と共に不明になった月連絡船のことがある。
湯花邪無のドキドキは続いてしまう。

パリで行方不明になる

「出張スパイス教室をしてきました」
「おつかれさま」

「また注文いただきました」
「ホテルの厨房です」
「レッドペッパーは品薄です」
「スパイス工房モロッコが動いたら解消されます」
「一度行ってみたい」
「いつでもどうぞ」
「ジンと話していい？」
「どうぞ」
水野まさみはすぐにジンに電話をした。
「10月７日にジンと行くことにしました」
「わかりました」
湯花邪無はアースカーから北千住のマンションのアース炊飯器のスイッチを入れた。
冷凍庫に下ごしらえをして入れてあるイカダイコンをアースレンジにかけようと思った。
湯花邪無は積極的にアースバッテリーを使っているが、日本では、まだ普及が進んでいるとはいえない。
電力会社が強いからだと思っている。
アース炊飯器などは多く売れていないようだ。メーカーは有名メーカーだが高い。
ジャカルタでは、ほぼすべてがアース炊飯器だ。スマホで動く新しいアース炊飯器をネット販売で買ったのだがジャカルタ製だった。ジニが教えてくれたものだ。
21時になっていた。
なんとはなしに日本のライブテレビを見ていた。
「ただいま入ったニュースです」
「アースバッテリーの華美美鈴さんがパリで行方不明になったようです」
「華美美鈴さんをパリに招いたのはエッフェル塔のアースバッテリー化を計画する会です」
「パリでは反対意見も多くて華美美鈴さんがパリに入ることは一度もありませんでした」

「華美美鈴さんは先ほど月から帰還したばかりで、パリ訪問は驚きです」
「つい１時間前に、エッフェル塔のアースバッテリー化を計画する会から発表されました」
「ドゴール空港からホテルに移動している時に、３台の不審な車に襲われて、拉致されたのだそうです」
「華美美鈴さんのパリ訪問は誰にも知らせなかったために、警備も手薄だったそうです」
湯花邪無は、呆然としてアナウンサーの声を聞いていた。
「すぐにパリ行きに乗ってくれないか」
いきなりサマンサからショートメールがきた。
サマンサは、アメリカ人でカメラマン風にしているが華美美鈴のガードマンである。ビルと２人の警備員が常に一緒にいる。華美美鈴は常に４人に守られている。
冷静に電源をすべて切ってアースカーに向かった。少しアルコールが残っているかもしれないとは思ったが、アースカーは80キロしか出ないので止められることも少ない。事故も少ないのだ。運転をアースカーに任せて羽田発パリ行きの時刻表を調べた。
東京22時発には乗れる。ドゴール空港は０時30分だ。パリ時間で８時間の時差だから９月20日８時30分だ。
とにかく行ってみなければわらない。
湯花邪無は９月20日は土曜日でジャカルタだ。
湯花邪無はアースカーで着替えようと思ったのだが、どういう姿が適切なのかもわからない。ジーパンに薄いカーディガンにした。そろそろパリは寒いかもしれない。
到着ロビーでサマンサが待っているはずである。
キョロキョロできない。
帽子を被ろうと思った。
短いひさしの野球帽子にした。
「後を歩いてきて」
「その帽子はグッドだ」
サマンサの声だった。

サマンサは駐車場に向かった。
「ミスターユハナありがとう」
「説明してくれ」
「空港出て１キロくらいでエッフェル塔の方に曲がったところで、３台の車が先を塞いで銃を持った男たちに車を止められて、華美美鈴を拉致された」
「その後はどうなっているのだ」
「パリ警察が動いている」
「ビルと２人の警備人は何をしているのだ」
「一緒に車に乗っていた」
「一緒に拉致されたのか」
「わたしはホテルで待っていた」
「ホテルはどこだ」
「エッフェル塔の近くだ」
「どうして情報が漏れたのだ」
「エッフェル塔のアースバッテリー化を計画する会のイベントの準備が漏れた」
「犯人は誰なんだ」
「わからない」
「情報は何かないのか」
「パリ警察から何か言ってこないのか」
「拉致された時間は？」
「パリ時間の４時だ」
「今８時30分だから４時間半前か」
「朝の４時だと誰も気づかないと思ったのか」
「そうだ」
「華美美鈴がいなかったらエッフェル塔のアースバッテリー化は進まないのか」
「もう工事は終わっている」
「スイッチだけなのか」
「そうだ」
「イベントは何時なのか」

「11時30分だ」
「今日は中止になるのか」
「それどころではなくなった」
「彼らは何をしたいのだ」
「エッフェル塔のアースバッテリー化を阻止したい」
「フランスでアースバッテリーが普及することを防ぎたい」
「拉致された車を誰も見てないのか」
「朝の４時だ」
有村聡から電話だった。
電話に出ることができない。内容はわかっている。パリに出かけたのかである。有村聡と真野裕也は警察庁の警察官だ。誰からかの要望で、日本政府に要望されている、華美美鈴を守る要望を受け入れて、具体的な担当をしている。
何度も華美美鈴は拉致されたり襲われているのだが、追跡して湯花邪無を把握しているが、自ら手を出してはいない。華美美鈴側から提訴していないので、事件にはならないのだ。犯人を追えない。
メキシコシティーでの拉致は、有村聡と真野裕也は知らない。華美美鈴が拉致されると常に湯花邪無がいるのだが、今回は、拉致が公開されているので、湯花邪無が動くと判断したと思われる。
留守電にしてある。
何もメッセージがなかった。
湯花邪無は、メキシコシティーのときと同じだと思った。ツルツル石を登山するようなものだ。ハーケンの打ち所がないのだ。メキシコシティーのときは、会議の会場から拉致された。睡眠薬を注射されて病院に入院させられていると想定した。当たっていた。会場からいなくなったからだ。いまだに誰も知らない。
パリでは、自動車３台である。どこに連れて行かれたのかさっぱりである。
湯花邪無の頭はグルグル回っている。
「サマンサ、自動車３台に襲われた場所に連れて行ってくれ」
襲われた場所は、ドゴール空港を出てすぐだった。
「３台の車はどっち向かったのか」

「わからない」
三叉路だった。
「この道を少し進んでくれないか」
「エッフェル塔と反対になる」
「３台の自動車というのはどうしてわかったのだ」
「防犯カメラだ」
「そしたらどっちに向かったかわかるだろう」
「華美美鈴の車の後を３台の車が走っている映像があるからだ」
「多分なのか」
「そうだ」
「ナンバーなどはわからない」
湯花邪無は、もちろんこの道を通るのははじめてである。
勘など働かない。
「サマンサは何かアイデアはないのか」
「何もない」
「どうしていいのかわからない」
「このままエッフェル塔とは逆の道を進んでいいのか」
「わからないから行ってくれ」
「なぜだ」
「私だったら華美美鈴をエッフェル塔から遠ざける」
20分走って車を止めた。
「あれは防犯カメラか」
「そうだ」
「調べてきてくれないか」
「３台の車がどっちに行ったのか」
サマンサは、可能性は薄いという顔をして防犯カメラのあるお店に入って行った。
９時になってサマンサが出てきた。
「映像をプリントしてきていた」
「時間からして、多分この３台の車だ」
「どっちを向いているのだ」

「ミスターユハナの勘の通りだ」
「エッフェル塔と逆に向かっているのか」
「そうだ」
「何時間前だ」
「４時30分だ」
「４時間半前か」
「このまま走ったらどこへ行くのか」
「わからない」
「とにかく走ろう」
道は、次第に家が少なくなってきた。
「もう防犯カメラはありそうもない」
ガソリンスタンドがあった。
サマンサは、ガソリンスタンドに入って行った。きっと防犯カメラがある。
10分経ってサマンサが帰ってきた。
「この３台だ」
「ガソリンを補給したのか」
「そのようだ」
「今日11時30分にエッフェル塔がアースバッテリーにならなかったらどうなるのか」
「エッフェル塔はアースバッテリーにならない」
「工事は終わっているのだろう？」
「抵抗を押し切るために華美美鈴が必要だった」
「なるほど」
「３台の車は華美美鈴の命を奪うだろうか」
「わからない」
「フランス人なのか」
「わからない」
「華美美鈴が拉致されて殺されたらフランスのアンチアースバッテリーは都合が良くないのではないか」
「同情が華美美鈴に集まるのは確実だ」
「なぜ誘拐したのか」

「エッフェル塔をアースバッテリーにしたくなかった」
「シンボルだからか」
「そしたらこんな派手な拉致はまずいではないか」
「まさか公表するとは思わなかったのではないか」
「エッフェル塔のアースバッテリー化を計画する会は慌ててしまった」
「予期しなかったことになったのか」
「拉致犯は、華美美鈴はパリには来なかったことにしたかったのではないか」
「月から帰ったばかりだし」
「華美美鈴のもくろみもあった」
「まさかパリには来ない」
「情報が漏れたのは残念だった」
「関係者が多いからあり得る」
「あれはなんだ」
「わからない」
「工場のようだ」
「お菓子の工場だ」
「防犯カメラがあるかもしれない」
サマンサは、工場の守衛所のような所に向かった。
「防犯カメラはあったが３台の車は通っていない」
「引き返そう」
「ガソリンスタンドからここまで何キロだ」
「多分５キロ」
「３台の車が入るのだから小さなレストランではない」
「レストランなどなかった」
アッという間にガソリンスタンドまで来てしまった。
「道路沿いではなくてどこかで曲がった」
サマンサはまた引き返しはじめた。
ガソリンスタンドから５００メートルくらいのところに、左に入る細い道があった。
湯花邪無は車から降りてタイヤの後を調べた。

車３台が細い道を通るのだ。痕跡が残る。
「ここを進んでみよう」
「静かに行ってくれ」
「あの森の向こうに建物があるかもしれない」
森というより林だった。背の低い木が30本くらいかたまっている。
黒い車が３台バラバラに林の中に駐車している。
「サマンサ、さっきのガソリンスタンドに車を置いてきてくれ」
「バックで運転できるのか」
「ここでは隠れることができない」
「私は降りる」
「拳銃を持っているから危険だ」
「早く帰ってきてくれ」
サマンサは、静かにバックして、大きな道路に戻って行った。
湯花邪無は、散歩するかのように、林の中に入って行った。
左に３台の黒い車が止まっている。
誰もいない雰囲気である。細い道路は、林の中を突き抜けている。
林は大きく左に曲がって繋がっていた。
１軒の家があった。普通の民家のように見えた。湯花邪無は、そちらを見ないで、そのまま細い道路を散歩しているかのように進んだ。
このまま家がなかったら困る。
ラッキーだった。
左の林の中に１軒の家があった。
あたかもその家に向かうかのように左に曲がって歩いた。
車がない。
玄関があるが、明かりがない。時計を見た。
９時40分だった。
「サマンサ車で来てくれ」
「３台の黒い車の横を通って少し進むと左に家があって駐車場がある」
「あたかもそこの住人のように入ってきてくれ」
「車をバックで入れておいてくれ」
「ミスターユハナはどうするのだ」

「また連絡する」
この家から３台の車が止まっている家は見えない。少しだが林がある。
湯花邪無は、玄関を抜けて林に入った。獣道のような道がある。３台の黒い車のある家に向かっている。
林と草木に覆われていて、何も見えない。
１５０メートル歩いて、家が見えた。
木の陰からうかがった。
１回のリビングのような場所に４人が見える。テレビを見ているようだった。３台の黒い車に何人乗っていたのかわからない。華美美鈴とビルと２人の警備員は２階に閉じ込められているんだろうか。縛られているかもしれない。手錠かもしれない。
ここで警察を呼んだら銃撃戦になりそうである。
多分、時間が過ぎたら華美美鈴を解放するのだろう。焦ってはいけない。
湯花邪無は、玄関側に向かった。リビングに４人いた。服装を覚えた。２人が玄関から出てきた。車に向かった。
食べ物の買出しだと思った。
１台の車が走り去ったすぐに、湯花邪無は玄関のドアを開けた。
奥からテレビの音がする。話声がする。１分待った。ここで見つかったら、隣の住人だがと言うつもりだった。
意を決して、はだしになって２階に駆け上がった。音などしない。玄関側の小部屋に４人がいた。
華美美鈴は大きな目を見開いた。
車にあったナイフでビルを縛っている縄を切った。
こんなことはビルが得意である。
手錠のまま、華美美鈴と２人の警備員の縄を切った。
１分もかかってない。
湯花邪無は静かに階段を下りた。
ビルは、音がしないように玄関を閉めた。
そっと、獣道のような細い道を静かに歩いた。
多分、10分したら２人が帰ってくる。
１５０メートルの道が長かった。もう２人が車で帰ってきたかどうか見えな

い。
サマンサが待っていた。
一瞬声が出なかった。
「道路に出ないで反対に行けないか」
「１台車が出ているから鉢合せする」
「反対に向かっても大きな道路に出られる」
「お願いする」
華美美鈴は、じっと前を向いて黙っていた。
ビルも驚いた表情のままである。
15分は細い道を通った。すれ違えない道である。
もう全員が逃げたことに気づいているのだろうが追ってくる様子はない。
フツウは、道路側に出る。
まだ10時だった。
「ホテルに行って着替えたい」
はじめて華美美鈴が口を開いた。
「この車はどうしたのだ」
「今日借りた」
「目立たない」
大回りをしたのだと思った。
11時になってやっとエッフェル塔の近くのホテルに着いた。
「今日のことは話さないで」
華美美鈴が、車から降りるときに口を開いた。
みんなよくわかっている。
「私はタクシーで空港に行く」
華美美鈴は黙ってメモを湯花邪無に渡した。
「あいしている」
湯花邪無はそっと財布にしまった。そしてタクシー乗り場に向かった。
華美美鈴と４人は、急いでホテルに入った。エッフェル塔のアースバッテリー化の式典まで30分しかない。
湯花邪無は12時のパリ発ジャカルタ行きに乗った。
５分前に搭乗した。最後の１人だった。

２度目の月へ

チャンコ

14時30分にはジャカルタに着く。
パリ－ジャカルタの時差は６時間である。ジャカルタ時間の８時30分だ。飛行機で眠らないといけない。
湯花邪無は、ジャカルタ空港ホテルでシャワーを浴びて朝ごはんを食べた。
パリのライブテレビを見た。
エッフェル塔のアースバッテリーのニュースはやっていなかった。
ネット検索をした。
エッフェル塔のアースバッテリー化を計画する会のサイトでは、11時30分からの点灯式の映像が流されていた。
華美美鈴の点灯式がメインだ。
「今朝エッフェル塔のアースバッテリー化を計画する会から華美美鈴さんの拉致報告がありましたが、ご存知のように何事もありませんでした」
最後に司会者から、こんなあいさつがあった。
華美美鈴は、終始にこやかだった。
誰が見ても、３台の黒塗りの自動車で襲われて拉致されたなど想像できない。
「おはよう」
「おはようございます」
湯花邪無は、いつものようにジャカルタのスパイスｙｕｈａｎａに入った。いつものように、北千住から朝やってきた風である。何事もなかったかのようである。
「ジンおはよう」
「リニおはよう」
「ハーブ茶ですか？」
「お願いします」
「わたし今日モロッコに行くから」

「エミルと試作品持って帰ってくる」
「スパイス工房モロッコですか？」
「試作してるから」
「ああ」
「それから今日から生バジル４００袋と乾燥バジル４００袋とバジルソースレトルト４００袋を毎日販売するから」
「ジャカルタだけですか？」
「４００しかやらないから」
「お店もやるんですか？」
「ネットでほとんどなくなるけどお店も少しやる」
「わかりました」
「今日は？」
「私は東京で用事があるから14時の便で東京に行きます」
「今日は帰って来ない？」
「ええ」
「明日は？」
「北千住にいます」
「わかった」
「モロッコの試作のことは連絡する」
「お願いします」
「じゃ〜行きます」
「気をつけて」
ジンは、急いでいるわけではないのだろう。湯花邪無との話が一区切りすると、部屋を出て行った。
モロッコに向かったのだ。
「ハーブ茶だけど」
「ありがとう」
「お昼はここで食べるのか」
「お願いする」
「14時発の東京行きなのか」
「そうだ」

リニは厨房に向かった。
15時に両国駅で待っていると言ったのだから14時50分に羽田に着いたのでは間に合わない。
13時30分に乗ろうと思った。
料理学校の５人の独身者が相撲見物をしたくて待っているのだ。
湯花邪無は、パリのライブテレビを見た。
もう華美美鈴のニュースの話はどこにもない。
エッフェル塔も電源が切り替わっただけで何事もなく動いているようだ。エレベーターもアースバッテリーになったのだろうか。
お昼になってリニがやってきた。
「わたしと一緒にごはん食べるけどいいか」
「うれしい」
「ミーアヤムに白ごはんだ」
鶏肉ラーメンごはんだ。
白ごはんが付いたときはラーメンは辛い。
湯花邪無は13時30分発のジャカルタ発羽田行きに乗った。
14時20分に羽田である。アースカーで両国駅に向かった。高速道路が空いていればアッという間に時速80キロでも両国駅に着ける。駅から少し離れた駐車場に止めて駅に向かった。
ピッタリ15時に両国駅に着いた。
「みんな揃っていますか？」
ラエルともう１人の若い女性である。２人ともレストランに夜勤めている。ヤユクと２人の若いオトコである。夜のレストランに勤めている。料理学校仲間の独身の５人だ。
「たまたまだけど相撲のチケットを６枚いただいたので相撲を見に行く」
「チャンコごはん付だから先にごはんを食べるけどいいか」
「失業中のミスターユハナに世話をかけたくない」
「私もいただかなかったら両国で待っててくれとか言わない」
「ホントなのか」
「そうだ」
「今日は何時に来たのか」

「朝の８時の飛行機だ」
「スカイツリーに行った」
「それでここにいる」
「お昼はどうしたのだ」
「お好み焼きが食べたかったらみんなで食べた」
「さっきチケットが買えるか聞きに行ったら満員御礼だった」
「今は人気がぶり返しているからチケットはないかもしれない」
「湯花邪無はどうしたのだ」
「いただいた」
「高い席ではないと思う」
「見れるだけでいい」
「こんにちわ〜」
５人はお酒を飲まない。
しかし、チャンコにごはんはおいしかった。湯花邪無もみんなもごはんをお替りした。
「明日はどうするのだ」
「ディズニーランドに行く」
「それは楽しみだ」
「ホテルはどうしているのだ」
「ディズニーランドのチケットと一緒になっている」
16時になって湯花邪無は国技館に入った。
９月場所中日前である。
５人はけっこう相撲に詳しかった。力士にも精通していた。
横綱の取り組みがあって弓取り式があって、中日前の相撲が終わった。
これからどうなるかわかっている。
「日没だからオレたちはホテルに行く」
「明日も楽しんでくれ」
「ミスターユハナありがとう」
「他人のふんどしで相撲をとっている」
「どういう意味だ」
「いただいたチケットでお礼を言われているからだ」

「それでもありがとう」
「私はアースカーを駐車場に置いている」
「また月曜日に料理学校で」
「ミナにはこのことは内緒だ」
「話したらミスターユハナに連れて行けと言うから」
「ありがたいそうしてくれ」
湯花邪無はアースカーで睡魔に襲われた。運転をアースカーに任せて少し眠ったように思った。
お腹は空いていなかった。スーパーマーケットにも寄らなかった。
シャワーをして缶ビールを飲んで睡魔に身を任せるように眠った。
さすがにパリの出来事は疲れたのだ。
「何をしているのだ」
「大丈夫なのか」
「少し疲れたのか眠っていた」
「まだ晩ごはんの時間だ」
「モロッコから帰ってきた」
「おつかれさま」
「クミンとターメリックとシナモンとレッドペッパーは良くできているように思う」
「明日エミルが試験をするから月曜日には報告できると思う」
「モロッコ産でも品質が落ちなかったら素晴らしいけど」
「レッドペッパーはモロッコ産の方がいいのではないかと思う」
「月曜の報告を楽しみにしている」
「大丈夫か？」
「風邪なのか」
「平気だ」
「明日たくさん眠ってくれ」
「わかった」
９月21日は、目覚ましもかけなかった。
気がついたら10時30分だった。
日曜である。

「昨日聞くのを忘れた」
「なに」
「生バジルと乾燥バジルとレトルトバジルソースはどうなったのだ」
「昨日午前中になくなった」
「お店には40置いたがこっちも午前中になくなった」
「わかった」
「なにをしているのだ」
「起きたばかりだ」
「ジンはどこだ」
「スポーツジム」
「グッド」
お昼のナポリタンを食べていた。
「ちょっと出てきてくれないか」
「マンションの駐車場にいる」
「何か用事なのか」
「とにかく待っている」
「ナポリタンを食べているから５分待ってくれ」
「わかった」
有村聡と真野裕也である。
湯花邪無がパリに行ったのではないかと思っているのだろう。
エッフェル塔のアースバッテリー化を計画する会が華美美鈴の拉致を発表したのだ。
ところが、11時30分の点灯式には華美美鈴は現れてボタンを押した。
拉致されたはずなのに、何の発表もなく、あたかも拉致などなかったかのように進んでいることを聞きたいのだ。
湯花邪無が関与しているのではないか。
そもそも、北千住にはいないのではないかと思っているに違いない。
ナポリタンを食べ終わるまでに、湯花邪無は、有村聡と真野裕也との話が、どのようになるのかを想定した。２人は警察庁の警察官だ。
「ここにいるとは思わなかった」
「昨日はジャカルタにいた」

「パリに行ったのか」
「私はスパイスの仕事が忙しい」
「ナポリタンは食べたのか」
「そうだ」
「もう行ってくれ」
「ここにいるとは思わなかった」
多分パリの警察も、エッフェル塔のアースバッテリー化を計画する会を呼んで調べているのだろうが、華美美鈴が何も話さないので、会自体も何を話していいのかわからないのだ。
「拉致はあったのか」
「３台の車によって拉致されたと思った」
「わからないまま11時になったら華美美鈴がホテルにいた」
「華美美鈴に聞いてくれ」
「なにもなかったと言っている」
「拉致ではなかったのか」
「お騒がせして申し訳ない」
こんなわけのわからない話に終始している気がする。
日本の警察もわけがわからない。
湯花邪無がパリに行っていれば、また湯花邪無が助けたと思うのだろう。
17時になって、アース炊飯器をスマホから動かした。２合にした。明日の朝も残りのごはんにしようと思った。サバの味噌煮のアース鍋を冷凍庫から取り出してスイッチを入れた。野菜がない。野菜炒めのアース鍋を３つつくって１つスイッチを入れた。ブタ肉を使った。キャベツとニンジンとホウレン草とピーマンとタケノコである。モヤシがダメになっていた。
こんなことをメンドーだと思わないで短時間にできるようになったのも、料理学校に通っているからだと思う。

エスチャンプル65人分

９月22日月曜日である。

いつものように８時のジャカルタ行きに乗った。
もう眠くはない。疲れが取れている。
「おはよう」
「おはようございます〜」
今日も声が揃っている。
「エミルも来てるから」
「料理学校に行く前に報告あるから」
「わかりました」
「コーヒーでいいのか」
「ありがとう」
「クミンとターメリックとシナモンとレッドペッパーだけど」
「まずレッドペッパー」
「スパイス工房モロッコの隣のレッドペッパー畑が使える」
「もう放置されてたけどステファノとアイチャが復活させた」
「５種類のレッドペッパーができる」
「スパイスの森ジャカルタよりもグレードが高いからスパイス工房モロッコのレッドペッパーを主力にしたい」
「なるほど」
「クミンとターメリックとシナモンもグレードが落ちるわけではない」
「レッドペッパーのようではないんだ」
「特別モロッコが優れているわけではない」
「なるほど」
「モロッコではフツウに販売できる」
「エミルおつかれさま」
「なんでもない」
湯花邪無は料理学校に10分遅れた。
「ミスターユハナどうしたのだ」
「ちょっと用事だがたいしたことはない」
「みんな買い物に行くところだ」
「わかった」
「レシピだ」

イカンバカールだった。

魚の炭火焼だ。

「ヤユク今日の買い物は誰だ」

「オレだ」

「炭火はあるのか」

「アースレンジで焼く」

湯花邪無はアースレンジで魚を焼いたことなどない。

「ミスターユハナのイカンバカールはお客様には出せません」

「魚を焼いたことがない」

「次もイカンバカールにしましょう」

「これでわたしに教わったと言われたら困る」

「みんなも見た目がよくない」

ミナは、珍しく不機嫌だった。

「ただいま〜」

「おかえりなさい〜」

「今日はなんだ」

「イカンバカール」

「難しい」

「食べさせてくれ」

「みんなで食べた」

「見た目がおいしくない」

「どうしたらいいかわからない」

「先生は教えないの？」

「今日は何もしなかった」

「次もイカンバカールだ」

「お昼はどうするのだ」

「空港でそばを食べる」

「わかった」

湯花邪無はアースカーで華美美鈴を検索した。

なにもない。

パリのことは、もうどこにもない。

そもそも、車３台で華美美鈴を拉致した男たちはなんなのだろうか。華美美鈴は、いろいろな人から狙われている。いちいち詮索していたらキリがないのかもしれない。
湯花邪無は、ジャカルタ空港でおそばを食べた。
「こんにちわ〜」
「こんにちわ〜」
「エミルがモロッコのレッドペッパー５種類持っていったって電話あったけど」
湯花邪無は忘れていた。
慌てて手提げ袋を水野まさみに渡した。よく飛行機やジャカルタ空港のおそば屋に忘れなかったと思った。
「グレードが高いんですって？」
「ああ〜そうです」
「早速いただいてみましょう」
水野まさみと牧野由香は、試作上がりのレッドペッパーを取り出していた。
「バジルはどうなっているんですか？」
「毎日５００しかやってないから午前中に切れるらしい」
「試験販売ですか？」
「そうだ」
湯花邪無は、10月１日の大学での講義の原稿を仕上げようと思った。
ずっと見直した。しかし、これ以上手を加えることはなかった。リーマイの手助けが大きい。30分はリーマイの講義のようなものだ。
11月１日のターメリックを考えることにした。
モロッコのターメリックの試作のことをよく聞けばよかった。特別にモロッコ産がグレードが高いわけではないとジンは言っていた。
ターメリックはインドが原産である。紀元前10世紀頃のソロモン王が伝えたようだ。
７世紀には中国に渡っている。生薬としてだ。そもそもは、食品の色づけに使われた。黄色である。サフランの黄色と同じように使われた。
「水野さんなにかありますか？」
「順調です」

「先に帰ります」
「おつかれさまでした」
「明日はジャカルタですね？」
「そうです」
「わかりました」
湯花邪無は、北千住のスーパーマーケットで、ひき肉とトマトの缶詰を買った。ミートソースをつくり置きしようと思った。ニンニクやニンジンやタマネギはある。
そして、アース炊飯器２合をスマホからスイッチを入れた。
缶ビールを買った。
おもしろいもので、ジャカルタにいるときは、ビールを飲みたいとは思わない。北千住で買い物をする時はビールを一緒に買う。
マンションに帰って、冷凍室からイカ焼きのアース鍋と野菜炒め豚肉を出してスイッチを入れた。
フライパンを出して、ミートソースづくりをはじめた。つくり置くので、大き目のジャムの空き瓶を持ってきた。
１人なので、そうそうミートソースを食べるわけではない。ナポリタンのソースもつくり置いている。
ただ、自分でつくると長持ちする。キチンと火を通しているからだろう。
ジニから教わったアース鍋とアース炊飯器はすごい威力を発揮する。料理学校に通っていることも大きい。以前のように、帰りに北千住のお店に寄ってごはんを食べてくることが少なくなった。健康のためには望ましいことだ。
９月23日だった。
ごはんの残りに鶏肉とたまごでおじやをつくってみた。アース鍋にしてスイッチを入れておいた。
蓋を開けるまでわからない。
シャワーもできるしヒゲもあたれる。
絶好だった。
少しの醤油が絶妙だった。ターメリックを少し入れておいたのも絶妙である。
おいしい。

羽田までのアースカーで華美美鈴を検索してみた。
何もない。
９月26日に再度月に行くことになっている。何をしているのだろうか。
「おはよう」
「おはようございます〜」
声が揃っている。
「エスチャンプル85人分つくるんだよね」
ジンがすぐに聞いてきた。
「買い物はリニがやっている」
「今日は特別にデザートがついていると知らせてあるから」
「おいしくなかったらヤバイ」
「プレッシャーだな〜」
「できそうもないこと約束するから」
「自信はあります」
「ハーブティーだけど」
リニが入ってきた。
「バナナとマンゴとタピオカとオレンジジジュースは買ってあります」
「氷はなくてもいいけど」
「私が11時に取りに行きます」
「11時半になったらはじめていいのか」
「よろしくお願いする」
ジンは不思議な笑いをしていた。
「ミスタージャムがこうなるとは思わなかった」
「料理など何もしないと思っていた」
「どうなってるのだ」
「なにか変わったことはないですか？」
「順調だ」
「昨日のターメリックはありますか？」
「モロッコ？」
ジンは、スパイス工房モロッコで試作したターメリックを持ってきた。
「今売っているジャカルタのターメリックと変わらない」

「この瓶はもらっていいか」
「まだあるからどうぞ」
「なにをするのだ」
「まだよくわからない」
「ガンバって」
「11月１日の私の大学の講義はターメリックにします」
「10月はできたの？」
「半分くらいリーマイにやってもらった」
「ターメリックはガランに手伝ってもらったらいい」
「どこにいるんだ」
「ｙｕｈａｎａの森ジャカルタ」
「わかった」
湯花邪無は落ち着かなかった。
やはり社員のお昼の食事である。毎日順番で社員のお昼をつくっている社員は緊張するのだと、はじめて感じた。専門の料理人に任せるのではなくて、交代でお昼をつくることはすごくいいのではないかと思った。
10時30分になって。少し早いのだが、氷を受け取りに行った。
「ミスタージャムはじめるけど」
リニがやってきた。
「氷は用意できたのか」
「買ってきた」
「こっちのテーブルでやらないと食事をつくるから」
「わかった」
「ミスタージャムのやり方でやってくれ」
12時には85人分のエスチャンプルができた。
「わたし食べてみていいか」
「どうぞ」
「ミスタージャムも食べてみて」
すごくうまくいった。おいしい。
「わたしここにいてみんなに渡すから」
「わかりました」

「ミスターユハナはごはん食べてください」
「わかった」
「どうなの？」
ジンがやってきた。
湯花邪無とジンが一緒にごはんを食べるのは、１週間に１度くらいしかない。
「先にエスチャンプル」
「おいしいけどデザートだね」
「ミスタージャムのエプロンは似合ってる」
「料理学校ではこのエプロンしてるのか」
「そうだ」
「はじめて見た」
湯花邪無は15時になって大学に向かった。
「今日はどうするのだ」
「タベットのマンションだ」
「遅くなるのか」
「６時には帰る」
「わかった」
湯花邪無はターメリックを調べに行った。調べるといってもスパイスだから、何から何までわかっている。湯花邪無がよくわからないのは、学生達がどこまでスパイスを理解しているかだ。
湯花邪無は、文化人類学の講座を聞いていた。自分より10歳くらい若い若者たちが何を考えているのか知りたいのだ。
「トムヤムクンだけど」
「珍しいな」
「シャワーしてくれば？」
「わかった」
「なにしてたの？」
「大学です」
「なに」
「文化人類学を聞いていた」

「なんで？」
「最近の若者はスパイスをどう思っているのか」
「知りたいのか」
「ｙｕｈａｎａの森でみんなに聞けばいい」
「みんな若者だ」
「あなた料理学校に行きはじめたのはよかった」
「少しは俗世間を知ることになるから」
「私はそんなにダメ人間か」
「それがあなたの特長だからいいけど」
「シャワーしてきて」
ジンは、女遊びをしていそうもない湯花邪無が真面目過ぎると思っている。
しかし、そんな湯花邪無が安心できるのだ。
９月24日だった。
「先に行って」
「わたしシンガポールに行くから」
「寄らないで行くのですか？」
「寄るけど」
湯花邪無はアースカーで華美美鈴を検索した。
26日には、華美美鈴はまた月に行くのだ。地球以外では、湯花邪無は助けに行けない。心配なのだ。
何も情報がない。
「おはよう」
「おはようございます」
「今日はジンとわたしでシンガポールに行きます」
「珍しいな」
「２人のお客さまに会うから」
「そうか」
「料理学校ですか？」
「そうだ」
「いってらっしゃい」
湯花邪無は、料理学校に向かった。

「ミスターユハナ元気ですか？」
「ミナは元気ですか？」
「今日はミスターユハナに会えるから元気です」
「今日は何だ」
ヤユクがいつも助けてくれる。
「アヤムゴレンのレシピを配ります」
「野菜を一緒に焼くからニンジンやジャガイモなど適当に買ってきてください」
湯花邪無は、料理学校の７人とは、よい友達になった。みんなは、湯花邪無が失業したので料理学校に来ていると思っている。スパイスｙｕｈａｎａの社長などと言ったら、話すことも変わってしまう気がする。
ジンが、俗世間と言っているのは、こういうことだと思う。
「ただいま〜」
「おかえりなさい〜」
「コーヒーにしたけど」
ラナンがやってきた。
「ジンとリニはシンガポールです」
「15時くらいだと思う」
「私は新宿に行きます」
「今日はアヤムゴレンだけど褒められた」
「おいしかったのか」
「おいしかった」
「昨日のエスチャンプルもおいしかったしエプロン姿も良かった」
「ありがとう」
湯花邪無は、いつもの時間のジャカルタ行きに乗った。
今晩も北千住でアヤムゴレンをつくってみようと思った。それにジャガイモサラダが食べたい。
「こんにちわ〜」
「こんにちわ〜」
みんな元気である。
「なにかありますか？」

「順調です」
「お昼はどうしたのですか？」
「ジャカルタ空港でおそばを食べています」
「料理教室でしょ？」
「お昼をつくっているわけではないから」
「水野さんはスパイス教室やっているのですか？」
「日本茶にしましたから終わったらどうぞ」
牧野由香が日本茶を煎れてくれた。珍しい。
「これが今日のレシピです」
ジニがレシピを持ってきてくれた。はじまっていてミートボールのスパイス煮である。
スパイスを何種類も使っている。
ごはんがおいしくなりそうだった。
「１食しかありませんがクジ当たったらお持ち帰りください」
湯花邪無は、自分に食べさせてくれと言おうとしたが残念なことになった。
ジニが丁寧にパックしはじめた。
北千住のマンションの近くのスーパーマーケットで、鳥肉を買って鳥のひき肉を買った。スマホでアース炊飯器を２合炊いた。
鳥のひき肉のミートボール10個作って５個づつ２つのアース鍋に入れて味付け棚に水野まさみのレシピとおりの調理液を入れた。鍋の温度が高くなったら自動的に棚から液が鍋に落ちる。液が落ちなかったら鍋は温度が上がりすぎてアラームが鳴ってスイッチが切れる。
アース鍋でアヤムゴレンをやってみようと思った。
調理液をいくらにしたらよいのかわからない。鍋の棚にオリーブオイルとスパイスを何種類とソースを入れてスイッチを押してみた。
通常は、鶏肉は冷凍されているから、生の鶏肉では焼けすぎるかもしれないと思った。
味噌汁とポテトサラダをつくりながらアース鍋を見ていた。
意外に早くアース鍋のスイッチが切れた。
開けてみた。
焦げてはいない。

よくわからないが、冷凍庫からやったのか冷蔵庫からはじめたのか、自動でわかるようになっているらしい。
生の鶏肉からはじめたので、冷蔵庫からはじめたことになったのだろうと思った。優れものである。
おいしかった。

２度目の月へ

９月25日だった。
湯花邪無はいつものように羽田からジャカルタに向かった。通勤しているようなものだ。50分である。
昨日の残りのごはんをおじやにして食べた。たまごに岩ノリを入れてみた。けっこうおいしかった。
自分であれこれやっていくとけっこうおもしろい。
しかしタベットのマンションでは何もできない。ジンがガッチリ構えている。湯花邪無は料理など何もできないと頭から決めてかかっている。
「おはよう」
「おはようございます」
「今日はわかってますか？」
「わかってます」
「今日なの？」
「ええ」
「いいじゃない〜世間にまみれないと」
ジンもこんなことを言うのかと思ってしまう。
「わたし会計監査法人と相談あるから」
「出かけるんですか？」
「お昼には帰ってくる」
「わかりました」
「あなたはどうするの？」
湯花邪無は返事ができなかった。

ジンも気がついて慌てて振り向いた。
リニはコーヒーを煎れていた。
リニに聞こえていたかどうかだ。
「わたし行く」
「コーヒーにしたけど」
「ありがとう」
「ジンってミスタージャムのことあなたって言うんですか？」
やっぱり聞こえていた。
「４年も一緒に仕事をしてるから、１年に１回くらいあなたって言うんです」
「おかしいですか？」
「おかしくはないけど」
ミスタージャムは冷や汗が出てくるのではないかと思った。
「わたしお店にいますから用事あったら呼んでください」
「今日は何時ですか？」
「ここにいてください」
「わかりました」
10時になってラナンがやってきた。
「リニたちとカラオケなの？」
「そうです」
「イエスタデイとレットイットビーしか歌わないんだろうから」
「そうだ」
「これを歌えるようにして」
「ヘイジュードとイマジンとヘルプとオブラディオブラダ」
「こんだけ歌えたら少しはもつから」
「ガンバル」
「イヤなの？」
「うれしい」
「なにが言いたいかわからない」
「感謝してる」
「練習するの？」

「今度１度聞いてくれ」
「１週間くらい？」
「１ヶ月」
「10月23日でいい？」
「試験日みたいだな」
「わたしも忙しいから」
「わかった」
「忘れるからメモしてください」
「メールしておいていい？」
「ええ」
「10代の女４人も一緒だから」
「ラナンだけじゃないのか」
「２人で見つかったらタイヘンなことになる」
ラナンはその場で10代の若者と湯花邪無にメールをしてきた。
「ジンにはわたしから話しておくから」
「どうしてジンに話すんだ？」
「ジンだけじゃなくてみんなに話す」
「なぜだ」
「ミスタージャムのことはオープンにしておかないといけない」
「じゃ〜今日はしっかり歌って」
「わかった」
湯花邪無はＣＤと歌詞をバックにしまった。
湯花邪無は歌を得意とはしていない。カラオケも行かない。ジンともカラオケに行ったことがない。
スパイスｙｕｈａｎａは女性が78名で男性が11名だ。ジンが社長だしオンナの会社なのだ。
オーナーの湯花邪無がカラオケくらい行かないとうまくまとめられない。
しかし、ジンがカラオケに行ったという話は聞かない。だいたい、ジンが歌ったところを見たことがない。
ジンは特殊なんだろうか、それともオンナだからだろうか。
お昼になってリニがやってきた。

「ごはん頼んでおいたけど」
「行きます」
「アヤムカレーだ」
「みんながスキだ」
「私もスキだ」
「最近は料理教室に行ってるから自分で料理もやるのか」
「日本ではやる」
「どうしてだ」
「感覚的に日本料理の方が調理できる」
「日本でも料理教室に行っているのか」
「行っていない」
午後になって、湯花邪無はターメリックを探った。
「もしもし」
「ガランという社員がいるんだろうか」
湯花邪無はｙｕｈａｎａの森のステファノに電話をした。
「どうしたのだ」
「11月１日の大学の講義にターメリックを予定している」
「ジンがガランに協力してもらったらいいと言ったので」
「それはいい考えかもしれない」
「なぜだ」
「ターメリックはインド原産だが最近はインドネシアでもインドとは異なるターメリックができるようになった」
「ガランはその研究をしている」
「ターメリックの種類を集めているのか」
「ほぼ集まっていると思う」
「21種あると聞いている」
「みんな標本があるのか」
「生きている」
「10月８日に行きたいが大丈夫か」
「ガランから連絡させる」
湯花邪無はスパイスの専門家だが、ターメリックが21種もあるとは知らな

かった。
10分もしないうちに電話があった。
「ガランです」
「10月８日はｙｕｈａｎａの森でお待ちすればいいですか？」
「13時30分に行きます」
「何か用意することはありますか？」
「ターメリックが21種類あると聞いたんだけど」
「すべて見せてくれますか？」
「わかりました」
「栽培しているのですか？」
「量は多くないけど21種類栽培しています」
「どこでやっているのですか？」
「ビニールハウス」
「生産品は大量に栽培していますが」
「研究しているのか」
「中国の人のカレーには日本の人のターメリックとは異なるモノがいいようだ」
「なぜだ」
「日本の人は少し甘いターメリックがいいが中国の人は辛いターメリックがいい」
「10月８日に詳しく聞かせてほしい」
「承知しました」
やはり、仕事は人材だと、つくづく思う。
しかし、ジンがどうしてガランを知っているのか、そこが不思議である。
18時30分にリニがやってきた。
「ジンはもう帰ったのですか？」
「用事があると言っていた」
「遠くではないから」
リニは、湯花邪無と２人で街中を歩くことにためらいがあるようだった。
「どうしたのだ」
「ミスタージャムと並んで歩くと恥ずかしい」

「そんなことはない」
「今日は何人だ」
「わたしも入れて５人」
「みんな楽しみにしている」
「ジャカルタの女性はカラオケがスキだがなぜだ」
「そんなことはわからない」
「カラオケには自由があるからじゃないか」
「アイドルがスキだし」
湯花邪無は、比較的大きなカラオケボックスに案内された。レストランのようである。個室のレストランにカラオケボックスがついている。
「ミスタージャム料理を頼むから会費を出してくれ」
「15万ルピアだ」
３０００円である。これで料理を食べてカラオケができる。
湯花邪無は90万ルピアをリニに渡した。
「とりあえずこれで払ってくれ」
「イエスタデイを聞いてくれたらお礼にするから」
５人は、湯花邪無が何を言っているのかわからなかった。
「カラオケを歌ってお金を払うのか」
「聞いてくれてありがたい」
「わたしたちは聞かせるからお金ちょうだい」
５人は、湯花邪無がわかってくると、遠慮なくなんでも話すようになった。
次々に歌を歌った。
そして、湯花邪無はイエスタデイを歌った。
「おかえり」
ジャカルタの宴会は早く帰る。
お酒がないからだ。
「ごはんは？」
「お茶漬けがいいけど」
「サケがあるから」
「お願いします」
「上手く歌えたの？」

「多分」
「明日うわさが流れるからすぐわかる」
「どういうのだろうか」
「昨日は心配事があったかもしれない」
「ああ」
「あなたって言ったことは何もなかった？」
ジンはやはり心配していた。
みんながミスタージャムと呼ぶのだ。ジンだってミスタージャムとしか言わない。それをあなたと言ったらすごくおかしい。
「うわさにもなっていないようだった」
「そうか」
湯花邪無は日本の人だ。ジンはよく承知している。お茶漬けを用意してある。サケは焼いたが、冷凍してあるのだろう。
９月26日だった。金曜日だ。
「あなた先に出て」
「料理学校でしょ？」
「新宿ね？」
「そうだ」
「わたし少し遅れて出るから」
「行きます」
湯花邪無は、アースカーで華美美鈴を検索した。
予定通りのようだった。華美美鈴は、月へ出発するようだ。月駅の電源をすべてアースバッテリーに変更する。月駅の社員と月ホテルの社員32名も一緒に行く。そして工事が終わったら華美美鈴と工事関係者だけが帰ってくるようだ。
日本時間15時だ。湯花邪無は新宿のスパイス湯花にいる。
「おはよう」
「おはようございます」
リニがすぐにやってきた。
「ミスタージャム会費払ってくれてありがとう」
「歌を聴いてくれてありがとう」

「こんなんだったらみんな何度でも行きたがる」
「みんな上手だから追いつけない」
「ミスタージャムの歌は味があっていいってみんな言ってる」
「味ってなんだ」
「おいしい」
「また聴きたい」
「ありがとう」
「ハーブティーだ」
「ありがとう」
湯花邪無は、料理学校に行くまでのアースカーでも華美美鈴を検索した。
同じ情報しか出ていない。
中止ではないらしい。
天候も良好らしい。
「ミスターユハナおはよう」
ミナは、湯花邪無の名前しか呼ばない。
他の７人は、もう承知している。なんともなくミナおはようと言う。
「10月９日は大丈夫ですか？」
「平気だ」
「キャンセルしたら招待した人に失礼ですよ？」
「承知している」
他の７人は笑っている。
「今日は何だ」
いつも助け船を出してくれるのはヤユクだ。
「今日は牛肉のココナツ煮だ」
「レシピを配ります」
「買い物に行ってください」
８人は近所のスーパーマーケットに向かった。
「今日はわたしが買い物する」
サナが言ったのでみんな驚いた。
サナは裕福な主婦である。自分ではなにも家事をしない。もちろん料理もしない。

これから先はどうなるかわからないから、料理を習っている。
「ミスターユハナは少しはおいしくなりました」
「わたしの生徒だから当然だけど」
「レストランではまだ務まりませんがフロアーマネージャーだったらできます」
「イケメンだし」
「セクシーだし」
「料理をガンバル」
ミナは相変わらず湯花邪無にしか話をしていない。料理教室のみんなはもう慣れている。
「ただいま〜」
「おかえりなさい〜」
「ミスタージャムはすぐに新宿に行くのか」
リニがすぐに紅茶を持ってきた。
「なにかあるのですか？」
「ジンが今日はごはんをつくっているから」
「食べて行ったらどうか？」
「そうだ」
「新宿で打ち合わせがある」
「ジンによろしく伝えてくれ」
湯花邪無は、ジャカルタ空港でおそばを食べた。最近、ジャカルタ空港のおそばがおいしい。
「こんにちわ〜」
「こんにちわ〜」
「水野まさみさんは八ヶ岳わさび工房に出かけています」
牧野由香がやってきた。
「なにかあるのですか？」
「もうすぐ生産開始だから確かめに行きました」
「ホームページを追加しました」
「スライスわさびのメニューです」
「今日からですか？」

「みんな見ています」
「今日のお昼はステーキわさびでした」
「それは残念」
「おいしかったです」
「問題があって八ヶ岳に行ったわけではないんだ」
「そうです」
「ミスタージャムはお昼は食べたのですか？」
「空港でおそばです」
「ステーキわさびあるから焼いてきますか？」
「ごはんもありますか？」
「厨房で食べます」
「じゃ〜どうぞ」
湯花邪無は牧野由香と厨房に向かった。
厨房には誰もいなかった。
「リビングに座っていてください」
「ステーキを焼くのを見てる」
湯花邪無は、ミナの料理教室ではステーキなど焼かない。ジンはステーキを焼くのだが見たことがない。
湯花邪無は、牧野由香のステーキの焼き方をよく見ていた。
ニンジンとタマネギとジャガイモを別のフライパンで焼いた。
「ごはんまだ温かいからこのままでいいですか？」
「いいです」
ご馳走だと思った。
「最高においしい」
「スパイス湯花の社員はこんなごはんが食べられて幸せです」
「スライスわさびが最高に利いているでしょ？」
「これはおいしいな〜」
「知っていただけたらたくさん売れると思います」
「なるほど」
15時が近くなって湯花邪無は落ち着かなくなった。
「何かありますか？」

「順調です」
「わたしお店に出ますから何かあったら呼んでください」
「ジニも八ヶ岳ですか？」
「そうです」
15時近くになったのだが、よく考えてみると、月連絡船の出航をテレビ中継することはない。
15時になって検索してみた。
「華美美鈴が２度目の月へ出発しました」
「９月16日に華美美鈴は月から中継しました」
「月連絡船と月タクシーと月施設タクシーのアースバッテリー化をしました」
「今回は32人の月ホテルと月駅の社員も一緒に月に向かいます」
「月駅と月ホテルのアースバッテリー化を計画しています」
「もし成功すれば、月の電源はすべて月アースバッテリーになります」
華美美鈴は、もう地球を出発したのだ。
到着は28日の日本時間の15時になる。また落ち着かない日々になる。
湯花邪無は北千住のスーパーマーケットで、ギョーザの材料を買った。シイタケと白菜とニラとブタのひき肉である。少し大きめの焼きギョーザ５個を、アース鍋で２つ冷凍しておこうと思った。
ごはんは、アースカーからメールした。２合だ。明日の朝もおじやにする。
野菜炒めブタ肉も冷凍室からアース鍋を出してスイッチを押した。
やはり料理教室に通っているせいだと思う。おもしろくなっているのだ。

華美美鈴月駅から中継

９月27日だった。土曜日だ。
「わたし今日はお休みだからスパイスｙｕｈａｎａには行かない」
「予定は？」
ジンからメールがきた。
「いつもの時間にマンションに帰ります」

「ごはんつくって待ってる」
「わかりました」
スパイス湯花もｙｕｈａｎａも週休３日制なのだ。週に４日働く。湯花邪無は、新宿とジャカルタの両方にいるせいで、ほとんど毎日出勤している。しかし、スパイスの通常の仕事は何もしていない。水野まさみとジンに任せている。湯花邪無は社長ではない。会長なのだ。
湯花邪無は北千住からのアースカーで華美美鈴を検索した。
情報が何もない。地球から月に向かって飛行中なのだ。
「おはよう」
「おはようございます」
リニがハーブティーを持ってきた。
「今日はジンがお休みです」
「わかりました」
「わたしはムンバイに行ってきます」
「なんですか？」
「ジャカルタの宅配業者がムンバイに行きます」
「どんなところか見てきます」
「誘いがあるんだ」
「インドやると確実に品切れになるから慎重にと思っています」
「今でもムンバイからの注文はあるんでしょ？」
「送料が高いから特別のファンだけになります」
「なるほど」
「とりあえず見てきます」
「わかりました」
「今日はラナンもお休みの日です」
「わかりました」
「お昼はどうしますか」
「スパイス工房へ出かけます」
「エミルには？」
「話していません」
「今日はエミルはいますからお昼を用意するように頼んでおきます」

「ありがとう」
湯花邪無は、11時になって、スパイス工房に向かった。
「今日はスパイスｙｕｈａｎａには返りません」
「わかりました」
リニにメールしておいた。
リニはムンバイから帰ってくる。
「エミルこんにちわ〜」
「珍しい」
「ごはん食べながら相談したいことがある」
「じゃ〜ここにごはんを持ってきてもらいますか？」
「いいですか？」
「わたしが持ってくるから待ってて」
「わかりました」
まだ時間は早かったのだが、お昼ごはんができていた。
「それで話ってなんですか？」
「ガパオごはん」
「バジル発売したからお昼もバジル多くなった」
「ああ〜おいしそうだ」
「タイ料理」
「いただきます」
「おいしいな〜タイのごはん」
「おいしい」
「リーマイのことなんだけど」
「スパイス足りなかったらある」
「ありがとう」
「リーマイを調査に出そうと思うんだけど」
「中国ですか？」
「多分昆明にｙｕｈａｎａの森昆明をつくるんだろうけど」
「スパイス工房をどうするかもある」
「モロッコがまだ立ち上がってないけど」
「だから調査です」

「やるんだったら準備させた方がいい」
「中国に行かせるのか」
「リーマイはもう決めてるから」
「ｙｕｈａｎａの森昆明の具体的な場所を探させた方がいいと思う」
「スパイス工房も昆明なのか」
「それはわからない」
「上海でもいいかもしれない
リーマイのことはエミルに任せることにした。いつでもいいから中国の準備のために昆明に行くように伝えた。
湯花邪無は、エミルに伝えた内容をジンにメールした。夜話せばいいことなのだが、忘れてしまうことがある。気がついているときにメールする方が好ましい。
「承知した」
ジンが何をしているのかわからない。
今日は休みである。どこにいるかもわからない。
15時になって、湯花邪無は、ｙｕｈａｎａの森ジャカルタに向かった。
「ダカラこんにちわ〜」
「珍しい」
「よくないな」
「ガランいますか？」
「呼びます」
「平気ですか？」
「多分」
「じゃ〜私が行きます」
「ステファノのところに行ってください」
「わかった」
湯花邪無は、ダカラに珍しいと言われたことが気になっていた。
あまりｙｕｈａｎａの森に来ていないことだ。敷居が高いわけではない。毎日新宿かジャカルタに出勤している。週休３日なのだが、湯花邪無はほとんど休まない。
それなのに、ｙｕｈａｎａの森にはあまり顔を見せないことは、よくない。

「ステファノこんにちわ〜」

「珍しい」

またダカラと同じ事を言われた。

「アイチャは元気にやっているんだろうか」

「採用をしている」

「もうすぐｙｕｈａｎａの森モロッコがスタートする」

「アイチャは忙しいのか」

「時間があったら行ってやってくれ」

「10月４日に予定する」

「アイチャに連絡する」

「ガランはいるのか」

「ここで待っていてくれ」

ステファノはアイチャに連絡に行ったのだろう。

そしてガランがやってきた。

「こんにちわ〜」

「ガランですか？」

「10月８日と聞いていたけど」

「たまたま来たから会っておこうと思って」

「顔を見たかったの？」

「そうだ」

「美人かどうか？」

「ああ〜そうだ」

「それでどうなの？」

「キレイだ」

「一緒にターメリックやる気になった？」

「そうだ」

「準備する」

「ありがとう」

「ミスタージャムは教授なの？」

「そうだ」

「スパイス学の？」

「そうだ」

「わたしは何をすればいいの？」

「ターメリックの種類に写真はありますか？」

「ミスタージャムは持ってないの？」

「あるけどガランは？」

「全部ある」

「わたしの勉強用だけど」

「どうやって育てるかもある」

「どうしてターメリックに詳しいのだ」

「興味があるだけ」

「写真揃えて説明書いておけばいいの？」

「スパイス工房で商品にするところは？」

「一緒に撮ろうと思っているんだけど」

「一応用意しておく」

「ありがとう」

「わたしの仕事だからありがとうはいらない」

ガランは気さくな若者だった。

勉強熱心でもあるのだろう。

「今日ガランに会ってきました」

「ｙｕｈａｎａの森に行ったんだ」

「きさくな女性だった」

「彼女いいわよ」

「それで一緒にやるの？」

「ターメリックだよね」

「詳しそうだった」

「わたしも知ってるくらいだから」

「なぜだろう」

「仕事熱心だってアイチャが言っていた」

「アイチャ情報なのか」

「モロッコで話した」

「なるほど」

「シャワーしてきたら？」
「着替えは置いてあるから」
９月28日だった。日曜日だ。
湯花邪無は久しぶりに朝寝をした。
ジンも休みだった。
10時になって、ジンがまた飛んできた。
「珍しい」
「２人で休んでたらこうなる」
「お腹が空いた」
「おいしいパンを買ってある」
ジンは上にシャツを着てコーヒーを煎れにいった。
今日は華美美鈴が月に到着する。ニュースも何もやってないので順調なのだろう。
到着しましたとニュースが流れるかどうかもわからない。
湯花邪無とジンは、朝ともお昼ともわからないごはんを食べた。パンである。
13時になってスポーツジムに２人ででかけた。
２人で出かけることは控えているのだが、スポーツジムは大丈夫だと思っている。見つからない理由などない。見つかったらそれでもいいと覚悟している。
「わたし先に出て買い物してる」
「ショッピングセンターのいつもの駐車場で待ってる」
「何時ですか？」
「多分15時30分」
「わかりました」
ジンは15時前になってメールしてきた。シャワーをして着替えをしたのだろう。
湯花邪無は、シャワーをして、急いでアースカーに向かった。湯花邪無とジンは、別々のアースカーに乗っている。
もうクセになっている。会社に出かけるときのクセだ。
まだジンは来ていなかった。隣の車がジンの車である。

湯花邪無は、急いで華美美鈴を検索した。
何もニュースがない。日本時間の15時だからまだ到着していないのだろう。
「おまちどう〜」
「待った？」
「いいえ」
「今日は元気が出るようにギョーザつくろうと思って」
ジンは、その夜も襲ってきた。
「悔いが残らないようにチャンスがあったらガンバル」
「悔いが残らないようにってどういう意味だ」
「先のことはわからない」
「ミスタージャムに新しいオンナができるかもしれない」
「想像できないけど」
「わたしにはイメージできる」
９月29日だった。
「わたし先に行くから」
「何かあるのですか？」
「お客さんがくる」
「ジャカルタのお客さん」
「朝ごはん一緒に食べる」
「あなたのごはんだけ用意してあるから」
「ありがとう」
ジンは、夜の接待を一切しない。
朝かお昼ごはんを一緒に食べているようだ。
「おはよう」
「おはようございます」
「ジンはさっき来ましたけど朝ごはんに行きました」
「お客さんです」
「わかりました」
「ハーブティーです」
「ありがとう」
「すぐに料理学校ですか？」

「そうだ」

リニがやってきて用事だけを伝える。

「何かありませんか？」

「順調だ」

湯花邪無は、華美美鈴のニュースがないことが気になっていた。

何度も検索しているのだが、何もない。無事に月に到着したのだろうか。

月駅を検索してみた。

「月駅の社員は無事に月駅に到着しました」

「早速月アースバッテリーに電源を切り替えています」

月連絡船は、無事に月駅に到着したようだ。

「ミスターユハナおはよう」

「おはようございます」

「10月９日は空けてありますか？」

「大丈夫だ」

「招待だからキャンセルしたら失礼になります」

「今のところなにもない」

「失業中なのにどうして忙しいのか」

「いろいろある」

「仕事を頼まれたことがない」

「選ばなければわたしはたくさん紹介できる」

「すぐに仕事はできる」

「今は修行中だから」

「今日は何だ」

ヤユクがいなかったら延々とミナは湯花邪無に話しかける。

「マーボ豆腐だ」

「これはオレにやらせてくれ」

ヤユクと同じように、夜レストランで働くオトコのモジルが言った。

８人は近所のスーパーマケッとに向かった。

「ひき肉を買ってくれ」

「ブタはダメだ」

「牛でマーボ豆腐をつくるのか」

「日本人はブタでもいいだろうけどオレたちはブタは食べない」
「わかった」
「豆板醤はどうするのだ」
「売ってるのを買うしかないだろう」
湯花邪無はマーボ豆腐はなじみがある。
しかし、ジャカルタでは、頻繁に食べられるわけではない。中華のお店でないと食べられない。
「ミスターユハナマーボ豆腐はおいしいです」
「やったことがあるのか」
「ない」
「どうしておいしいのだ」
「わからない」
「わたしと同じくらいおいしい」
「ありがとう」
「誰か料理つくってくれるのか」
「私がごはんをつくっている」
「誰か料理してるのではないのか」
「オレのマーボ豆腐もおいしいけど」
ヤユクがやっと口をはさんだ。
「ただいま〜」
「おかえり〜」
「すぐに新宿に行くのか」
「そうだ」
「ジンは帰ってまた出かけた」
「なんだ」
「シンガポールのお客さんだ」
「わかった」
「お茶は？」
「ありがとうだけど新宿に急ぎます」
「気をつけて」
湯花邪無はジャカルタ空港でおそばを食べた。かき揚げがおいしい。

おそばを食べながら華美美鈴をチェックした。
何もいない。月で何をしているのだろうか。アースバッテリーに切り替えているのだが、うまくいっているのだろうか。
「こんにちわ〜」
「こんにちわ〜」
「今日は何かありますか？」
「順調だ」
「ミスタージャムはお昼は食べたの？」
「おそばを食べた」
「じゃ〜お茶でいいの？」
「できたらコーヒーを」
「了解」
牧野由香はコーヒーを煎れてきた。
「水野まさみさんは？」
「銀座のお客さんと食事です」
水野まさみもジンと同じように夜の接待はしない。
「今日は新宿ですか？」
「そうです」
「わかりました」
湯花邪無は、華美美鈴を検索した。
「華美美鈴が月から中継を行う」
簡単だがメッセージが出た。
何時からなのかわからない。
湯花邪無は、そのままにして10月１日のレッドペパーの講義のスライドを開いた。準備はできているのだが確認しておかないといけない。
スライドを読みはじめてすぐだった。
「みなさんこんにちわ〜」
「華美美鈴です」
「月駅と月ホテルのアースバッテリー化を終了しました」
「ご覧いただいているのは月駅です」
「アースライティングもできていますし月連絡船のコントロールもアース

バッテリーで動きます」
「次に、先ほど撮影してきた月ホテルの様子をご覧いただきます」
「ロビーです」
「アースライティングです」
「予約などのシステムもアースバッテリーです」
「部屋の空調やシャワーなどもアースバッテリーで動いています」
「アースバッテリーなので機械的な故障はあり得ますが、機械的な故障がなければずっと動くことになります」
「どうぞ快適な月へいらっしゃってはいかがでしょうか」
「どうもありがとうございました」
10分程度の中継だった。
華美美鈴はいつ地球に帰ってくるのだろう。どこにも情報がない。多分今晩か明日だろう。
とりあえず安堵だった。

華美美鈴月から帰還

18時に湯花邪無は、北千住のマンションの近くのスーパーマーケットにいた。卵とジャガイモとニンジンとキュウリを買った。ジャガイモサラダが食べたくなった。ミートソースを瓶に詰めてある。
北千住の夜はホントに寂しい。スマホから新世界を聴いている。スピーカーに飛ばして聴いている。
ＣＤもなくなった。
９月30日だった。
コーヒーにパンを食べてアースカーに乗った。
「日本時間15時にフロリダに到着予定です」
アナウンサーが言っている。
多分、華美美鈴のことだ。
ニューヨークのライブテレビをつけてみた。
多分、月出発ではニュースにならないだろう。

「おはよう」

「おはようございます」

「今日ｙｕｈａｎａの森モロッコのテニスコート１０００枚分の土地の支払い20万ドルをアマルに振り込むから」

「わかりました」

「スパイス工房モロッコ柴田五郎さんの会社に30万ドル振り込むから」

「わかりました」

「モロッコは順調」

「ありがとう」

「明日スパイスｙｕｈａｎａカサブランカが資本10万ドルでスタートするから」

「ええ」

「社長はわたし」

「お願いします」

「わたし明日カサブランカに行くから」

「ええ」

「ｙｕｈａｎａの森モロッコ40万ドルの資本でスタートするから」

「ええ」

「社長はアイチャ」

「ええ」

「スパイス工房モロッコ50万ドルの資本でスタートするから」

「ええ」

「社長はエミル」

「ええ」

「それから〜ここのアースバッテリー化も明日だから」

「わたしいないからリニに頼んであるから」

「電源落とすのはお昼休みの30分だけだから」

「わかりました」

「今日と明日はそれだけ」

「それと〜スライスわさび生産開始」

「ええ」

「大丈夫？」
「大丈夫だと聞いています」
ジンは、すっかり社長になってきた。
「今日の予定は？」
「何もありません」
「晩ごはん食べられる？」
「お願いします」
「わかった」
「わたしお店に出てるから」
「何かありませんか？」
「ここは順調」
「わかりました」
ジンはお店に出るのだろう。下に降りていった。
「ミスタージャムは今日はお昼はどうするのだ」
「お願いしたい」
「ジンは外で食べるらしいけどいいのか」
「じゃ〜リニと食べていいか」
「わかった」
「ジャワティーだ」
「ありがとう」
何事もなく動いている。みんな忙しいそうだ。湯花邪無だけが何もすることがない。
「スパイス湯花の昨日までの販売実績を送ります」
「今日で月末です」
水野まさみから販売実績が送られてきた。商品別の販売実績だ。
湯花邪無は、販売目標をつくってくれと言ったことがない。だから達成率などの欄がない。販売実績で、ほぼ状況が掴める。そう商品の数が多いわけでもない。
「売上が上がっているが生産の方が追いつかないのですか？」
「エミルはモロッコの生産も期待している」
「明日立ち上がるから」

「明日分のスライスわさびはもうなくなりました」
「お店にはないのですか？」
「少しありますが午前中でしょう」
「わかりました」
12時になってリニがやってきた。
「ジンは出かけました」
「帰ってこなかったけど」
「エプロンのままごはん食べに出かけたから親しい人だと思う」
「お客さんじゃないのか」
「多分」
「行くけど」
「わかった」
「白ごはんにチャブチャイだ」
「おいしそうだ」
「トレイ持って」
「ああ」
白ごはんに八宝菜におかずが４種類もついてくる。
湯花邪無は、このごはんのおかずがよくわからない。料理教室でもやらない。佃煮のようでもある。
「このおかずのようなものはなんだ」
「家にはそれぞれのおかずを持っている」
「ごはんさえあれば食事ができるようになっている」
15時になってジンが帰ってきた。
「今日はリニとごはん食べたの？」
「チャブチャイだった」
「わたしお母さんとごはんしてきた」
湯花邪無とジンは４年になる。ジンの口からはじめて家族の話が出た。お母さんだ。湯花邪無は、ジンの家族のことを聞いたことがない。ジンも湯花邪無の家族のことを聞かない。
「お母さんは何がスキなのか」
「刺身」

「和食のお店に行ったのか」
「そうだ」
「元気なのか」
「わたしより元気」
「私のことは話しているのか」
「話しているがオーナーだとは言っていない」
「一緒に住んでいるオトコ？」
「日本人のオトコと一緒に住んでいる」
「騙されないようにしろって言っている」
「なるほど」
「こういう話はマンションでしないとヤバイ」
「わかった」
17時になって湯花邪無はジンより先に出た。
「うん？」
「ああ〜寄るとこあるから」
「遅くならないで」
湯花邪無は黙っていた。リニが入ってきたのだ。
「リニあしたよろしく」
「なんでしょうか」
「アースバッテリー」
「12時30分から13時までですから」
「わたしは何もしません」
「ジンがいないから」
「わかりました」
「お出かけですか？」
「先に帰ります」
「大学で講義ですか？」
「そうです」
「料理教室は休みですか？」
「そうです」
「わかりました」

「お先に」
ジンは何も言わなかった。リニは湯花邪無と一緒に階段に向かった。
いつかリニに見つかる気がする。
湯花邪無は、アースカーで華美美鈴を検索した。
フロリダ到着予定は、日本時間10月２日の15時だ。
それだけの情報しかない。
華美美鈴は地球に向かっていることは確かであろう。
べつに寄るところなどないのでタベットのマンションに向かった。
「どうしたの？」
「もう終わりました」
「寄ってきたの？」
「ええ」
「わけわかんない」
「シャワーしてきます」
「ビーフジャワカレー」
「すぐ出ます」
「わかった」
ジンはジャワカレーにギョーザも用意していた。
「ギョーザもですか？」
「ガンバれるから」
「ああ〜よく考えるな〜」
「いただきましょう」
「いただきます」
ジンはギョーザをつくったように挑んできた。
10月１日だった。水曜日だ。
「もしもし」
「ミナ？」
「どうしたのだ」
「今日は急用あって料理教室に行かれない」
「面接でもあるのか」
「そんなようなもんだ」

「ガンバってやれって言うしかないのか」
「そうだ」
「わかった」
「みんなによろしく言ってくれ」
「わかった」
今日は、ジンはカサブランカに出かける。
ｙｕｈａｎａの森モロッコもスパイス工房モロッコもスパイスｙｕｈａｎａカサブランカも今日からスタートする。
湯花邪無もモロッコに行くべきかもしれないのだが、ジンに任せている。
社長はジンの方が向いている。エミルも経営者としてのセンスがある。
「おはよう」
「おはようございます」
湯花邪無は、少しの時間でも、スパイスｙｕｈａｎａに顔を出す。
「ジンはカサブランカです」
「今日からモロッコのお仕事がはじまります」
「わかりました」
「今日は講義ですか？」
「そうだ」
「レッドペッパーですか？」
「そうだ」
「コーヒーにしました」
「ありがとう」
湯花邪無はゆっくりしてはいられない。
月に１度のスパイスの講義だ。
９月１日の１回目はコショウを講義した。今日はレッドペッパーだ。
１ヶ月に１度しかない講義だからだろう、コショウの講義には人気があった。
「リニ行ってきます」
「お昼はどうしますか？」
「今日は大学に終日います」
「新宿に話したのですか？」

湯花邪無は、その場で水野まさみに電話をした。
「何かありますか？」
「わたしは八ヶ岳に行きます」
「新宿駅にいます」
「今日からスライスわさびの生産と販売の開始です」
「わかりました」
「明日はジャカルタですか？」
「そうだ」
「わかりました」
ジンも水野まさみも２人の社長は忙しい。湯花邪無は大学でレッドペッパーの講義をしている。
湯花邪無は、アースカーで華美美鈴を検索した。
華美美鈴は月から帰還中だ。
ニュースが何もないということは飛行が順調だということでもある。
フロリダ到着は、日本時間の15時である。
「それでは２回目のスパイスの講義をはじめます」
「今日はレッドペッパーです」
「レッドペッパーの原産は中南米です」
「コロンブスはコショウが欲しかったのですが、レッドペッパーしか手に入らずに、それを持ち帰りました」
「それ以降、世界にレッドペッパーは広まりました」
「その後、中国や韓国などでは、主要なスパイスになりました」
湯花邪無は、美人のリーマイが出てくる30分のレッドペッパーの種類や栽培やレッドペッパーの製品化の映像を流した。
リーマイの声はジャカルタの若者には聞きやすい
湯花邪無のスパイス講義はオープンで行われている。もちろん、スパイス学の学生以外でもたくさん集まる。
湯花邪無は、スパイスの会社のオーナーでもある。女子学生だけではなくて男子学生にも人気が高い。
大きな教室で満席になる。
湯花邪無は、お昼を学食で食べた。

学生達の視線を浴びていることは知っていた。
しかし、誰も話しかけてはこない。
どうしたらいいのかわからないのだろう。
湯花邪無の会社に就職したい学生もいるのだろうが。
湯花邪無は、大学に研究室を持っていない。月に１度の講義である。学生の指導も行わない。もちろん試験問題もつくらない。
午後から図書室にこもった。
11月１日の講義はターメリックをやる。
ターメリックは、ジン情報でガランに協力してもらうことになっている。
ガーリックを調べた。調べたというか、学生にわかりやすく話せるかどうかを調べた。オープンで講義をやっている。スパイス学ではない学生が多いのだ。おもしろくなかったらドンドン減っていく。難しくても減っていく。
ピラミッドの建設でのチカラの元にニンニクが与えられた。６０００年も前だ。ここからはじめるのがいいだろうと思った。
12月１日はガーリックがいいかと思った。
「リーマイ今日はありがとう」
「学生達はみんなリーマイを楽しんでいた」
「何のお礼もできなかったけど」
アッという間に返事が来た。
「気になっていたけど平気だったのか」
「２５０人の学生だった」
「うまくいった」
「食事券いただいて友達と食事してきた」
「11月１日はターメリックでガランに応援を頼んでいる」
「12月１日はガーリックをやろうと思っている」
「わたしにやらせてくれ」
「スパイスｙｕｈａｎａはガーリックパウダーを販売している」
「わたしは栽培から製品まで説明できる」
「写真もたくさんある」
「11月５日にスパイス工房に行ってもいいか」
「待っている」

「エミルに話しておいてくれないか」
「わかった」
「今日のスライドをパブリックホルダにアップしてくれないか」
「わたしはデーターを持っているがアップの権限がない」
「今やる」
湯花邪無は、新宿とジャカルタのパブリックホルダに、レッドペッパー湯花邪無＆リーマイとしてアップした。
すぐにリーマイからメールがきた。
「タイトルにわたしの名前もあるが」
「感謝している」
「11月５日も楽しみにしている」
「わかった」
水野まさみからもメールがきた。
「レッドペッパーまだチラだが、みんなの学習になる」
「ありがとう」
「ジャカルタでは主たるスパイスではないかもしれないがわさびもやってもらえないか」
「スライスわさびの生産は何も問題はなくやれている」
「明日から販売も行う」
「今日の夕方ネット販売分は八ヶ岳わさび工房から出荷する」
「わかった」
「わさびの講義はどこかで行います」
ジンからもメールがきた。
「どこにいるのだ」
「レッドペッパーありがとう参考になる」
「今晩はどうするのだ」
「大学にいる」
「今晩はタベットだ」
「うれしい」
「ｙｕｈａｎａの森モロッコもスパイス工房モロッコもスパイスｙｕｈａｎａカサブランカも今日から仕事をはじめた」

「みんな順調だ」
「スパイスｙｕｈａｎａカサブランカではお客さんが多い」
「順調だ」
「わかった」
「ありがとう」
湯花邪無は、もう今日１日は終わった。気がかりは、華美美鈴である。
地球に帰還中であるが、様子がわからない。
湯花邪無は、少し早めにタベットのマンションに帰った。ジンはまだ帰っていなかった。
カサブランカだから遅くなるだろう。
「モロッコ料理をテイクアウトして帰るから食べに行かないで」
「遅くなる」
「棚にクッキーがある」
ジンは、湯花邪無がどうするかよくわかっている。お腹がすくのだ。大学から帰り道おすし屋に寄るかもしれないとわかっている。
湯花邪無は、月水金が北千住のマンションである。ジンがタベットのマンションかどうかわからない。今日は水曜日である。
湯花邪無は、何も聞かないことにしている。
「ラム肉のスパイス煮とごはん」
「スープだけやるから」
「お腹すいたでしょ？」
「クッキーを食べていた」
「シャワーしたの？」
「ええ」
「すぐだから」
その夜もジンは挑んできた。
10月２日だった。
「わたしお休みの日だけどリニとラナンにモロッコのこと伝えないといけないから」
「先に行くから」
「ええ」

「お昼には帰るから」
「わかりました」
「あなたここに帰るでしょ？」
「ええ」
「うれしい」
「お先に」
「どうぞ」
湯花邪無は華美美鈴を検索した。
何も情報がない。多分いいことなのだ。
今日の日本時間15時まで待たなければいけない。
「おはよう」
「おはようございます」
「ジンが待っています」
「わかりました」
モロッコの話をリニとラナンにしたのだろうか。
「おはよう」
「おはよう」
「話があるのですか？」
「ミスタージャムは土曜日にアイチャのところに行くのですか？」
「そうだ」
「リニとラナンを一緒に連れて行ってください」
「見学だから」
「いずれ作業に行くことがあるんだろうけど」
「とりあえず行き方だとがわからないと困る」
「わかりました」
「８時の飛行機でいい？」
「わかりました」
「じゃ〜リニもラナンもお願い」
「わかりました」
「じゃ〜わたしお休みだから帰ります」
「どうぞ」

ジンは、それだけ言うと急いでアースカーに向かった。何か用事があるのだろう。
「ミスタージャムお昼はここで食べるのか」
「お願いしたい」
「わかった」
「今日はラナンと一緒に食べてくれ」
「わたしはシンガポールに出かける」
「わかった」
みんな忙しい。
今日は何度も華美美鈴を検索している。
新しい情報は何もない。
12時になってラナンがやってきた。
「10月23日だけど」
「カラオケなのか」
「みんな10代だ」
「イマジンを覚えてくれ」
「ヘイジュードを覚えてくれ」
「イエスタデイはまだ完全に覚えてない」
「みんなのリクエストだから」
湯花邪無ははじめて聞いた。湯花邪無にリクエストをするのか。
湯花邪無は午後になって落ち着かなくなった。
「ちょっとブックストアーです」
「いってらっしゃい」
こういうときでもみんな声が揃っている。
練習している様子はない。
とりあえずブックストアーに行ったのだが、本を探しているわけではない。
そのまま下に降りてカフェに入った。
華美美鈴を検索した。
新しい情報は何もない。
パソコンを開いた。
フロリダに到着したはずである。

記者会見があると言っている。

「月旅行は安全になりました」

「月のすべてのエネルギーは月アースバッテリーになりました」

「どうぞ月にお出かけください」

「どうもありがとうございます」

「わたしはこれからモスクワに行きます」

「モスクワ発の月連絡船のアースバッテリーを依頼されています」

「モスクワからの月連絡船のアースバッテリー化を行います」

それだけ言うと華美美鈴は元気そうに歩いて車に向かった。

どうしてクスコなのだ

飛行機が乗っ取られた

「ただいま〜」
「おかえりなさい〜」
「イマジンを送ったから」
「覚えてくれ」
ラナンが早速やってきた。
「わかった」
10分経った。
湯花邪無はモロッコの状況を整理していた。ジンがうまくやってくれているのだが、気になっている。
警察庁の有村聡から電話だった。
「華美美鈴のプライベートジェットが乗っ取られた」
湯花邪無は何のことかわからなかった。少し前に月から帰ったばかりである。
「ニューヨークに行くときなのか」
「クスコだ」
「どうしてクスコなのだ」
「それはわからない」
「飛行機はどうなっているのだ」
「とにかく知らせておく」
「なぜだ」
「多分ニュースにならないから知ることができないだろうから」
警察というのはすごいものだと思ってしまう。
しかし、どうしたものかさっぱりわからない。
華美美鈴警備チームのサマンサやジムや２人の警備員も同じプライベートジェットに乗っていたに違いない。
操縦士も仲間のはずである。

それがどうして乗っ取られたのだろうか。
意味がわからない。
犯人達は何をしたいのだろうか。クスコに行かれたら困るのだろうか。
そもそもモスクワに行くと言ったではないか。
モスクワ発の月連絡船に乗ると言った。スケジュールを言わなかった。
湯花邪無は、動きようがなかった。華美美鈴が危ないのかどうかもわからない。
ここにいても、誰からも情報が入ってこない。
湯花邪無は、17時ジャカルタ発リマ行きを予約した。
「ラナン先に帰ります」
「イマジンを覚えて」
「わかった」
湯花邪無は、アースカーからジンに電話をした。
「急用ができて東京に行かないといけない」
「新宿で何かあったのか」
「私のプライベートのことだから心配いらない」
「明日は料理学校なのか」
「そのつもりだ」
「ごはんつくってるのに」
「埋め合せはする」
「高くつく」
「わかった」
湯花邪無は、リマに華美美鈴がいると思っているわけではない。ただじっとしているよりはマシだとおもっているだけだ。それにフロリダから乗っている。多分南だと思った。アメリカのどこかに着陸するとウオッチされる。行き先はクスコになっていたはずである。クスコに向かわないと不思議がられる。
ジャカルタ時間の20時にリマに着く。着いてどうするかなど考えていない。
湯花邪無は、アースカーの中でジーンズのパンツに履き替えた。ジャケットを薄手のものにした。濃紺のジャケットだ。
皮のショートバッグの中にパスポートと財布とスマホを入れた。

リマ時間10時だ。いい天気だった。
リマ空港でプライベートジェットを探した。茨城空港で見た。覚えているかどうかもわからない。
こんなところにはいないと思うのだが、情報が何もないのだ。わからない。
「プライベートジェットの到着を待っているのだが」
「遅れているのか」
「話せない」
「フロリダからは１機だけか」
「そうだ」
「ありがとう」
これ以上しつこいと疑われて調べられる。
１台だけあったフロリダからのプライベートジェットを調べようと思った。
確率的には望みはない。
プライベートジェットの格納庫がある。
金網から中へは入れない。
それでもよじ登った。見つかって撃たれても文句は言えない。監視カメラの存在に気をつけた。少し遠くでよじ登った。
格納庫を持っているプライベートジェットもある。格納庫を借りているプライベートジェットもあるのだろう。
幸いなことに濃紺のジャケットにブルーのジーンズのパンツだと、格納庫の担当者のように見える。
ショートバックをベルトに結んで歩きやすくした。
最初の格納庫で帽子を手に入れた。
これで完全に担当者である。
３つ目に格納庫に入った。
何人も出入りしているのだが、誰も湯花邪無のことを不審に思う人はいないようだった。
茨城空港で見たような小型ジェットがあった。ここはリースされた格納庫のようだった。
点検を装って見たことのある小型ジェットに近づいた。
少し大きいジェット機には３人が作業をしていたが、小型ジェットには誰も

いなかった。
それでも中を見ることはできない。タラップは中からしか操作できないのだろう。
湯花邪無は、格納庫の端にあった移動式のタラップに乗ってみた。自動車になっている。カギがそのままだった。エンジンをかけてギアを入れてアクセルを踏んだ。大きいジェットのためのタラップなのだろう。
小柄ジェットの横につけてエンジンを止めた。
大きいジェットで作業をしている３人は、フツウに作業をしている。何かを運び出しているかのようだった。
湯花邪無は、タラップを上って小型ジェットの中を見た。真っ暗だった。車から懐中電灯を持ってきた。
中を照らして、いきなり発砲されるかもしれない。
中を照らして見た。最後尾の右側だけが少し開いていた。
座席に何人か座っている。縛られている。口にテープが巻かれていた。
１番近くいたのはサマンサだった。目が大きく見開いた。多分湯花邪無だとは気がつかないと思った。
どうすればいいかわからない。
もしかしてハイジャックの犯人も中にいるかもしれない。
湯花邪無は格納庫から出て電話をした。
「プライベートジェットの格納庫の責任者と話したい」
「華美美鈴が監禁されている」
「３号庫の小型ジェットでタラップを横付けしてある」
「縛られている至急調べてくれ」
なにか言っていたがすぐに切った。
湯花邪無は、少し大きいジェットの４人目の作業員のような素振りをして見ていた。
「なにか用事か」
「格納庫の電気を点検して歩いている」
「気にしないでくれ」
３分もしないうちに、６人くらいの制服を着た警備員のようなオトコがやってきた。

湯花邪無が動かしてきたタラップを上って中を照らしていた。
すると小型ジェットからタラップが降りてきた。
５人の警備員が駆け上がった。
発砲音も聞こえなかった。
少し大きいジェットの３人の作業員も、じっと見ていた。尋常ではないことに気がついた。
ジムとサマンサと華美美鈴の警備員２人が降りてきて、下着姿の中年のオトコが降りてきた。
機長だと思った。犯人は機長の服装でプライベートジェットの格納庫から出たのだろう。
格納庫ではキーを預かる。
そして華美美鈴が降りてきた。
なにもないようだった。元気そうである。
湯花邪無は、越えた金網のところまで走った。
もしかしたらカメラで捕らえられているかもしれないとは思った。そのまま一気に金網に飛びついて駆け上がって越えて走った。
時計を見た。11時だった。１時間で終わった。
こうなるとは思わなかった。
「どこにいるのだ」
サマンサから電話だった。
「空港搭乗口に走っている」
「ジャカルタの料理学校に行かないといけない」
「ありがとう」
「カンが当たった」
湯花邪無は11時30分のジャカルタ行きに乗った。
ジャカルタ14時30分だ。ジャカルタ時間の４時30分だ。
湯花邪無は、ジャカルタ空港ホテルで少し眠った。
アースカーから着替えを持ってホテルの入った。
少しは眠れる。
今日は料理学校だ。

和食料理教室に切り替え

「おはよう」
「おはようございます」
ジンが怒っているのではないかと思った。
「おはよう」
「昨日のごはん食べて」
湯花邪無は、何も食べていなかった。昨日夜ジャカルタを出る時も食べるどころではなかった。
今朝もぐっすり眠った。
アヤムゴレンに野菜炒めごはんだった。
「いいのか？」
「ハーブティーだ」
「今日はリニは休みだ」
「ラナンは買い物に行っている」
そんな声を聞きながら湯花邪無はアヤムゴレンに野菜炒めごはんを食べた。
「何も食べてないの？」
「忘れた」
ジンは呆れた顔をして見ていた。
「料理教室遅れるから行く」
「全部食べてからにして」
「そうする」
呆れているジンをそのままに湯花邪無はアースカーに向かった。
華美美鈴を検索した。
「華美美鈴はフロリダからモスクワではなくてクスコに行ったようです」
「クスコの街のアースライティングのようです」
「今日すべてのクスコの電灯がアースライティングになります」
クスコの街が全面アースライティングになったのだ。
フロリダからクスコの飛行機が乗っ取られたことは誰も知らない。
最初からクスコは決まっていた。

華美美鈴は、モスクワに行くと言った。クスコ行きをジャマされないためだ。
しかし犯人に乗っ取られた。
有村聡は知っていた。知っている人は知っている。クスコの街の上層部は知っていただろう。
クスコにプライベートジェットが着かないことで一部で騒ぎになったのだろう。それが有村聡にも伝わった。
「ミスターユハナおはよう」
「水曜日は休みだったが」
「就職できたのか」
「まだわからない」
「わたしに預けてくれないか」
「自分のことは自分でやるから」
「ミスターユハナはいい車に乗ってるけど」
「友達のだ」
「今日の料理はなんなんだ」
ヤユクがいつも助けてくれる。
「トムヤンクンです」
「タイの料理だけどジャカルタでもたくさん食べられています」
「レシピを配ります」
「これはオレがやる」
ヤユクと同じように夜のレストランに勤めているモジルが言った。
「ミスターユハナはどうするのだ」
「料理人になるのか」
ラエルが歩きながら聞いてきた。
「プロにはなれないと思う」
「プロになる気持ちはあるのか」
「ない」
「どうして料理学校に来てるのか」
「自分でおいしい料理をつくって食べたい」
「結婚する気はないのか」

「失業中だ」

みんな湯花邪無に興味津々なのだ。

「ただいま〜」

「おかえりなさい〜」

「今日はなにをやったのだ」

「トムヤンクン」

「タイ料理だけど」

「ジャカルタでもたくさんやっている」

「新宿に行くのか」

「そうだ」

「わたしシンガポールに行くから一緒に行く」

「私のアースカー？」

「帰りはタクシーにする」

「どうしてだ」

「一緒にいたい」

リニが入って来るのではないかと思った。

「大丈夫〜ムンバイに行ってる」

「あなたの顔がおもしろい」

「出れる？」

「ええ」

ジンと同じ車に乗ることなどない。

「お昼はどうしてるの？」

「空港でおそば」

「ジャカルタ？」

「ええ」

「わたしも」

「あなたいつまで料理やってるの？」

「まだしばらく」

「なんなの？」

「スパイス学者が料理できないのはおかしい」

「それはいいんだけど」

「まだなの？」
「なにかまずいのですか？」
「まずくないけど」
「気になるのか」
「ミナって言うんでしょ？」
「調べたのか」
「うん」
「ミナがいるから続けているわけではないから」
湯花邪無は、ジンがミナのことが気になっていることを知らなかった。
もうそろそろ止めないといけないと思った。
「こんにちわ〜」
「こんにちわ〜」
「水野さんわさびはどうなんだろうか」
「昨日は２８０本出荷しました」
「１日１０００本まで増やすそうです」
「わさび畑を２倍にしないといけないらしいです」
「できるんですか？」
「難しいことではないそうです」
「順調なんだ」
「そうです」
「お昼はどうしました？」
「ジャカルタ空港でおそばです」
「ミスタージャム有村さまから電話です」
牧野由香がコーヒーを持ってきた。
「近くに来ているんだけど」
「時間があったら話したい」
「じゃ〜出ます」
「水野さんちょっと出かけてきます」
「牧野さんコーヒーは後にします」
「わかりました」
どうせ聞かれることはわかっている。

「真野裕也が車で待ってるから」
警察は車で話すことが多いらしい。聞かれなくていいかもしれない。
「華美美鈴のプライベートジェットがハイジャックされたけど」
「聞きました」
「リマに出かけて今日の朝ジャカルタに帰っている」
「リマに何をしに行ったのだ」
「ペルーのスパイスを買ってきた」
「華美美鈴はクスコに行くところだった」
「ハイジャックされたプライベートジェットはリマにいたのか」
「わからない」
「私の情報は助かったのか」
「ありがたかった」
「助けたのか」
「クスコでイベントに参加しているようだった」
「ハイジャックなどなかった」
「どうしてリマにいるとわかったのだ」
「私はペルーのスパイスを買いに行った」
「犯人は事前に逃げたらしいけど」
「クスコに華美美鈴が現れなかったらそれで良かったらしい」
「なるほど」
「これからも情報をいただけるとありがたい」
３人がながい時間車で話していることも良くないのだろう。
有村聡は車から降りてドアを開けてくれた。
湯花邪無は何も言わずにスパイス湯花に向かった。
日本の警察といえども正確な情報が入ってないのだと思った。
しかし、ハイジャックに成功するのだから、プロの人達なのだろうと思った。
「牧野さんコーヒーをいただいていいですか？」
コンビニでコーヒーと思ったがとどまった。
「承知しました」
夕方だった。北千住のマンションの近くのスーパーマーケットで、スマホか

らアース炊飯器のスイッチを入れた。２合である。明日の朝もごはんを食べようと思った。
アース鍋を調べるとギョーザがあった。
野菜炒めモツを３つつくることにした。モツと野菜を買った。
こういうことが簡単にできるようになったし、味が予想できることが素晴らしい。料理教室のおかげである。それも、ジンにミナのことを疑われては困ったことになる。
日本で和食の料理教室を探そうと思った。
「ジャカルタで料理教室に通っているがそろそろ和食の料理教室に切り替えようと思う」
「どこかいいとこがありますか？」
アッという間に返事がきた。
「大野真理子というスパイス使いの名人の教室が渋谷の高層ビルの中にあります」
「わたしもしばらく通っていました」
水野まさみから返事が来た。
「ご自分で見に行かれたらよいと思います」
ギョーザが上手くできていた。モツ野菜炒めもおいしい。小松菜とネギの味噌汁にした。
自分でもすごく変わったと思った。
問題はミナである。すごく怒りそうだし、料理学校のみんなとも別れるのは辛い。
残念ではある。しかし、ジンがミナのことを調べたらもうまずい。ミナとは何もないのだが、何度も２人で食事に行っている。
限界かもしれない。
10月４日だった。８時発ジャカルタに乗らないといけない。リニとラナンが待っている。
ジャカルタでトランジットすることにした。羽田直通もあった。
華美美鈴を検索した。もうクスコのニュースはなにもなかった。フロリダを出てすぐにハイジャックされたことがニュースになっていたら、ずっと華美美鈴が検索されていたのだろうが、ハイジャックのことは誰も知らない。

「ミスタージャムこっちです」
「おはよう」
「東京からですか？」
「そうだ」
「もう搭乗時間です」
リニとラナンは出張というより旅行の雰囲気だ。
「急場の場合は手伝いに行かないといけないから顔合わせをしてて」
ジンのはからいである。
「カヌメおはよう〜」
「おはようございます」
もう湯花邪無にあいさつするときのなわらしをカサブランカの社員もやっている。
ジンがいないときのスパイスｙｕｈａｎａカサブランカの責任者がカヌメである。
「ジンの秘書のリニとラナンだ」
「カヌメです」
「私はこれからｙｕｈａｎａの森モロッコに行きます」
「今日１日リニとラナンに手伝ってもらってください」
「承知しました」
湯花邪無は、ｙｕｈａｎａの森モロッコへ急いだ。ラバトまで特急電車で行く。新幹線のような特急電車だ。
「アイチャおはよう」
「来てくれてうれしい」
「アイチャ電話すればいいんだよ」
アイチャはみんなを紹介してくれた。オトコ３名にオンナ４名である。
「お昼はここでみんなと一緒のごはんでいいか」
「もちろん」
「現場案内します」
「もう栽培しているのか」
「全部育てている」
「まだ収穫はできないけど」

「スパイスはクミンとパプリカとターメリックとシナモン」
「コリアンダーもやっている」
「レッドペッパーはスパイス工房モロッコの隣でやっている」
「こっちはもう商品にしている」
「後で案内する」
「ステファノは来ているのか」
「今日はいないけど１週間に１度は来てくれている」
「ステファノから教えてもらわないとまだわからないことが多い」
「そうか」
湯花邪無は、ｙｕｈａｎａの森モロッコを見て歩いた。
アイチャは若いがシッカリ者だと思った。
「わたしの実家に来ないか」
「今日はリニとラナンを連れて帰らないといけない」
「もう子どもじゃないから」
結局、夕方早くにアイチャの実家に行くことになった。
「ちょっとアイチャの実家に寄っていくから先に帰ってくれないか」
「どうですか？」
「お客さん多くて戦力にはなってると思う」
「言葉がわからないけど」
「ガンバってください」
「ミスタージャムも気をつけて」
「ありがとう」
結局、羽田は24時になった。
「聞いてなかったけど今日はどうするの？」
「東京だ」
「明日も東京なの？」
「そうだ」
「２日も会えない」
ジンから電話がかかってきた。
「アイチャの実家に行ったんだって？」
「ごはんをご馳走になりました」

「リニとラナンは楽しかったらしい」
「電話があったんだ」
「そう」
「明日は何するの？」
「ちょっと考えていることがある」
「なに」
「今度話す」
アースカーに運転を任せてずっとジンと話していた。
10月５日だった。日曜である。快適な目覚めだった。
冷蔵庫を探った。卵とベーコンがあった。パンを買うのを忘れた。コーヒーを沸かした。
こんなことはやらなかった。料理学校のおかげである。
ジンがミナを調べ始めたらもう変えなければならない。ミナとは何もないのだが、一方的にアプローチされている。
湯花邪無は10時に渋谷にいた。
93階のビルである。
事前に調べていた。４階に大野真理子スパイス和食教室がある。
大きな部屋ではない。
「おはようございます」
「おはようございます」
「なんでしょうか」
「大野真理子さんですか？」
「そうです」
「いきなりですがお話をさせいただいてもいいですか？」
「買い物に出かけますので５分でいいですか？」
「ここで教室をやってらっしゃるんですか？」
「そうです」
「私も参加したいのですが」
「何か規則のようなものがありますか？」
「水曜日のコースでいいですか？」
「ええ」

「みんな一緒に始めないといけないので」
「水曜日のコースは終わるのですか？」
「10月22日が１回目です」
「何人ですか？」
「今のところ５人です」
「増えると思うけど」
「毎日やってるのですか？」
「15時から16時30分です」
「10月22日の15時に来ればいいですか？」
「請求書を用意しておきます」
「あなたはどなたですか？」
湯花邪無は名刺を交換した。
「スパイス湯花のオーナーさんですか？」
「みなさんには失業者でお願いします」
「どうしてですか？」
「私もだがみんなもやりにくい」
「せめてサラリーマンにしてください」
「わかりました」
「何もできませんけど平気ですか？」
「スパイス学の教授でしょ？」
「料理できないスパイス学の教授なんておかしい」
「恥ずかしいのね」
「サラリーマンがいいかも」
「お願いします」
「ええ」

マチピチュ

湯花邪無は、北千住のスーパーマーケットでアース炊飯器のスイッチを入れた。

定番の肉ジャガをつくろうと思った。
スマホで調べた。
今日入れて３つつくろう。
干しひじきを買って油揚げを買って煮た大豆を買った。
インドネシア料理と違うのは、なんとはなしにわかることだ。
ビールを買った。
湯花邪無はゆっくり食事をした。
華美美鈴を検索してみた。
モスクワに行くはずである。
華美美鈴はライブで公開してマチピチュにいた。
多くのカメラが華美美鈴を追っていた。
マチピチュは朝だ。
これだけカメラがあると華美美鈴は安全だろう。
どうしてまだクスコにいるのかわからない。モスクワに行くと言った。なぜマチピチュの見学を公開しているのかもわからない。
ジムとサマンサと２人の警備員の姿が見えない。顔を覚えられないようにしているに違いない。これだけのカメラがあると襲ってはこれない。
しばらく華美美鈴のライブ映像を見ていた。
アースバッテリーの解説をするのではなくて、マチュピチュの歴史や発見の逸話をやっている。
おかしな映像だった。
湯花邪無はそのまま早く眠った。
10月６日月曜日である。
パンを忘れずに買っておいた。
コーヒーを煎れた。
買ってきた野菜をドレッシングで食べた。パンに挟んで食べた。
今日はまだジャカルタの料理学校に行かないといけない。
10月22日に最初のスパイス和食教室に行くことにしている。ミナにはキチンと話さないといけない。
「おはよう」
「おはようございます」

「ジンが話があるそうです」
「わかりました」
リニがコーヒーを煎れに行った。
「ジンおはよう」
「おはよう」
「何か話しですか？」
「顔見たいだけ」
湯花邪無は後を見た。
リニはコーヒーを煎れている。
「すぐミナのとこに行くでしょ？」
もうミナの料理教室は止めるのだがまだ話せない。ジンがミナの話しをする時はトゲがある。
「いってらっしゃい」
「コーヒーにしました」
「ありがとう」
リニに救われた気がした。
もう限度だとつくづく思う。
湯花邪無はゆっくりコーヒーを飲んだ。
「いってきます」
「わたし得意先に行くから」
「ジャカルタですか？」
「そう」
「わかりました」
どうしてジンがミナのことをこれほどまでに気にしてきたのかわからない。
ミナの話をしたわけでもない。
時々聞かれていた。あまり気にしないで話していたのかもしれない。
「ミスターユハナおはよう」
「おはようございます」
ミナは湯花邪無だけにおはようを言う。８名のクラスなのだが湯花邪無しか見ていない。
「９日は空けてありますか？」

「大丈夫だ」
「招待してくれるお店だが」
「今日の料理はなんだ」
ヤユクが助け船を出す。
「ナシアバンだ」
「レシピを配る」
みんなは笑っていた。
湯花邪無との会話を途切れさせたヤユクがミナは気に入らない。
「今日はオレが買い物をする」
ヤユクはみんなを連れて歩くようにスーパーマーケットに向かった。
10月９日はメンドーなことになりそうだと思ってしまう。
ジンがミナのことを言葉に出しはじめたのには訳があるのだろう。
危険だと思っているに違いない。
「ただいま〜」
「おかえりなさい〜」
「すぐお出かけになりますか？」
「リニがハーブティを煎れてきた」
「お茶をしたら新宿に出かけます」
「どうぞ」
「お昼はどうしますか？」
「自分のつくったナシアバンを食べました」
「上手くできましたか？」
「そろそろ和食をやろうと思っている」
「和食はやったことがあるのですか？」
「全くない」
「日本の人だからやった方がいいですよね」
もしかしたらリニがジンに言うかもしれないとは思った。
湯花邪無は、やっぱりジャカルタ空港でおそばを食べた。
ここのてんぷらもおいしい。
もしかしたら華美美鈴はまだマチュピチュにいるのではないかと思った。検索したが何もない。ライブテレビも華美美鈴をやってはいない。

モスクワに行ったのだろうか。
「こんにちわ〜」
「こんにちわ〜」
「ミスタージャムは大野真由美さんのスパイス和食教室に行くことにしたのですか？」
「大野真由美さんから問い合わせがありました」
「わたしと同じ会社だから」
「水野まさみさんから教えてもらったとは言いませんでした」
「だから問い合わせてきたのだと思います」
「ジャカルタのスパイス教室はどうしたのですか？」
「終わります」
「ジンには話したのですか？」
湯花邪無は、水野まさみどうしてジャカルタの料理教室を終わることをジンに話したのかと聞いたのかわからない。
ミナの話をジンは水野まさみにもしていたのだろうか。
よくわからない。
いずれにしても、もう限度だったに違いない。
「明日ジンとスパイス工房モロッコに行きます」
「わかりました」
「何かありますか？」
「よろしくお願いします」
「何かありますか？」
「順調です」
「スライスわさびはどうですか？」
「おすし屋さんからの注文が殺到しています」
「毎日１０００本にしてもらったんだけどとても間に合わない」
「生産は限度です」
「山井生江さんと次郎さんは疲れていませんか？」
「疲れていると思います」
「今から差し入れに行ってきます」
「え？」

水野まさみは驚いた。
「コーヒーにしましたけど」
牧野由香がコーヒーを煎れてきた。
「今からわさび工房に行きますけど何かありますか？」
「おいしいものを差し入れてください」
みんなよくわかっているのだ。多分徹夜のように働いているのだろう。
「山井さんに連絡しておきますか？」
「忙しいだろうから差し入れだけにするかもしれないから」
「わかりました」
湯花邪無が２人の顔を見に行きたいのだとわかっていた。
湯花邪無は新宿のデパートで最高級のすき焼きセットを買った。５人前だ。
それとカステラを３箱を買った。９本入っている。
15時には茅野に着いた。
「こんにちわ～」
山井次郎が驚いて顔を上げた。
アルバイトかパートの女性に包装を教えているようだった。冷蔵で配送する。
「手が離せないだろうからかまいません」
「姉は畑にいます」
「そっちに行ってみます」
「連絡します」
「いいです」
「車使ってください」
「キーはそこの右にかかってます」
「ありがとう」
毎日１０００本など収穫できるのだろうかと思う。
冷たい水からだ。これから更に冷たくなる。
雪も降るだろうに。
事務所には誰もいなかった。アルバイトかパートか女性の荷物が置いてあった。
山井生江の４輪駆動のアースカーがあった。個人的に湯花邪無が買って渡し

たものだ。
八ヶ岳わさびの森に１万円で売った。
地図があった。わさび畑を拡大しているようだ。
湯花邪無は歩いて畑に向かった。
「いらっしゃい」
山井生江が見つけて声をかけてきた。
一斉にみんな顔を上げた。５人いるようだった。
「今行きます」
「休憩になったらでいいです」
「休憩します」
みんな休憩にするようだった。
「カステラを持ってきてるからどうぞ」
山井生江はアルバイトの女性に１本渡して切ってくれるように頼んだ。
「お茶がいいですか？」
「ええ」
「紹介します」
「湯花のオーナーの湯花邪無さんです」
「よろしくお願いします」
おばさんと思っていたのだが４人は娘さんのようだった。
「大学からアルバイトに来ています」
「なるほど」
「ちょっとつくっている畑を見ていただけますか？」
「わかりました」
「４人は後輩なんですけど」
「１日１０００本は片手間でできます」
「畑が足りません」
「ここを拡大しています」
「長野県はなんと言っているのですか？」
「購入したいと言っているのですが無償提供したいようです」
「産業振興ですか？」
「そうだと思います」

「なるほど」
「思ったより疲れていないようです」
「忙しいことは忙しいです」
「学校は行っていますか？」
「４月に卒業します」
「そしたらここに常駐します」
「次郎さんはどうしているんですか？」
「来年大学に入ります」
「推薦で入れることになっています」
「今は忙しいからタイヘンです」
「機械の操作ができないんでしょうね〜次郎さんしか」
「最近〜松井由紀さんが次郎が学校のときにほとんどやっているようです」
「工房の近所の娘で高校出て２年目です」
「身体がシッカリしていて機械を動かせます」
「社員ですか？」
「アルバイトです」
「社員になる意思はあるんだろうか」
「そこまでは話していません」
「次郎さんはこれから大学だから」
「寄ってきました？」
「寄りましたけど車を借りただけです」
「後で紹介します」
「社員にしていいですか？」
「山井さんが社長だから」
「わかりました」
「今日は何時に終わるのですか？」
「17時です」
「それからは？」
「わたしはわさび工房です」
「すき焼きを買ってきているんだけど」
「多分19時まで作業やってると思います」

「その後は？」
「すき焼き食べられます」
「工房に厨房がありましたね」
「私がごはん炊いてすき焼きの用意していますから」
「ミスタージャムさんがですか？」
「ジャカルタだけど料理教室に通っているんです」
「じゃ〜お願いします」
「ネギとか野菜庫にありますから」
「先に帰って買い物しています」
「いいですか？」
「ここにいてもジャマになりますから」
「今晩泊まりますか？」
「遅くなっても帰ります」
「明日はジャカルタです」
「わかりました」
湯花邪無はわさび工房に帰った。
「19時に終わるのですか？」
「その予定です」
「学校は？」
「今日は午前中しかなかったので」
「紹介してくれますか？」
「紹介します」
「湯花のオーナーの湯花邪無さんです」
「よろしくお願いします」
「機械を操作できる人は？」
「松井由紀さんです」
「よろしくお願いします」
「機械がスキなんですか？」
「そうです」
山井生江の言うように、身体のシッカリした大柄の女性だった。
「カステラを持ってきていますから休憩のときに食べてください」

「じゃ〜ちょっと休憩します」
「どうぞ」
「野菜庫があると聞いたんだけど」
「こっちです」
「近所がくれるんです」
「みんなも持ってきます」
「お昼はどうしているのですか？」
「当番制でごはんつくっています」
「なるほど」
「スーパーマーケットは近いですか？」
「車使ってください」
「道路に出て道なりに５分走ったら着きます」
「お姉さんに話してあるんだけど」
「19時からすき焼き一緒に食べられますか？」
「買いに行くんですか？」
「デパートで買ってきています」
「豆腐や卵を買ってきます」
「私が炊きます」
「ジャカルタの料理学校に通っているから平気です」
山井次郎は驚いた顔をして湯花邪無を見送った。
これから１０００本のスライスわさびを出荷する準備をするのだ。忙しい。
湯花邪無は米も買った。味噌も買った。
見てこなかったものはみんな買った。
ごはんも多めに炊いた。味噌汁は最近北千住でやっている。おいしいコツは知っているつもりである。粉末のダシを買った。
すき焼きは炊いておくわけにはいかない。切り分けるだけである。
18時30分になって山井生江がやってきた。明日の生産分１０００本を持ってきたのだ。
「松井由紀さん紹介されました？」
「紹介されました」
「一緒にごはん食べていいですか？」

「もちろん」
「社員の話しをしてください」
「私がですか？」
「次郎には電話で話しました」
「わかりました」
「次郎さん終わりますか？」
「もう終わります」
「ごはんできています」
「手洗ったりしますので19時ピッタリで」
「わかりました」
19時になって山井生江が着替えてやってきた。松井由紀も着替えてやってきた。ほんの15分くらいしか時間がなかっただろうに。
次郎の着替えは姉が持ってきた。
一緒に住んでいるのだろう。
「じゃ〜はじめていいですか？」
「よろしくお願いします」
「すごい肉」
「最高級っぽい」
「どんどん食べてください」
「飲み物も買ってあります」
「ワインもあります」
「コーラもありますお茶もあります」
「缶ビールもあります」
すき焼きはアッという間にできる。
「いただきます〜」
「フライパンでやっているのだがみんなのお昼の食事用だろう大きい」
「乾杯しましょう」
「なんですか？」
「スライスわさびの成功」
湯花邪無はビールを飲んだ。
未成年の次郎がいるのだ。ほどほどにしていていた。

21時になって湯花邪無は腰を上げた。
「今日はどうもありがとう」
「私は茅野のみなさんがムリをしていると思ってやってきました」
「以外と明るい顔をしているので安心しました」
「ひょっとしてタイヘンな局面もあるかもしれないけどガンバってください」
「みんなのわさびにかける情熱が楽しみです」
10月７日だった。
湯花邪無は、いつもの羽田発ジャカルタ行きに乗った。
長野からの帰りが遅くなったのだが、苦にならなかった。みんな元気だったからだ。
「昨日はどうもありがとうございました」
こんなメールを打っていたら、山井生江からありがとうメールが着ていた。
「時々行きますからおいしいものを食べましょう」
「みなさんによろしく」
「ガンバってください」
湯花邪無は、華美美鈴を検索した。アースカーだ。運転をアースカーに任せている。
何も情報がない。もうモスクワに入ってるのだろうか。
「私はガランとの打ち合わせの日時を間違えて連絡したのではないかと思います」
「今日の午後ｙｕｈａｎａの森に行こうと思うんだけど」
「わたしは平気です」
「お待ちしています」
湯花邪無は勘違いをしていた。
「おはよう」
「おはようございます」
「ジンは今日は水野まさみさんとスパイス工房モロッコに行きました」
「わかりました」
「コーヒーにしました」
「ありがとう」

「今日の予定は？」
「午後からｙｕｈａｎａの森のガランのところに行きます」
「お昼はｙｕｈａｎａの森ですか？」
「ここで食べます」
「わかりました」
湯花邪無はターメリックについて資料を見直した。
「水野まさみさんとスパイス工房モロッコに行きます」
「また連絡します」
「今日の予定は？」
「午後からガランとターメリックの打ち合わせです」
「夜はタベットです」
「承知しました」
ジンからメールがきた。
「ミスタージャムお昼にしましょう」
リニがやってきた。
「ソトアヤムにナシゴレンだ」
「料理教室ではなにをやっているのだ」
「明日で料理教室は終わりにする」
「せっかく続いているのにもったいない」
「私は日本人だから和食もやろうと思っている」
「東京の料理教室か」
「スパイス和食教室」
「そういうのがあるのか」
「もう決めているのですか？」
「10月22日が１回目だ」
「ミナが寂しく思うんでしょうね」
湯花邪無は驚いてフォークを落としそうになった。
どうしてリニがミナのことを知っているのかわからない。
知らなかったのは湯花邪無だけだったのかもしれない。料理教室の７人の仲間たちはもちろん知っている。
ミナが湯花邪無に一方的に惚れこんでいることだ。

ジンがミナを調べたと言ったのだが、リニに調べさせたのだろうか。
ミナとは何もないのだが疑われても仕方がないのかもしれない。
「どうしてミナのことを知っているのか」
湯花邪無は、こうリニに聞こうとしたが勇気がなかった。
「ガダラこんにちわ〜」
「ガランが待っていますよ？」
「ありがとう」
「お昼は？」
「スパイスｙｕｈａｎａで済ませてきました」
「それは残念」
「後でおいしいコーヒーをお持ちします」
「ありがとう」
湯花邪無はガラン達のいるオフィスに向かった。
「ステファノしばらく」
「今日はガランに手伝ってもらってありがとう」
「みんな研究になることだから喜んでやります」
ガランはターメリックを栽培している畑に湯花邪無を案内した。
「商品にしているのはインド原産のターメリックとインドネシアのターメリックです」
「他に19種類のターメリックを研究のために栽培しています」
「ほぼ世界のターメリックがすべてここにあります」
ジンがガランに聞けと言った事がよくわかった。
湯花邪無は、つくってあるスライドを説明した。構成を説明した。
「今日はいい天気なので21種類のターメリックを撮影しますか？」
「ミスタージャムの時間があるときに生産工程を撮影しますか？」
「10月14日でいいですか？」
「わたしは大丈夫です」
湯花邪無は、またガランに登場してもらおうと思った。
「ガランありがとう」
「わたしこそありがとうございます」
「ステファノまた来ます」

「今日モロッコに行っているけどまだ連絡がありません」
湯花邪無はその場で電話をした。
「ジンですか？」
「今11時だけど生産は順調です」
「コリアンダーが大量に生産できる」
「ジャカルタにも入れてもらおうと思う」
「立派なコリアンダーができるんだ」
「そしたらステファノにも送ってください」
「機械は順調ですか？」
「故障はしそうもない」
「わかりました」
「モロッコの生産分をどう配分するかこれから相談するから」
「わかりました」
「みんな元気だから心配いらない」
「わかりました」
湯花邪無は、ジンが遅いだろうからスパイスｙｕｈａｎａへ返った。
「ただいま〜」
「おかえりなさい〜」
「なにかありませんか？」
「ジンは遅くなるのでこっちには寄らないそうです」
「わかりました」
「ミスタージャムは明日のミナの教室には行くんですか？」
「明日が最後になります」
「わかりました」
「コーヒーにしましたけど」
「ありがとう」
「ガランはどうでした？」
「ターメリックには詳しい人でした」
「楽しみにしています」
「わかりました」
湯花邪無は、スーパーマーケットに寄った。

「スーパーマーケットにいます」
「アヤムゴレンの材料を買いに来ています」
ジンからすぐには返事が来ないことはわかっている。
モロッコ料理を買ってきてダブってもいいかと思っている。
「ありがとう」
シャワーから出てきたジンが言った。
大量のアヤムゴレンを見て言ったのだ。
「ごはんは白にした」
ジンは冷蔵庫や戸棚から 6 種類くらいのおかずを取り出した。
「あなた料理おいしくなった」
ジンはビックリしたように言った。
「なんで？」
「スパイスの使い方がわかってきたから」
湯花邪無は、自分でもおいしくなったと思っている。少しは自信が出てきている。
「わたしゆっくり行くから先に出て」
「わかった」
「今日はミナのとこでしょ？」
もうジンは料理教室とは言わなくなった。ミナのところへ行くのだと思っている。今日で最後なのだが、まだ話さないでおこうと思った。何があるかわからない。こじれたらタイヘンなことになる。
アースカーで華美美鈴を検索した。
なにも変化はない。
「おはよう」
「おはようございます」
「ジンは今日は少し遅くなります」
「わかりました」
「リニは今日はお休みです」
「わかりました」
「ハーブティーにしました」
「ありがとう」

「今日で最後の料理教室ですか？」
「リニに聞きました」
「東京で和食をはじめるのですか？」
「22日が１回目です」
「和食はじめたらここのお昼でもおすしやってください」
「ああ〜そうだね」
確かにそうだ。ここはジャカルタだからインドネシア料理はみんなの方が得意だ。
ラナンからミナの話は出なかった。
話しをしないだけで、ミナのことは知っているのかもしれない。
「いってきま〜す」
「いってらっしゃい」
みんなの声は揃っている。イントネーションさえも揃っている。まさか練習をしていることはないだろうが、なんとはなしに揃ってしまったのだろう。
「ミスターユハナ明日ですが空けてありますか？」
「大丈夫だ」
「ミスターユハナはイケメンだからお店の店長に気をつけてください」
料理教室の仲間は笑えなくなった。
「今日の料理はなんだ」
ヤユクが口をはさんだ。
「ルンピアだ」
「レシピを配ります」
「今日はオレが買い物をする」
ヤユクが言った。
少しばかり８人はスーパーマーケットへの道を黙って歩いた。
「ミナはおかしい」
「急で驚かすかもしれないけど」
「今日でミナの料理教室を終わりにするから」
「私は日本人だけど日本の料理は何もできない」
「東京で和食の教室に通うことにした」
みんなは驚いた。

「ミナには話してないようだけど」
「明日話す」
「荒れるかもしれない」
「タイヘンなことになる」
「もう限度だと思う」
「明日ミナとお別れ会をやってくれ」
「オレたちとのお別れ会を計画するから」
「ミスターユハナはジャカルタにはいるのか」
「東京とジャカルタに半分づついる」
「希望の日はあるか」
「みんなに合わせる」
「わかった」
教室でもみんな静かだった。
けっこう湯花邪無と一緒にいると楽しかった。得体の知れないオトコなのだが、ワルイオトコではないことはわかる。
「ただいま〜」
「おかえりなさい〜」
お店は多くのお客さんで込んでいた。
「お昼はどうするの？」
「自分のルンビアを食べたけどジャカルタ空港でおそばを食べます」
「新宿ね」
「ええ」
「明日ミナと晩ごはんだよね」
湯花邪無は心臓がドキっと言ったと思った。
「聞いてるから」
湯花邪無は話したに違いない。
明日はタベットだからジンが晩ごはんをつくる。晩ごはんは必要ないと言ったに違いない。
ジンは今日でミナの料理教室を止めたことを聞かなかった。
リニもラナンも知っている。どうしているのだろう。当然のようにジンはミナの料理教室を止めたことを口にするはずである。

わけがわからないまま、湯花邪無は新宿に向かった。
「こんにちわ〜」
「こんにちわ〜」
「今日でミナの料理教室終わったんですって？」
牧野由香がお店で話しかけてきた。
「ええ」
「ここのお昼にインドネシア料理を食べさせてください」
「じゃ〜いつがいいか知らせてください」
「ホントですか？」
「ええ」
「44名ですけど」
「そんなに多い数をやったことがいけど」
「お手伝いします」
「わかりました」
おかしなことに、牧野由香が今日でミナの料理教室を終わったことを知っている。水野まさみに紹介された大野真由美の料理教室だから知っていて当然かもしれない。
「10月21日にお別れの会をやりたいけどどうだ」
ヤユクからメールがきた。
「承知した」
短い返事だったら話さなくてもよくわかっている。
「ミスタージャムここのお昼を１日インドネシア料理でご馳走してくれるんですって」
ものすごく早い。
駆け巡っている。
「10月13日でどうですか？」
「料理教室に行かないから新宿にいる日です」
「わかりました」
湯花邪無は、その場で調理場に向かった。ナシゴレン用の大皿を確認しに行った。
62枚あった。日本の大皿なのだがこれでよい。

「何かありました？」
「なにもありません」
「わたし渋谷のお客さんのところへ行ってきます」
「わかりました」
「なにかありますか？」
「順調ですから何もないと思います」
「わかりました」
水野まさみはミナのことには何もふれない。
どうなっているのか。
明日のミナとの晩ごはんが気になる。怒って食卓をひっくり返すかもしれない。

モスクワから月へ

お皿が飛んでくるか

湯花邪無はいつもの北千住のスーパーマーケットで、アース炊飯器にスイッチを入れた。
アース鍋の焼きギョーザと野菜炒めモツを食べることにした。タッパのヒジキを食べようと思った。
夕食を自分でつくって食べることにほとんど気にならない。
もう北千住のマンションで１人でごはんを食べることになんともなくなった。
外食して帰ることがなくなった。
10月９日になった。
アースカーで華美美鈴を検索した。
何も新しい情報はない。
モスクワに入っているのだろうか。
「おはよう〜」
「おはようございます」

ジンが待っていた。
「わたしシンガポールに行ってくるから」
「わかりました」
「ミナとごはんでしょ？」
「ええ」
「遅くならないように」
「わかりました」
「いってきます」
「気をつけて」
フツウの会話なのだが、少しトゲがある。
「コーヒーにしました」
「ありがとう」
リニがやってきた。
「ミナさんとごはんですって？」
「ええ」
「今日話すんだ」
「ええ」
「お皿が飛んで来るかも」
リニはすごい話しを湯花邪無にする。
「リニはどうしてそんなことを知っているのだ」
「ミナさんは有名ですから」
「どういう意味ですか？」
「教室のイケメンを捕まえてモノにする」
「帽子じゃないんだから」
「ミナには私は失業者になっている」
「余計に母性くすぐったと思います」
「どうしてそこまで知っているのだ」
「ミスタージャムはｙｕｈａｎａのものです」
「ミナさんに持っていかれたらわたしたちは困る」
「ジンも知っているのか」
「自分なりに調べていると思う」

「わたしはみんなの代表」
「私は失業者になってるから明かさないように」
「よくない」
「お皿が飛んでくるかな」
「ナイフじゃなかったらいいです」
「社員はみんな知っているのか」
「なんとかしないと危ないって言ってくる社員もいる」
「ラナンは？」
「いつもわたしに言いつけに来る？」
「うわさを聞いた」
「誰も何も言わないけど」
「ミスタージャムだから」
「どういう意味だ」
「もって行かれるようなことはない」
「ｙｕｈａｎａを辞めてミナのヒモになるのか」
「失業中だったら好都合だ」
「まずかった」
「お皿が飛んできてもキチンと話すように」
「わかってる」
「ジャカルタにはミナのようなオンナは少ない」
「ワルイオンナだ」
「わかった」
「ジンに何も言われないのか」
「トゲがある」
「あたりまえだ」
ここまでになっているとは知らなかった。
「お先に〜」
「おつかれさまです」
湯花邪無にこういうあいさつは珍しい。
お先にと言ったからだ。
お皿が飛んでくるかもしれない。

どういうレストランだろうか。
料理教室に迎えに行った。
「どうもありがとう」
ミナはドレスを着ていた。
「今日は招待してくれたオーナーにお礼を言わないといけないから」
「ミスターユハナもお礼を言ってください」
「お店をいくつも持ってるからこれからも招待してくださるかもしれない」
おかしな雰囲気になる気がした。
「いらっしゃいませ」
50歳くらいの少しお腹の出たオーナーがやってきてミナにあいさつした。
オーナーの湯花邪無を見る目がおかしかった。
もしかしたら面接かもしれないと思った。
遠くから見られている気がしていた。
こうして人材をレストランに紹介しているのだろうと思った。
お酒がない。話が乱れることはない。ミナは、湯花邪無が立派に見えるように何度もオーナーを呼んで話しをした。
とうとう何も話せないままコーヒータイムになってミナがオーナーにお礼に行った。
「ミスターユハナはフロアーマネージャーに見えるわ」
「送ってくれるでしょ？」
ミナは、湯花邪無をここに就職させることに成功したようだった。それは、ミナの手柄のようだった。湯花邪無にも、お礼を言ってほしい雰囲気だった。
「今日は部屋に寄って行って」
「おいしいジャワティーがあるから」
「次の料理の勉強を東京ですることにした」
「和食をやる」
「だからミナの料理教室はこれで終わりにする」
ミナからすれば、湯花邪無に何を言われているのかわからなかったかもしれない。
あまりにも思っていることと違う内容だったからだ。

車は止まったのだが、ドアを開けに出た湯花邪無をミナは制した。
混乱したのだと思った。
「わたしこんなにあなたのために一生懸命やったのに」
「ありがとう」
「私は日本人だから和食をやりたい」
「連絡先を教えて」
湯花邪無は用意していたミナ用のケータイの番号を書いたメモを渡した。
「あなたホントに失業中なの？」
「今月末から和食をやる」
「料理人になるかどうかわからないけどありがとう」
「世話になった」
湯花邪無は、アースカーのドアを開けた。
ミナは、そのままだった。足を出そうとしない。
「あなたはミスターユハナ？」
「そうだ」
「ホントは誰なの？」
「ワルイオトコではない」
「それはわかっている」
「わたしとはもう会わないのか」
「私は和食をしばらく必死でやる」
「つまり会いたくないのね」
「そういうことではない」
「あくまで先生と生徒だ」
「わたしは違う」
20分も、こうして話していた。
すごくまずい。ミナをここまでにした責任は湯花邪無にある。もっとお早めに和食を検討すべきだった。
「教室のみんなには話したの？」
「昨日話した」
「今日わたしに話すと言ったのか」
「そうだ」

「わたし時間がかかる」
「料理教室の先生と生徒のままでいないといけない」
「それがミスターユハナの希望なのか」
「そうだ」
「わたしは違う」
このままミナは湯花邪無のアースカーから降りないのではないかと思った。
「部屋まで連れて行って」
「もう会わない２人だから」
「冷たいのね」
「私は和食をやらないといけない」
またそこから20分も話しをしていた。
「遅かったのね」
「うん」
「ミナはナイフ持ってた？」
「私は何もワルイことをしていない」
「早く知らせなかった罪」
「愛している人のことか」
「わたしまで疑う」
「ミナに行くんじゃないか？」
「そう」
「あり得ない」
「外から見てるとそう見える」
ジンには何も話してなかったのに、今日ミナの料理教室を止めることを話すと知っていた。
どこまでみんなは知っているのだろう。
ミナがナイフを持ち出すのではないかとも思っていた。
ナイフを持ち出されるほどの仲ではない。
外からはそう見えていたのだろうか。
湯花邪無が楽しそうにミナの料理教室に通ったせいもあるのだろう。
「ごはんないけど」
「いいです」

「それでどうなったの？」
「あなた身元明かさなかった？」
「ええ」
「ゼッタイだめだよ？」
「ここに乗り込んで来るからね」
「和食のほうは湯花邪無でやってるけど」
「大丈夫？」
「水野まさみさんの紹介だから」
「ああ～そしたら最初からバレてんだ」
「ええ」
「それならいいけど」
「ミナに怒られなかった？」
「あんた何者なんだ」
「あのオンナ料理教室のオトコに手をつけるんだけど」
「少しは同情するな～こうなったら」
「シャワーしてきます」
「部屋に連れてってくれって言われたでしょ？」
「ええ」
「行かなかったんだ」
「もう明日から会わないんだから」
「明日から会わないから部屋に連れてってじゃない」
このまま話しが続きそうなのでシャワーに向かった。
10月10日だった。金曜日である。
「おはよう」
「おはようございます」
いままでだったら急いでミナの料理教室に向かった。今日からすぐに東京に向かう。スパイスｙｕｈａｎａに寄らなくてもと思う。
いままでの習慣で寄ってしまう。
ジンと同じような時間に出てきた。
「ミスタージャムは東京ですか？」
「コーヒーにしました」

リニがコーヒーを煎れてきた。
「ありがとう」
「すぐに東京ですか？」
「そうだ」
「お昼は東京ですか？」
「そうだ」
「由香に知らせておきます」
「ありがとう」
リニは、皿が飛んでこなかったか聞きたいのだろうがジンがいる。
「10月13日の昼食は私がやることにしました」
「インドネシア料理です」
「ステキです」
「和食の教室に通うから上手になったらここの昼食も引き受けます」
「あらあら」
ジンもリニも驚いたように顔を見合わせた。
「11月18日に決めておきましょう」
ジンが言った。
11月18日というと、まだ１回しか大野真理子のスパイス和食教室に通っていない。いきなり不安になってきた。
「わたしが手伝うから平気」
ジンが声をかけてきた。
こんな時間に羽田空港にいることは珍しい。
「おはよう」
「おはようございます」
おかしな時間に入ってくる湯花邪無を不思議に思わないのだろうかと思った。
「ミスタージャムおはようございます」
「おはようございます」
「ミナの料理教室は無事に終わったんですか？」
無事に終わったかという意味はだいたいわかる。水野まさみも気になっていたのだろう。

みんながミナの料理教室を無事に止めることができるのか気になっていたことになる。
「ミナさんに連絡先を教えたのですか？」
「専用のケータイをつくった」
「どういう意味ですか？」
「ミナはスパイスｙｕｈａｎａのことは知らないから」
「わざわざケータイを用意したのですか？」
「オフィスにきたらみんなが苦労です」
「どうしてそこまで深入りしたのですか〜」
牧野由香もそうだという顔をしてうなずいた。
「わたしはただ料理教室に通っただけだ」
「オンナにそこまで気を入れさせるのはよくありません」
水野まさみは姉のように口ぶりで湯花邪無に言った。牧野由香もうなずいた。
いまさらのように昨夜何もなかったことが、みんなをホッとさせているのだと思った。
湯花邪無は気がつかなかったが、みんなは、ミナを危険なオンナと見ていたのだろう。
そこまでミナのことを気にかけていたことを湯花邪無は知らなかった。
ジンのトゲのある言葉がなかったらまだ気づかないままミナの料理教室に通っているのだろう。
お昼になって牧野由香がやってきた。
「お昼ですけど」
「戻りカツオのタタキです」
こんなおいしそうなごはんがスパイス湯花の昼食に出ていることを知らなかった。
「どうですか？」
「おいしいです」
「13日はお手伝いしますからレシピを知らせてください」
「買い物も一緒に行きます」
「わかりました」

大皿ナシゴレンとソトアヤムに決めてある。44人前だといくら買えばいいのかわからない。ミナに聞けば簡単なのだろうが、聞けない。
湯花邪無は、ミナの料理教室の仲間だったヤユクにメールをした。
午後からスパイス湯花のアースバッテリー化だった。
朝から作業をしていた。
「切り換えるから一瞬電気が消えます」
「13時30分から10分間はすべての電源を切ります」
こんなに簡単にアースバッテリーへの切り替えができるようになっていた。
夕方になってヤユクから返事がきた。
何をいくら買えと書いてある。
これを整理して牧野由香に送った。
しかし、湯花邪無は、実際につくったことがない。余るのはかまわないが足りなくなるのは困る。
「13日は朝から新宿ですか？」
「そうだ」
「じゃ～９時30分に買い物に行きます」
「いつもはどうしているのですか？」
「業者さんに電話をしているんです」
「持って来てくれるんだ」
「インドネシア料理の材料売ってるお店に行きますから」
「そんなのが東京にあるのですか？」
「アジアのお店ですけど」
「わかりました」
「13日９時30分です」
「承知しました」
湯花邪無は、スパイス湯花に出勤しても、スパイスの仕事は何もしていない。社長は水野まさみである。口を出さない。特に営業のことは何もわからない。
「もうアースバッテリーに切り換わっているのですか」
「切り換わっています」
「いままでの電力会社の配線は接続したままです」

「メインスイッチを切ってあるだけです」
「アースバッテリーが故障したらすぐに切り換えます」
「なるほど」
湯花邪無は、北千住のスーパーマーケットでヤユクのメールを受け取った。
「今日はミナは休みで７人でミーアヤムをやった」
「ミナは立ち上がれないかもしれない」
「ミスターユハナのせいではないから」
重いメールだったが知らせないわけにはいかなかったのだろう。
スーパーマーケットからアース炊飯器のスイッチを入れた。アース鍋の肉じゃがを食べようと思った。
サバが活きがよかった。１本買った。焼きサバをアース鍋に３つセットできる。
今日１つ食べようと思った。
ジニが教えてくれたアース鍋での料理はホントに便利である。
10月11日だった。湯花邪無はいつものように北千住のマンションを出た。
華美美鈴を検索したが何もなかった。
どうしているのだろう。もうモスクワに入ったのかもしれない。
「おはよう」
「おはようございます」
「ミナ昨日休みだったようだけど」
いきなりジンが言った。
「どうしてですか？」
「料理教室に電話してみた」
「ジンがですか？」
「リニ」
「みんな気になってる」
「まだ終わらない」
「ミナにミスタージャムを奪われたくない」
「それはありません」
「リニはみんなの代表になってるから真剣」
「今日は？」

「お休みの日」
「大丈夫？」
「ええ」
「電話はあった？」
「ありません」
「あなたから連絡しないでよ？」
「ええ」
「わたしクアラルンプールに行ってきます」
「ええ」
「ラナンがいるから」
「わかりました」
「今晩はジャカルタ？」
「ええ」
しばらくミナの話しにみんなが耳をそばだてていそうだ。
それにしてもミナはどうしたのだろうか。
ミナが崩れることは湯花邪無の本意ではない。ミナも元気に過ごして欲しいのだ。
「ハーブティーでいいか？」
「ありがとう」
「大丈夫ですか？」
みんなが昨日ミナが料理教室を休んだことを知っている。
「まだ安心できないから」
楽しそうにミナの料理教室に向かっていたのだろう。みんなは、シラケテ見ていたのだろう。
華美美鈴のことも知っているのだろうか。
華美美鈴のことを聞くこともできない。
華美美鈴のことは、誰にも話していない。誰も知らないはずである。
「ヘイジュードとイマジンは練習しているのか」
「飛行機で聴いている」
「歌ってみないと覚えない」
「23日までには覚えるから」

「歌えなかったらみんなガッカリするからね？」
「プレッシャーになる」
「わたしお店にいます」
「わかりました」
「お客さん多いから忙しい」
「お昼は頼んでおいたから」
「ありがとう」
みんな忙しく働いている。
湯花邪無だけがヒマである。何もすることがないことは湯花邪無の願っていることだった。新しいことをやりたいのだ。
「明日昆明に行ってくるけど」
「気をつけて」
「何かある？」
「リーマイに任せてることだから」
「わたしのスキなようにしていいの？」
「自由に考えてくれだけど」
「それでいいのね」
「そうだ」
「いつか一緒に昆明に行ってください」
「候補がしっかりしたら行きます」
「もう候補はあるんだけど」
「わたしでは交渉できない」
「マーボ豆腐に集中するけどいいのか」
「それでいい」
「ミナのことは終わったのか」
リーマイまでミナのことを言うことに驚いた。
「これからは東京で和食を勉強する」
「中華もやってくれ」
「考えてみる」
「話はそれだけだから」
「わかった」

ミナにかかりっきりになって自分のことなど見向きもしないのではないかと思っていたフシがある。そんなリーマイの電話だった。
どうしてそこまでになったのかよくわからない。
「ミスタージャムお昼だけど」
「チャプチャイ」
「おいしそうだ」
「13日新宿のお店の昼食やるんだって？」
「ええ」
「わたしたちもやってほしい」
「11月18日にやる」
「ホント？」
「約束した」
「だれ？」
「ジンとリニ」
「何も聞いていないけど」
「まだ和食習ってないから心配なんじゃないか？」
「和食やるの？」
「そのつもりだ」
「なにやるの？」
「まだ東京のスパイス和食教室に行ってないから」
「自分でもわかんないのか」
「ええ」
「ジンもリニも心配だな〜それだったら」
「わたしみんなに話すよ？」
「ええ」
「なんで？自信があるの？」
「少しはコツがわかった」
どういうわけだか、ラナンの湯花邪無との話しぶりが親しさを増したように思った。
どうしてもミナに持っていかれる湯花邪無がわからなかったのかもしれない。

「マレーシア料理テイクアウトしてきた」
「これあなたのナシルマツ」
「ごはんとおかずが入ってる」
「弁当のようなもの」
「ああ」
「まだつくったばかりだから」
ジャカルタとクアラルンプールは近い。まだごはんが温かい。
「コーヒー」
「ありがとう」
「ミナから連絡あった？」
「ありません」
「ミナ専用の電話はどこにあるの？」
「アースカーだけど」
「それじゃ〜わかんないじゃない」
「さっき帰りに見ました」
「わたしの知らない番号？」
「ええ」
「安心しないで」
「ミナはワルイオンナじゃないけど」
「ワルイ」
「どうしてですか？」
「教室でもあなたにしか話さないんだって？」
こんな話しをどこから聞いてくるのだろう。
「あなたもよくない」
「失業中で独身」
「独身は独身だけどわたしのこと愛していないの？」
「スキなオンナがいるって話すような機会がない」
「部屋まで連れてってくれって今までも言われたんでしょ？」
「あなたがフリーだと思ったんだよ」
「そうじゃなくて〜私は高く売れたんだと思う」
「どういうこと？」

「ものになりそうな人がいたらレストランなどに紹介する」
「この前はそうだった」
「私はここで言わなかったら向こうも迷惑する」
「向こうってレストラン？」
「ええ」
「だから〜私個人ではなくて儲けのためじゃないかと思うんだけど」
「そしたら両方だね」
「絶好じゃない」
「失業中だし」
「ウソはよくないよ」
「和食は湯花邪無でやってる」
「あたりまえじゃない」
ジンがここまでミナのことを警戒していたとは知らなかった。平気でミナと食事だと言っていた。
喜んでいた雰囲気だったのだろうか。
「明日わたしムンバイなんだけど」
「あなたは？」
「ゆっくりします」
「何もないの？」
「ええ」
「リーマイが昆明に行くんだけど一緒に行ってあげればいいのに」
「私が一緒だと思うように決められない」
「意識するの？」
「ええ」
「わたしは関係ないけどな〜」
「ジンと水野さんだけです」
「あなたを意識しないのは？」
「ええ」
結局ミナの話は眠るまでなかった。
雰囲気では、ジンはまだ安心はしていないようだった。

昆明に来てくれ

「早いけど出るから」
まだベッドにいた湯花邪無に投げキッスをしてジンは出かけた。
日曜である。
湯花邪無は、日曜だけが何もない。それでもお腹が空く。
シャワーをしてキッチンへ向かった。
コーヒーが煎れてある。
卵なのかケーキなのかわからない。フライパンで膨らんでいた。パンだろうか。
何もすることがない。
11時になってアースカーに乗った。
お昼は外でおいしいものを食べようと思った。
「ミスタージャム何していますか？」
「ゆっくりしている」
「ヒマですか？」
「どうしたのだ」
「わたしでは判断できないから昆明に来て」
「12時30分があるから」
「13時20分に昆明の空港で待ってるから」
「お願いします」
リーマイは、それだけ言うと電話を切ってしまった。
何が判断できないのかわからない。
どうせ今日はヒマである。
結局おいしいお昼を食べようと思って出たのだがジャカルタ空港のおそばになってしまった。
「ゴメンなさい」
「ヒマだからなんでもない」
リーマイはレンタカーに乗っていた。
「アースカーのレンタカーはないんです」

「空港から高速で15分くらいです」
「途中にｙｕｈａｎａの森昆明があるんだけど今日は街の方のスパイス工房昆明に行くから」
アースカーは80キロしか出ないのだが、リーマイはガスカーで１２０キロで飛ばす。
湯花邪無は80キロしか乗ったことがないので目が回ってしまう。
アッという間に工房のようなところに着いた。
「リージャン豆板醤工房」
「リージャンという人がやっているのか」
「７軒目でやっとこれだと思う人に会えた」
「今日の朝から７軒回ったのか」
「休みのときに来ていた」
「なかなか思うような人に出会わなかった」
「待ってるから」
駐車場までリージャンは出迎えてくれた。
「いらっしゃい」
50代の感じのよいオトコだった。
「お茶にするのか見学するのか」
「見学だ」
味噌をつくるのと似てると思った。麹で発酵させるのだ。
「仕込んで豆板醤になるまでどのくらいかかるのか」
「６ヶ月だ」
「リーマイのレシピだと最初からやらないといけないから６ヶ月はかかる」
リーマイはそっとレシピを湯花邪無に見せた。
湯花ジャムは豆板醤のレシピなど見たこともない。
「スパイスがたくさん入っています」
「少しコストが高くなるかもしれない」
「このレシピでつくったことがあるのですか？」
「テーブルではたくさんやっています」
「自信は？」
「あります」

「リージャンどう思いますか？」
「おいしいに決まっている」
「どうしてだ」
「スパイスは使えば使うほどおいしくなる」
湯花邪無はよく知ってはいる。しかし豆板醤にも言えるかどうかわからない。
「明日１万の仕込みをやってみるが」
「あなたが買わなかったら私の豆板醤にする」
「来年の４月12日だ」
「わかった」
「発注をもらったことでいいのか」
「よい」
「増産しようとして工房を増設していた」
「それをスパイスｙｕｈａｎａ昆明にしよう」
「それはありがたい」
「材料は揃っているのですか？」
「量産試作用に手配してあった」
「スパイスもか」
「もちろんｙｕｈａｎａのスパイスだ」
リーマイは、急に湯花邪無にｙｕｈａｎａの森昆明を見せたくなった。
「ミスタージャム車に乗ってくれ」
「なんだ」
「ｙｕｈａｎａの森昆明を見てくれ」
リージャンは、明日のリーマイの豆板醤の仕込みの準備をはじめた。
「リージャンを先に決めたんだけど」
「そら豆とレッドペッパーの栽培は自分がやろうと思う」
「少し荒れているけど買いたい」
「テニスコート５００枚ある」
「いくらなのだ」
「30万ドル」
湯花邪無はこうなるとは思わなかった。

だからリーマイと一緒に来なかったわけではない。
リーマイの考えがここまで煮詰まっているとは知らなかった。
フツウの畑だった。
「リーマイ今日は見るだけでにさせておいてくれ」
「ジンや水野まさみさんの意見も聞きたい」
「私が会えば決まってしまう」
「わたしの考えを聞いてください」
「わたしは昆明に引っ越してこのｙｕｈａｎａの森昆明を整備してレッドペッパー10種類を商品にする」
「もちろんそら豆も」
湯花邪無は、昆明の空港から水野まさみとジンとエミルとステファノにメールをした。１万の豆板醤の発注は商品だが30万ドルの買い物はみんなの了解を得ておきたい。
湯花邪無は、羽田空港からアース炊飯器のスイッチを入れた。アース鍋で焼きサバと肉ジャガを食べようと思った。
ジニに教わったアース鍋とアース炊飯器は絶好だった。北千住の飲み屋さんに寄ることもなくなった。
「おはよう」
「ごちそうさまで〜す」
湯花邪無が来たらみんなで合唱するつもりだったのだろう。
今日はスパイス湯花の新宿のお店の44人にお昼ごはんをつくる。ナシゴレンだ。ハンバーグ付である。
「ミスタージャムおはようございます」
牧野由香がコーヒーを煎れてきた。
「今日は９時30分になったら買い物出かけます」
「アジア食材店です」
「わかった」
「昨日調べてきましたけどすべて賄えます」
「わかったありがとう」
水野まさみが何か話したそうだった。
「ジンから電話があったんだけど」

「なんですか？」
「スパイス豆板醤１万すべてジャカルタがやる」
「試作もしていないのにですか？」
「何度もジンは食べているそうです」
「どうしてですか？」
「テーブル試作は何度もやっているから」
「水野さんは？」
「わたしははじめて聞いた」
「ジンが言うんだったら大丈夫」
「月に５万にしないと品切れで忙しくなる」
「エミルからもこんなんでは中国では販売できない」
「どういうことですか？」
「ジャカルタだけで１万やるだろうから」
「５万に増やすんだろうか」
「来年４月から毎月５万」
「すごい数になるけど」
「マーボ豆腐はミスタージャムもスキでしょ？」
湯花邪無はリーマイに電話した。
「リージャンは５万の生産をしている」
「どうしてだ」
「ジャカルタは勢いがあるから全部やると言うに決まっている」
「中国で販売できない」
「読まれているのか」
「そうだ」
「来週の日曜に昆明に行きます」
「ｙｕｈａｎａの森昆明のことか」
「そうだ」
「会ってくれるのか」
「そうだ」
「11時ごろでいいか」
「わかった」

湯花邪無が思っていたよりも事態が大きく展開しそうだと思った。
「ミスタージャム買い物に行きます」
湯花邪無はスパイスｙｕｈａｎａジャカルタの営業車にはじめて乗った。
アースカーだった。
「小さな車なんだ」
「機械運ぶわけではないから」
確かにそうだ。
買い物はほぼ牧野由香に任せた。
湯花邪無は44人前がわからない。どのくらいの量を買えばいいのかわからないのだ。
牧野由香は手際よく買い物をした。
「帰りますけど平気ですか？」
「忘れ物ないですか？」
「平気だ」
11時になって牧野由香がやってきた。
「エプロンはありますか？」
「持ってきた」
「お願いします」
水野まさみは珍しそうに見ていた。
「わたしは何をしたらいいか指示をください」
「ごはんをお願いします」
44人前のごはんなど湯花邪無にはわからない。
「プレッシャーありますか？」
「ある」
「リラックスして」
「わかってる」
ハンバーグを小さいが44人前つくる。
ミナの料理教室ではハンバーグをやっていない。
それでも応用できるようになっている。
「ハンバーグにゴボウ入れるんですか？」
「多くないけど」

「なんでゴボウがあるのかわかりませんでした」
「おいしいと思うんだけど」
「やったことないんですか}
「ない」
牧野由香は湯花邪無の顔を見た。
それでも湯花邪無は自信があった。
ミナに教わったところは応用だったと思う。
ナシゴレンはおかずをごはんの周辺にたくさん乗せる。
今日はハンバーグがごはんの上に乗る。
「ごはん仕込みました」
「日本のごはんでいいんですか？」
「日本人ですから」
「硬めのごはんです」
「このハンバーグを焼いてください」
「フライパンです」
「最後にたまご焼きを乗せてください」
「わかりました」
湯花邪無は、おかずをたくさんつくりながらソトアヤムの準備をした。
鶏肉である。
少し米の麺を入れる。
野菜を多くする。
適当な器がない。味噌汁のおわんを使うことにした。
「手際がいいですね」
気がつかなかったが水野まさみとジニが後で見ていた。
スイーツコラツもつくる。
ココナツミルクとサツマイモである。
デザートである。スイーツだ。コーヒーは常に用意してある。
11時50分になって湯花邪無は洗い物をはじめた。
牧野由香は出来上がっているナシゴレンのごはんの上にハンバーグを乗せている。おかずは７種類ある。自分で選んでごはんの周りに乗せる。
「牧野さんはソトアヤムをみんなによそってあげてください」

「私はおかずをごはんの周りに乗せることを知らせるから」
「わかりました」
最初はみんなはとまどっていた。湯花邪無のエプロン姿に驚いていた。ナシゴレンのよそり方を静かに聞いていた。
次第にあちこちで声が上がっていた。
「おいしい」
多分こう言っている。
「スイーツコラッツもあります」
牧野由香はみんな知らせて歩いた。
スイーツコラッツなどわからない。
みんなそっと取りに来た。
「水野さんもおいしそうに食べています」
「ジニに聞いてきてきれないか」
牧野由香はジニに聞きに行った。
「最高においしいそうです」
「これでインドネシア料理は卒業できるそうです」
「ありがとう」
湯花邪無は、多くのメールに驚いていた。
「ミスタージャムがこうなっていることを知りませんでした」
「おいしかったですありがとう」
ミナの料理学校を止めると新宿のスパイス湯花にいる時間がながくなった。
「明後日誕生会だけど」
「平気です」
「インド料理だけど」
「どこですか？」
「借り切った」
「レストランですか？」
「そう」
「朝からここにいるから」
「次の日はスパイスｙｕｈａｎａジャカルタね」
「ええ」

「18日はスパイスｙｕｈａｎａカサブランカね」
湯花邪無は聞いていなかった。
「聞いていないのね」
「もしもし」
ジンからすぐに電話がきた。
「ワルイ〜話すの忘れた」
「18日はジャカルタでしょ？」
「一緒に行くから」
「ワルイ」
申し訳ないくらい言った方がいいとは思う。
「やっぱ忘れてたのね」
「和食らしいけど」
17時30分になって湯花邪無は北千住のマンションに向かった。
「お先に〜」
「ごちそうさまでした〜」
湯花邪無はそっと左手を挙げるだけだった。
今日はビールを買って刺身を食べたい。
北千住のスーパーマーケットに向かった。
10月14日だった。
いつものようにアースカーで華美美鈴を検索した。
何もない。
すでにモスクワに入ったのだろう。
「おはよう」
「おはようございます」
いつものようにみんなの声が揃っている。
「今日はガランね」
「そうです」
「明日は新宿の誕生会ね」
「そうです」
「今晩は東京なの？」
「ジャカルタです」

ジンはうれしいと言いそうになってことばを飲んだ。
「コーヒーにしました」
リニがすぐにやってきた。
「新宿のみんなご馳走になっておいしかったったらしいけど」
フツウの言い方ではない。
「11月18日に和食をやります」
「すごく楽しみにしています」
「プレッシャーも大きい」
「わたしたちこれからシンガポールに行って来ます」
「わかりました」
シンガポールは、ずっと人口が増え続けている。１２００万人になっている。
政策的に人口を増やしているからだ。
経済は人口が増えることが活気を与える。
シンガポールは、ずっと経済的には活気のある国である。狭い国土なので人口密度は極端に高くなっている。
シンガポールは豊かな国なので、移民を止めてしまったら即豊かを維持するエクスタシーに襲われてしまう。
スパイスｙｕｈａｎａジャカルタからの通信販売も、シンガポールはよく売れる。
12時になってラナンがやってきた。
「ミスタージャムわたしが一緒に食べる」
「ありがとう」
「どうして私と一緒に食べるのだ」
「ジンから電話がある」
「寂しがりだから一緒に誘って」
湯花邪無は知らなかった。
いつもジンがいないときは、リニかラナンがやってくるのはジンが頼んでいたからだ。
それにしても寂しがりだからというのはよくない。
「アヤムリチャリチャだ」

「おいしそうだ」
「ごはんはチャーハン」
こういうごはんはジャカルタはほんとにおいしい。
「ガランにはスパイスｙｕｈａｎａでごはん食べるって言ってあるのか」
「言ってない」
ラナンはメールをはじめた。
「ごはん食べたら行くでしょ？」
「ええ」
「わかったって」
「ありがとう」
どうもジンに操られている気がしてきた。
「ガランこんにちわ〜」
「よろしくお願いします」
ガランはインドネシアターメリックの栽培写真と製造工程の写真を湯花邪無に見せた。
「これをガランが説明できないか」
「わたしが撮ったのだから大丈夫」
「写真とシナリオを書いていこう」
それから延々とガランのシナリオを２人で書いた。
19時になった。
「ガランどうする？」
「もう１日必要ね」
「20日はどうか」
「わたしは大丈夫です」
「13時30分に来るから」
「わかった」
「時間とらせて申し訳ない」
「わたしはすごく勉強になっている」
「ありがたいと思っている」
「そう言ってもらえると助かる」
湯花邪無は次第にスケジュールが詰まってきているのを感じていた。

華美美鈴に何もないことが幸いである。急場に間に合わなかったら困る。

アースプレーン

華美美鈴は、マンションに帰るときに、ソーラーカーで華美美鈴を検索した。
もうクセになっている。
「華美美鈴がフロリダでアースプレーンを操縦するようです」
「アースプレーンがどうやって動くのかわかりません」
「華美美鈴はロシアから月に向かう予定です」
「ロシアの月連絡船のアースバッテリー化を行ったようです」
「17日出発予定ですがその前にアースプレーンの試験飛行を行うと発表しました」
「場所はフロリダです」
「明日日本時間21時に中継します」
フロリダでは15日早朝である。
「ただいま」
「おかえり」
「もう１日かかるのね」
ジンはなんでもよくわかっている。
「20日にしました」
「新宿の日だけど」
「お昼から来ます」
「そうか」
「マーボ豆腐だけど」
「いただきます」
ジンはいつものように積極的だった。
もしかしたら今日は新宿かもしれないと思っていたのだ。
10月15日だった。
湯花邪無は早く起きてジャカルタ空港に向かった。

「電話してよ？」
「わかった」
湯花邪無は気になっていたのだ。
アースプレーンとはなんなのか。
どうして湯花邪無が試験飛行をしないといけないのか。そもそも飛行機なんか運転できるのか。
ところが、情報は何もなかった。
「おはよう〜」
「おはようございます」
新宿のお店のみんなはハモリはじめた気がする。
こんなことをどこかで練習するのだろうか。
「今日わかってますか？」
水野まさみが聞いた。
「わかっています」
「17時30分に一緒に出ますから」
「わかりました」
「みんな楽しみにしています」
「なぜだかわかりますか？」
「自由だからです」
「自由ってなんですか？」
「やってやってんだから出ろよとかないから」
湯花邪無にはそういうものはない。
「今日は山井さん兄弟は来るのですか？」
「来ます」
「ハーブティーにしました」
牧野由香がやってきた。
「ありがとう」
「お昼はどうしますか？」
「いただきます」
「承知しました」
湯花邪無は、アースプレーンのことが気にかかる。

中継するとテレビは言っていたがどういうつもりなのだろう。情報はない。
アースプレーンとはなんなのか、解説があってもよさそうなものだ。
なにもない。
「ミスタージャムお昼を食べに行こう」
ジニがやってきた。
「水野さんも牧野さんもパーティーの準備に行っている」
「わかった」
「温野菜のサラダドンブリ」
どういうものか返事に困った。
タマネギとかぼちゃとナスやブロッコリーやキャベツなど10種類くらい入っていそうだった。
「ドンブリにするのは自分でやるんです」
「わたしはこのまま白いごはんで食べます」
湯花邪無は迷った。結局、ジニと同じように器の温野菜にタレをかけて白いごはんのおかずのようにして食べた。
「これはおいしいな〜」
「オンナが多いからね」
「こういうのが食べたい」
「ミスタージャム大学の講義の11月１日はなんだ」
「ターメリックだ」
「誰が手伝っているんだ」
「ガランだ」
「12月１日はなんだ」
「ガーリックのつもりだ」
「わたしに手伝わせてくれないか」
「リーマイがやることになっている」
「１月１日はなんだ」
「まだ決めてない」
「わさびをわたしにやらせてくれないか」
「わかった」
「ホント？」

「１月１日だ」
「わたしはリーマイのように写真を撮って解説をするのか」
「そうだ」
「準備しててもいいか」
「まだ時間があるけど」
「ジャカルタの大学でわさびは平気なのか」
「私は日本人だから」
「わかりやすく説明すればいいのか」
「使われ方をいっぱい説明すればいいのか」
ジニは自分もリーマイのようにやりたかったのだ。
「水野さんと牧野さんに話しておいた方がいい」
「わさびの森にも行くことになるのだろうから」
「わかった」
「ミスタージャムありがとう」
「なんでもない」
16時になって水野まさみと牧野由香が帰ってきた。
「少し狭いと思ったけどピッタリかもしれない」
「インド料理のレストランでしょ？」
「17時30分になったら出ます」
「わかりました」
「私のやることは何かあるんですか？」
「何もない」
「誕生日の人のお祝いは？」
「わたし」
「わかりました」
「インド料理おいしいから」
「わかりました」
高齢社会の日本にあって、スパイス湯花は特別である。みんな若い女性である。
まだ創立して間がないこともある。
２１０９年にスパイス湯花はできた。まだ６年しか経っていない。いずれス

パイス湯花も高齢化するのかもしれない。
湯花邪無は、インド美人の奇妙な踊りを見ながらビールの摘みを食べていた。やはりインドも辛い。
「ミスタージャムカレーが５種類もあっておいしい」
ジニが知らせにきた。
みんな楽しそうだった。
みんなが次々にやってくる。モテているわけではないのだが、ちょっと手を出す感じである。
「モテモテね〜」
「たいした話しをしているわけではありません」
「それはそうだろうけど独身だし」
水野まさみも冗談を言いにやってくる。
湯花邪無は時計を見た。
「後があるのですか？」
「ありません」
「誘われません？」
「誘ってはいけないものだと思われてる」
「誘いません？」
「それはありません」
「グッドね」
湯花邪無は気が気ではなかった。
21時に牧野由香があいさつをした。
湯花邪無は急いでアースカーに向かった。
まだビールが残っている。運転はできない。
「みなさんおはようございます」
「１９４０年ごろに戦争がありましたがその時にアメリカの海軍が使っていた飛行機です」
「ジェットではありませんプロペラです」
「アースバッテリーでプロペラを回して走ります」
「スピードは出ません」
「それではエンジンをかけます」

「音はしません」
いきなりプロペラが回りはじめた。
意外と簡単に離陸した。アースバッテリーである。音がない。不思議な飛行機である。
ライブテレビはずっと中継をしていた。
華美美鈴は、視聴率がとれるのだろう。空中サーカスをやっているわけではないのだが、湯花邪無もずっと見ていた。まだアルコールが残っていたのだが、運転をアースカーに任せて北千住のマンションに帰った。
アースカーに任せた証拠さえあれば、違反にはならない。アースカーの自動運転が最も違反率が少ない。
また何かあったら困る。飛行機が着陸して華美美鈴が降りてきて、カメラの前に立った。
「アースバッテリーは音もしないし故障も少ない」
「世界ではじめてのアースプレーンなのだが、これから多くのみなさんに使っていただきたい」
「決してロンドンアメリカを現在のような短時間で行き来する便利な飛行機を否定するものでもありません」
「ゆっくりですが安全なアースプレーンも乗り心地満点です」
これだけ言うと、湯花邪無は車に乗り込んだ。サングラスのジムがドアを開けていた。
そして車は走り去った。
サマンサと２人の警備員は別の車だろう。
なにかあったらサマンサから電話がくるだろう。
湯花邪無は、シャワーをして疲れたと思った。

モスクワから月へ

10月16日だった。今日はジャカルタの誕生日会である。華美美鈴の動きがあると胸が高鳴ってしまう自分を抑えようがない。
一緒に住んでいると、こういう高鳴りは読まれてしまうのではないかと思っ

てしまう。
北千住のマンションでは、沢風ゆりに読まれた気がする。沢風ゆりは華美美鈴の体育学校の同級生である。
沢風ゆりはもう帰っては来ないだろう。
華美美鈴は、日本で追われて沢風ゆりにかくまってもらった。沢風ゆりがいなかったら湯花邪無が華美美鈴と出会うことはなかった。
人間とはおかしなものである。
羽田ージャカルタは50分である。これ以上は縮まりそうもないしその必要もない気がする。
アースカーで華美美鈴を検索した。
なにもない。
モスクワに向かったのだろう。
「おはよう」
「おはようございます」
「ミスタージャム昨日はどうでした？」
「楽しかったです」
「インド料理はどうですか？」
「日本人向けにしてあるからしつこい感じはしませんでした」
「今日はモロッコ料理です」
「わかってます」
「お出かけですか？」
「大学へ行くだけです」
湯花邪無はジンが見えないのが気になっていた。
リニがハーブティーを持ってきて話している。
湯花邪無は、華美美鈴ばかり気になっていたが、急いでメールを見た。
「カサブランカで品切れで怒られている」
「謝って対策を話してくる」
「明後日には解決するので心配いらない」
「午後には帰ってくる」
湯花邪無は慌てて返事をした。
「よろしくお願いします」

「返事が遅いけど」
ジンは、湯花邪無の返事を待っていたに違いない。
「わたしはラナンと今晩の準備に行きます」
「お昼はどうされますか？」
「大学で食べます」
「わかりました」
湯花邪無は、ジャカルタの大学で和食の本を読んだ。けっこうキチンと本は揃っている。
ネットでも多くの書が無料で読めるようになっている。
あてがあるわけではないのだが、料理の芯はなんであるか確かめたかった。
インドネシアの料理はスパイスが芯である。
魚でも肉で野菜でも芯にはならない。スパイスの技が美味しさを決することになっている。
何もわからないまま15時になった。
「どこにいますか？」
「遅くならないように帰って」
「カサブランカは明後日納品することで落ち着きました」
ジンは帰ってきたようだ。
このままでは、10月22日の大野真由美の和食教室は、わけのわからないまま参加することになる。
ミナのジャカルタ料理教室も何もわからないままだった。事前に何か準備をしようとするのは日本人のワルイクセかもしれないと思った。
「ただいま〜」
「おかえりなさい〜」
「どこだったの？」
「大学です」
「ミスタージャムは教授だけど研究室はあるの？」
「ありません」
「どこにいるの？」
「図書館です」
「調べモノがあるのね」

「ええ」
「もうどこも行かないでしょ？」
「ええ」
「もうすぐ出るから」
「リニとラナンが準備してくれたから」
「ああ」
ジャカルタのｙｕｈａｎａは全ての業務を切り上げて集まって誕生会に行く。
10日も前からホームページでもお店でもお知らせしてある。誕生会をやるからと知らせてもクレームはない。ジャカルタの人は日本の人とよく似ている。
いい人が多いのだ。
モロッコ舞踊なるものをはじめて見た。
「ステファノがいないけどどうかしたのですか？」
湯花邪無はガダラに聞いた。
「明後日のモロッコの誕生会に出るのだそうです」
「モロッコはまだ人が少ないからと言っていました」
「もう３日も前から出かけています」
「なるほど」
ジャカルタの社員は、みんな楽しそうだった。湯花邪無のあいさつも何もないのだ。売上を増やせと言われるわけでもない。ホントに自由なのだ。
誕生祝いの花束と祝いの品物はジンが渡した。
湯花邪無のやることは何もない。ただにこやかにしているだけだ。
ジンは片づけがあるから遅くなる。ジャカルタではお酒がないのでみんな早い。料理をタッパに詰めて持ち帰る。
誕生を祝ってもらった社員が帰りに湯花邪無のところにみんなであいさつにやってくる。
そして湯花邪無とスマホで記念写真を撮る。
みんなうれしいのだ。
家族用に現金も入っている。
これはジンがそうした。少しでいいからと言った。

湯花邪無は、帰りのアースカーで華美美鈴を検索していた。運転はアースカーに任せていた。
「こんばんわ〜」
ミナから電話だった。
「ミスターユハナはどこにいるの？」
「みんなに聞いても誰も教えてくれないし」
「わたしが嫌いになったの？」
「お酒が入っていますね？」
「ジャカルタではお酒はダメです」
「待ってるから来て」
「東京だから難しい」
「友達が来たから切ります」
「なに言ってんの〜」
ミナはそれっきり電話してこなかった。
東京だといったからだと思う。ジャカルタにいると言ったら迫られたかもしれない。
「明日は新宿なの？」
「ええ」
「シャワーしよう」
最近はジンもお姉さんぽくなってきていると感じる。
「明後日わたしも行くから」
「カサブランカの誕生会ですか？」
「うん」
「わかりました」
「あなたいいんだけどみんなを盛り上げられない」
ジンがこんなことを言ったのははじめてである。
「何か気に入らないのか」
「あなたは最高だからそのままでいい」
「盛り上げられない」
「誰も大学の教授やれない」
「盛り上げられなくてもいい」

「わたしがやるから」
その夜もジンは積極的だった、どうして次第に姉っぽくなっていくのかわからない。
夜もである。
「わたし今日はハノイに行くから」
「あなたはなんなの？」
「新宿だから」
「そうか」
「先に行きます」
「私もすぐに出ます」
今日はスパイスｙｕｈａｎａには寄れない。昨日東京に行ったのではないかと思われている。
今日は華美美鈴がモスクワから月に旅立つ。
華美美鈴を検索したが何もない。
「おはよう」
「おはようございます」
「わたしは長野にでかけますけどミスタージャムは？」
「お昼はここで食べます」
「わかりました」
湯花邪無は気になっていた。
今日10月17日は華美美鈴が月へ向かう。ロシアの月連絡船もアースバッテリーに変更するのだ。
なにも華美美鈴が一緒に乗り込むことはないと思うのだが、誰も止められないのだろう。
ジニがやってきた。
「牧野さんは今日はお休みです」
「コーヒーにしました」
「ありがとう」
「わさびも売れているんだけど和がらしも売れている」
「水野さんは何かあったのですか？」
「なにもないと思う」

「定期的に長野に行っている」
「１月１日にわさびを手伝わせてくれるのは変わってないのか」
「変わらない」
「山井さんにも話しをした」
「手伝ってくれている」
「スパイス湯花のみんなが勉強になるようなものにしたい」
「ミスタージャムの大学の講義なんだけど」
「かまわない」
「わたしも学習できてる」
「わかった」
「お昼になったらまた来る」
「ありがとう」
湯花邪無は、スパイス湯花の仕事はなにもしないようにしている。２人の社長がいるのだ。
インターネットで和食を調べる。
湯花邪無は、スパイス学の教授なのだが、料理はまるでダメである。やっとミナの料理教室でインドネシア料理を学んだ。スパイスの使い方を学んだ。
今度は和食をやる。
どうしてこれほど何もわからないかと思うくらいに何もわからない。
そもそも和食がなんで成り立っているのかわからない。
インドネシア料理はスパイスで成り立っている。
スパイスを使わないインドネシア料理はない。
和食は醤油なのだろうか。
しかし醤油を使わない和食もたくさんある気がする。
「ミスタージャムお昼です」
「今日はおいなりさんとタコの酢ミソ和えです」
「おいしそうだ」
酢ミソ和えには醤油は使うのだろうか。
タコとキュウリとワカメの酢ミソ和えには醤油は使ってなかった。
ミソを使ったら醤油は使わないのだろうか。
よくわからない。

味噌汁などは醤油を使わない。醤油味のおつゆには味噌は使わない。
「おいしいな〜」
「タコの酢ミソ和えですか？」
「うん」
「おいなりさんもおいしいでしょ？」
「おいしい」
午後になってジンからメールがきた。
「ハノイも在庫を持って通信販売できるのだがやったら品切れする」
「しばらくジャカルタから配送する」
「運送費が高いから大きく売上を伸ばすことはない」
「ホーチミンも同じ状態だ」
「残念だが在庫が切れてしまうから仕方がない」
湯花邪無は、「了解しました」を送った。
みんなよく働いている。
15時になった。
華美美鈴がいきなり現れた。
「それではいってきます」
「すべてアースバッテリーに変更しました」
言ったのはそれだけだった。
世界中の人が見ている。
わずか10分後だった。
バスが出るかのようにロシアの宇宙連絡船は発射した。
湯花邪無は、見えなくなるまで見ていた。爆発はしない。順調に上昇しているようだった。
「お先に〜」
「おつかれさまです〜」
お店のみんなは、湯花邪無がどう言ったらどう返事をするか決めているのだろう。お客さんたちは驚いてしまう。
湯花邪無は北千住のスーパーマーケットでアース炊飯器のスイッチを入れた。焼きサバのアース鍋と鳥のひき肉ミートボールを食べることにした。
そして、自分でタコの酢ミソ和えをつくってみることにして売場に向かっ

た。
意外と簡単にタコの酢ミソ和えができた。
スパイス湯花でお昼に食べたタコの酢ミソ和えと遜色はない。
珍しく冷酒を飲んだ。
華美美鈴を検索してみたが、なにもない。順調なのだろう。

なぜモスクワからジャカルタ

湯花邪無は、ネギ納豆を朝ごはんにした。
一旦はスパイスｙｕｈａｎａに行かないといけない。ジンが待っている。一緒にカサブランカに行くのだが、夕方のモロッコの誕生会に間に合うように行くのかどうかわからない。
「おはよう」
「おはようございます」
いつもと変わらない。
「ジンが待っています」
リニが下からついてきた。
「ハーブティーでいいですか？」
「お願いします」
「待ってたの」
「すぐに行くのですか？」
「ｙｕｈａｎａの森モロッコも行こうと思って」
「わかりました」
急いでリニがハーブティーを煎れてきた。
「これｙｕｈａｎａの森のコーヒーです」
「モロッコの誕生会の２人にお祝いです」
「リニありがとう」
ジンはうれしそうにコーヒー豆を自分のバックに収めた。
ジンは、スパイスｙｕｈａｎａカサブランカの社長である。モロッコのことにリニが気配りしてくれることがうれしい。

「10分で出るから」
「わかりました」
「なにもありませんか？」
「ジャカルタは順調」
「順調ではないところはあるのですか？」
「ない」
「わかりました」
湯花邪無は、今晩カサブランカに泊まるのかどうか聞きたかったのだが、聞けなかった。
アースカーも別々である。
「今日はカサブランカだろうか」
湯花邪無はジャカルタ空港でジンに聞いた。
「帰る」
「カサブランカお酒飲まないから早く帰るから」
「わかりました」
「あなた今日はどこなの？」
「ジャカルタです」
「明日昆明に行きます」
「30万ドルの支払いの契約するのか」
「ええ」
「わかった」
「うれしい」
ジンはｙｕｈａｎａの森モロッコへ最初に向かった。ラバトの北のオリーブ畑にある。
ステファノが駅まで迎えに来ていた。
「ステファノしばらく」
「栽培の方はどうですか？」
「順調とまではいかない」
「苦戦してますか？」
「最初だから少しは苦戦かな」
「近所が売ってくれるからスパイス工房には迷惑はかけてないが」

「なるほど」
アイチャが駐車場でニコニコしながら待っていた。
「アイチャ元気そうだけど」
「栽培だから１日で大きくなるものではないが失敗はないからジッと待っている」
「見せてもらっていいですか？」
「時間は？」
「12時になったらスパイス工房に行きます」
「わかりました」
12時になってステファノがスパイス工房まで送ってくれた。
「エミル来てくれたのか」
スパイス工房モロッコにはエミルが待っていた。スパイス工房モロッコの社長でもある。
「お昼を用意している」
「先に食べて工房を案内しようと思う」
エミルは、みんなが一緒に食事をしているダイニングへ案内した。
社員が６名である。全員で一緒にごはんを食べる。新宿でもジャカルタでも同じである。
「こんにちわ〜」
「今晩楽しみにしています？」
「和食レストランはみんなはじめてです」
「おすしはおいしいから」
「どうぞ」
「ラム肉と野菜のクスクス」
湯花邪無はモロッコ料理をおいしいと思っている。
「みんな料理が上手だな〜」
「料理ができないと結婚できない」
「なるほど」
湯花邪無とジンは、エミルの案内で工房を見て回った。
ほんとに工房である。
「こんにちわ〜」

ジンは、スパイスｙｕｈａｎａカサブランカに入るとひときわ大きな声になった。
「カヌメこんにちわ～」
カヌメは接客中で目で合図した。ジンは湯花邪無にバッグを預けて接客しはじめた。
日本料理のお店は、さして遠くない場所にあった。
ｙｕｈａｎａの森モロッコがオンナ４名オトコ３名、スパイス工房モロッコがオンナ４名オトコ２名、スパイスｙｕｈａｎａカサブランカがオンナ６名だった。
それにステファノとエミルとジンと湯花邪無である。
少人数のパーティーである。
「東京もジャカルタもやっているのか」
「そうだ」
「カサブランカでこんなことをやってくれる会社はない」
「うれしい」
カヌメがうれしそうに話した。
「わたしが手配をしましたがはじめてなのでよくわかりません」
「まずはおいしい日本の料理をいただきましょう」
ジンも湯花邪無もあいさつはない。
みんなが楽しければいいのだ。
10月誕生日の２人は大喜びだった。
ジンの言うようにカサブランカの夜は早い。
ステファノとエミルとジンと湯花邪無はジャカルタへ帰った。それでも、ゆっくりである。時間に追われることはない。
「みんな喜んでた」
「そうですね」
「どうもありがとう」
ジンが湯花邪無にお礼を言うことに驚いてしまった。
「明日は何時？」
「９時のジャカルタ発に乗ります」
「おいしい朝ごはんつくるから」

10月19日だった。
９時のジャカルタ発昆明行きにリーマイも乗っていた。
「昨日は楽しかったですか？」
「楽しかった」
「ｙｕｈａｎａの森昆明とスパイス工房昆明ができたら誕生会やってもいいですか？」
「どうぞ」
「約束ですよ？」
「ええ」
11時に約束どおり、空港とスパイスｙｕｈａｎａ昆明の間にあるｙｕｈａｎａの森昆明の候補地にやってきた。
オーナーのリンシメイはすでにテニスコート５００枚分のｙｕｈａｎａの森昆明を計測して杭を打ってくれていた。
「そら豆も唐辛子も植えてあるところを選んだ」
「ありがたい」
「30万ドルだが今月末に振り込むことができるか」
「大丈夫だ」
「それでは確認しよう」
「土地の図面だ」
「誰のものにするのだ」
「ｙｕｈａｎａの森昆明」
「代表者はリーマイだ」
「書類を書いてくれ」
「10月31日に振り込まれていることを確認したら一緒に役所に行く」
リーマイは、慎重に書類を書いた。
「それでは10月31日に待っています」
リンシメイはお昼をご馳走してくれた。うれしかったのだろう。
「リージャンが31日いるか確認してください」
「スパイスｙｕｈａｎａ昆明の契約の相談をしようと思う」
「どうするのだ」
「スパイスｙｕｈａｎａ昆明という会社をつくる」

「すべてリージャンのものだが」
「リージャンが社長で会社をつくってもらう」
「リーマイは取締役で入ってほしい」
「そういう交渉ですか？」
リーマイはリージャンに電話をして10月31日の15時のアポイントをとった。
湯花邪無は昆明から羽田に向かった。
華美美鈴が月に到着しているはずである。
検索したが何も情報がない。何も情報がないことは、予定通りに進んでいることを意味する。湯花邪無は、そのまま月に降りずに引き返しているはずである。ロシアの月連絡船のアースバッテリー化である。月ではすでのホテルも離発着駅もアースバッテリーになっている。
地球到着は21日だ。
湯花邪無は、北千住のスーパーマーケットからアース炊飯器のスイッチを入れた。
ゴーヤチャンプルを３食つくることにした。アース鍋だ。
豆腐を買って冷やし豆腐と味噌汁にした。
最近の湯花邪無の北千住での生活は、食事が中心である。帰りにうなぎ屋に寄る事もない。
ミナの料理教室に通ったことが大きい。料理することに抵抗がなくなった。
食材から料理をイメージすることができるようになっている。
10月20日になった。快晴だった。
「おはよう」
「おはようございます」
顔を見なくても声で湯花邪無だとわかるのだろう。
「お昼からガランと打ち合わせがあるのでジャカルタに行きます」
「わかりました」
「なにかありますか？」
「順調です」
湯花邪無は水野まさみに任せているので、口も手も出さない。湯花邪無がやることは、ｙｕｈａｎａの森モロッコやｙｕｈａｎａの森昆明のように、新

しい仕事を始めるときだ。ジンや水野まさみでは決めきれないことをやる。
湯花邪無は、午後からのガランとのターメリックの打ち合わせについて考えていた。
打ち合わせはほぼ終わっている。作業が残っているのだ。
「ミスタージャムお昼はどこで食べるの？」
牧野由香が電話してきた。
「12時のジャカルタ行きに乗るから」
「ジャカルタ空港でおそばにします」
「わかった」
湯花邪無は、ジャカルタ空港でおそばを食べることが多くなった。おいしいのだ。日本人がやっている。
「もしもし」
「どうしたの？ジャカルタ？」
「直接ｙｕｈａｎａの森に行くから」
「お昼はどうしたの？」
「空港でおそば」
「夜は？」
「ジャカルタです」
「うれしい」
近くに誰もいないのだろう。
湯花邪無はアースカーを走らせた。
「ダカラこんにちわ〜」
「ステファノはジャカルタですか？」
「みんなジャカルタです」
「お昼はどうしました？」
「ジャカルタ空港でおそばです」
「わかりました」
「なにかありますか？」
「順調です」
「ガランを呼びます」
「私が行きます」

「後でおいしいコーヒーを飲みにきてください」
「ありがとう」
湯花邪無は、ｙｕｈａｎａの森の穏やかさが好きだ。
「ステファノしばらく」
「日本の料理教室に通ってるそうだけど」
「通うことになっているがまだ１回も行っていない」
「止めたのか」
「そうではなくて22日が１回目の教室だ」
「上手になったら食べさせてくれ」
「承知した」
ガランがやってきた。
「わたしの30分のパートは編集してみた」
「見てくれないか」
前回10月７日にほぼ見えていた。ガランは１人で30分の編集ができるようになっていた。
湯花邪無は、よほどのことがない限り、修正しないでこの30分を使おうと思った。
「ステファノには見せたのか」
「まだだ」
「呼んでくれないか」
30分のガランのパートを３人で黙って見た。
「よく勉強してくれてうれしい」
ステファノの反応は大学の教授のようだった。
ステファノにとっては、ガランは教え子のようなものだろう。
「ガランこのまま使わせてもらう」
ガランは驚いたように湯花邪無を見た。
「何かありますか？」
ガランはただ首を横に振った。
湯花邪無は、タベットのマンションに早く帰って11月１日の講義のスライドを完成させた。
「早かったのね」

「ええ」
「ガランどうなの？」
「準備してくれていました」
「できる娘でしょ？」
「そうでした」
「あなた和食はまだやってないの？」
「ええ」
「ご馳走してもらいたい」
「ちょっと待ってください」
「今日は鶏肉」
「張り切るから」
ジンは料理が早い。
「明日はなに？」
「ミナの料理学校の仲間のお別れ会」
「ミナも来るの？」
「来ません」
「じゃ〜朝からジャカルタなの？」
「ええ」
「わかった」
「じゃ〜ごはんにしよう」
「ええ」
タベットのマンションは湯花邪無が住んでいることになっているが、事実上はジンが住んでいて湯花邪無が２日に１日やってくる感じである。
「フフ〜昨日もよかった」
「わたしシンガポール行くから」
「まだ１時間寝てられる」
「ごはんできてるから」
「お先に」
「気をつけて」
湯花邪無はアースカーで華美美鈴を検索した。
何もない。

今日ロシアに帰還するはずである。
何もないことは順調に地球に帰還していることだ。
「おはよう」
「おはようございます」
「今朝はジンがシンガポールに出かけて不在です」
リニが１階の売場から一緒に階段を上がってきた。
「今日の予定は？」
「夕方ミナの料理学校のお別れ会です」
リニは驚いた顔をした。
「ああ〜ミナには知らせていません」
「教室の仲間だけのお別れ会です」
「ああ」
生返事をしてリニはお茶を煎れに行った。
「コーヒーがいいです」
「承知しました」
どういうわけだかミナのことはみんなが知っている。
ミスタージャムが危ないオンナだという評判なのだ。ミナはワルイオンナではない。湯花邪無にホレているだけだ。
リニはコーヒーを煎れてきた。
「明日は？」
「今晩の飛行機で東京です」
「明日は東京ですか？」
「そうです」
「わかりました」
「今日のお昼は？」
「リニと食べます」
リニはうれしそうに笑って言った。
「わかりました」
入れ替わるようにラナンがやってきた。
「ミスタージャム木曜日だけど」
「予定している」

「キャンセルしたらみんな怒る」
「キャンセルなんかしない」
「わかった」
それだけ言うとラナンは出て行った。10代の若者４人とカラオケの約束をしている。
ヘイジュードとイマジンをリクエストされている。ことあるごとに歌っている。
アースカーではカラオケの練習をするのにちょうどよい。
運転をアースカーに任せられるからだ。
誰もいない。
湯花邪無はイマジンを練習した。
「ミスタージャムお昼だけど」
リニがやってきた。
「行きましょう」
「今日はチャプチャイだ」
「おいしそうだ」
「今晩のお別れ会はどこでやるのだ」
「インドネシア料理店だ」
「立派なお店なんだ」
「私は失業中になっていた」
リニは驚いた。
「ミナは同情したかも」
これ以上この話はヤバイと思った。
しかし、リニの情報を何も持っていない。話がないのだ。
「ミナは連絡してくるのか」
「連絡はない」
「ストーカーとかないのか」
「全くない」
本気でみんなで心配したのだろうと思った。
「バレたらミナは怒るけど」
「ミナのために失業中だったわけではない」

「教室の仲間か」
「みんなお金がないのに修行してて１人前になろうとしている」
「社長の遊びのように思われたら困る」
「教室の食材もみんなでワリカンで買った」
「今日もまだ失業中なのか」
「そうだ」
「そうしないと仲良くなれないかも」
17時になった。
「ただいま」
「おかえり〜」
「もう出かけたかと思った」
「もう行きます」
「シンガポール順調だから」
湯花邪無は急いでアースカーに向かった。
「お先に〜」
「おつかれさまです〜」
一瞬湯花邪無の足が止まった。
おつかれさまとかは〜ジャカルタでは聞かない。
湯花邪無はアースカーに乗るなり運転を任せて華美美鈴を検索した。ロシアの月連絡船の発着場に着いていた。
中継をしていた。
華美美鈴が降りてきた。
月連絡船はすべてアースバッテリーになりました。安心して月にお出かけください。
それだけ言うと、華美美鈴はバックヤードに消えようとした。慌てたキャスターが追おうとしたとき、華美美鈴が戻ってきて言った。
「次はジャカルタに行きます」
それだけ言うとさっさとバックヤードに消えた。
どういうつもりなのだろう。
ジャカルタは危ない。
意味がわからない。

どういうつもりなのだ。
プライベートジェットでやってくるに違いない。
もし30分後だったら18時30分にはジャカルタに来る。
フツウは休んでくる。明日かもしれない。１週間後かもしれない。
湯花邪無は、アースカーをレストランの横に止めた。駐車違反になる。10分だけ乗っていてくれるようにレストランのウエイターに頼んだ。そっとチップを渡した。
「10分過ぎたら仕事に返らないとクビになる」
ラエルもサナもナミラもヤユクもミジルもレストラン勤めの２人の女性も揃っていた。
まだ20分も前だった。
「今日はミスターユハナのために集まった」
「せっかく仲間になれたのに残念だがミスターユハナは和食をやりたいらしいから仕方がない」
「お茶で乾杯しよう」
「ちょっと急用ができて45分外すけどゴメンなさい」
「まだ18時になってないから勘弁してください」
「特別に日本の焼き鳥を頼んでおいたから食べて話し込んでいてください」
ポカンとしている７人を残して湯花邪無はアースカーに向かった。アースカーは80キロしか出ない。空港まで急がないといけない。
計算だと18分で着く。
18時に空港にいた。華美美鈴がモスクワからそのままジャカルタに来たらこの時間である。
そもそも、何をするためにやってくるのだろうか。
湯花邪無は、華美美鈴のことをわかっているつもりである。危険であることも承知している。誰もが予想しないこの時間にやってくると思った。
プライベートジェットでやってくるのだが、すでに到着しているかもしれない。
「左に見える空港ホテルの３１８号室にいる」
「30分後にフロリダに出発する」
サマンサからメールだった。

どういうつもりだろうか。
湯花邪無は５分後にはエレベーターにいた。
３階のエレベーターの前にジムがいた。
「10分ある」
「３１８だ」
湯花邪無は黙って３１８に向かった。
少しドアが開いている。
華美美鈴がドアの前にいた。
「ありがとう」
「ええ」
「来てくれるかわからなかった」
「ジャカルタは危険だけど」
「すぐにフロリダに帰る」
「なぜだ」
「会いたかった」
「キスして欲しい」
湯花邪無は、華美美鈴の肩を引き寄せた。
「月にいたときこうしたかった」
湯花邪無は、前から手を胸に滑らせた。
カタチのよい乳房である。
「今日はムリ言ったから時間どうりにしないといけない」
「じっとしてて」
「キスすると話しできないから困る」
「２分話したことがない」
湯花邪無は華美美鈴の口を塞いで左手で華美美鈴の頭を引き寄せた。
そのまま何分か経った。
「わたしもうダメ」
「ジムから電話くる」
華美美鈴のスマホが静かに揺れた。
華美美鈴は、スっと湯花邪無から離れた。
「またサイン出すから」

「うれしい」
「階段で行って」
華美美鈴は、ドアを開けた。
「左だから」
華美美鈴は、振り返らずエレベーターに向かった。
湯花邪無は３分走って、空港を見ていた。
小型のジェット機が飛び立った。
まだカメラマンもジャカルタ空港には集まっていない。
そもそも、いつ華美美鈴がジャカルタに行くのかわからない。
「お待たせしました」
湯花邪無が７人の元に帰ってきたのは19時だった。
みんな話しが盛り上がっていた。
「ミナから連絡はあるのか」
「時々ある」
「ミナは元気なのか」
「会ってないのか」
「ミナは新しい８人のクラスをはじめてそこのイケメンを追いかけはじめている」
「それで連絡がなくなったのか」
「オレたちも後３回で終わる」
「よく続いた」
「ミスターユハナのおかげで楽しかった」
「これからも時々一緒にごはん食べたいけど」
「オレが誘うから」
ヤユクが言った。
もう誰も、湯花邪無が１時間席を外したことなど覚えていない雰囲気だった。

大野真由美

湯花邪無は、北千住のマンションに少し遅くなって帰ってきた。７人の仲間とおしゃべりしていることが楽しい。ついつい時間を忘れてしまう。
華美美鈴を検索した。
何もいない。
次はジャカルタですと言ったのだが、いつジャカルタに行くのか誰もわからない。
もう華美美鈴はニューヨークかフロリダにいるはずである。
気なる記事があった。
アメリカの大手の飛行機会社が、アースカーと同じくらいの価格でアースプレーンを発売すると発表した。
華美美鈴が試験飛行をした飛行機だろうか。
最大積載量が１００キロである。１００キロ以上の人は一人でも乗れない。
アースカーの最大積載量を調べてみた。２００キロだった。それだけ飛行機はリスクが高いのだろう。
華美美鈴からメッセージが出た。
「ジャカルタに寄ってニューヨークに帰ってきた」
たったこれだけだったが、誰に宛てているのかわかりやすかった。
10月22日朝からさわやかな天気だった。少し寒い。
今日は大野真由美スパイス得意の和食料理教室の１回目である。
「おはよう〜」
「おはようございます」
「ミスタージャム今日は何時ですか？」
「15時30分渋谷です」
「１回目ですか？」
「そうです」
「ミナさんは何もないのですか？」
「ありません」
一緒に２階への階段を上がりながら牧野由香が聞いてきた。
ミナのことは、社員の間に話題になっているのだとわかる。
ミナの料理教室を切り上げて今日から大野真理子の料理教室だ。よかったのかもしれないと思う。

「大野真理子さんから電話がありました」
水野まさみがおはようの前に言った。
「なんですか？」
「気が変わってないか」
「ああ〜15時に行きます」
「気が変わっていたら電話すると言ってあるから」
「わかりました」
「コーヒーにしました」
牧野由香がコーヒーを煎れてきた。
「何かありますか？」
「順調です」
「今日わさびと鶏と米のスープと鶏肉バジル炒めと生バジルと乾燥バジルのネット販売開始するから」
「わかりました」
「ホームページ見て下さい」
はじめてのレトルトの販売である。
「おいしそうだけど」
「おいしいです」
「出荷日は11月１日です」
「11月１日になったらお店でも販売します」
「わかりました」
「わたしおすし屋さんに行って来ます」
「スライスわさびを毎日２００本のお電話なんだけどお断りしないといけないから」
「ああ〜」
「これからどうしますか？」
「毎日１０００本以上はできませんよ？」
「１０００本でもムリしてると思うんだけど」
「わたし時々見に行ってますけどパニックではありません」
「でも畑がもうムリなんです」
「そうですね」

「八ヶ岳以外でも始めますか？」
「畑だけでも」
「考えておきましょう」
「１番大事なことは〜わさびの森とわさび工房のみんなのやる気ですから」
「そうこうしているうちに競合が出るかもしれないけど」
「特許ですか？」
「特許ですけど破られるかもしれません」
「とにかく今日はお断りしてきます」
「わかりました」
牧野由香も気になるのか聞いていた。
「お昼用意していいですか？」
「お願いします」
「サバの味噌煮ごはんです」
「わかりました」
水野まさみは急いで出かけた。
湯花邪無は、大野真理子の料理教室のホームページを見ておこうと思った。
包丁を持ってこなかった。何か用意するものはないのだろうか。
「15時にお伺いしますが何か準備するとか持っていくものはないのでしょうか」
「今日はみなさん最初の１日なので私の調理を見て下さい」
「７名です」
「おでんです」
アッという間にショートメールがきた。
12時になって牧野由香がやってきた。
「スパイスいっぱいのサバの味噌煮を食べに行きましょう」
「わかりました」
「明日リニたちと食事会ですか？」
湯花邪無は驚いて一瞬返事に困った。
「カラオケです」
「明後日楽しみです」
リニたちから社内にメールが流れるのだろう。

「ネギ納豆ありますけど」
「持って行きます」
「ありがとう」
サバの味噌煮はおいしかった。
「こんにちわ〜」
「湯花邪無さんいらっしゃい」
「これで全員揃いましたのではじめたいと思います」
「今日はわたしがおでんをやりますのでみなさんで食べてください」
「来週からはわたしはメニューを出しますからみなさんで買いものに出かけてください」
「どこで買い物するかも皆さんで相談してください」
「名札をつくっていおきましたからどうぞ」
「自己紹介は各自で行ってください」
「それでははじめます」
「エプロンは用意するのですか？」
「ご自分で考えてください」
湯花邪無はマイ包丁とエプロン持ってこようと思った。
女性が４人に男性が３人である。
おじさんが１人で若手の調理人風が１人である。
湯花邪無は、ダシをよく見ていた。
４種類の粉に醤油とみりんと酒だろうか。
大野真理子はナミとは違うようだ。
あまり話をしない。見て覚えてくれといった様子である。
みんな静かに大野真理子の手際を見ている。コンニャクを簡単に切ったのだが風変わりなカタチに巻いてしまった。ダイコンも大きなものではない。
カットして風変わりなカタチをしている。
大野真理子の特長は食材のカタチにあるようだ。女性らしいカタチである。
豆腐を油揚げで包んで爪楊枝で綴じてダシに入れた。
「どうですか？」
「おいしそうです」
「おでんでこんなカタチははじめて見ました」

大野真理子の料理は和食で女性に向けられていると思った。おでんのこんにゃくも小さく切られ煮物のようだ。

「来週の水曜日29日の15時にお待ちしています」

「最初にメニューを説明して買いものに行っていただきます」

「わたしと一緒に料理をします」

「みなさんで８人分の食材を買ってください」

「わたしをお手本にしてください」

「いいですか？」

湯花邪無は、早速、北千住のスーパーマーケットに寄っておでんの材料を買った。大野真理子と同じようにやってみようと思ったのだ。アース炊飯器のスイッチを入れた。アース鍋は今日は休みである。

上海では狙われる

ウランバートルの格納庫に閉じ込められる

10月23日木曜日である。いつものようにアースカーで羽田に向かった。
華美美鈴を検索した。なにもない。
アースバッテリーは確実に世界に普及している。華美美鈴の献身的なパフォーマンスによるところが大きい。
常に危険に見舞われている。
既存のエネルギーを仕事にしていると、アースバッテリーが憎くなるのだろう。華美美鈴が憎くなる。
羽田の搭乗口で有村聡が真野裕也と待っていた。
「華美美鈴はジャカルタに来たのか」
「知らない」
「会ってないのか」
「全く知らない」
「誰もが不思議に思っている」
「今はどこにいるのか」
「フロリダらしい」
「急ぐから」
有村聡たちも華美美鈴がなぜジャカルタに行くと言ったのかわからないようだった。
多分、ゼッタイに誰にもわからないと思った。
「おはよう」
「おはようございます」
湯花邪無はいつものようにカレットのスパイスｙｕｈａｎａに入った。
「ミスタージャムおはよう」
「ジンおはよう」
「今日はラナンたちとカラオケね」
「ええ」

「それまでは？」
「ここにいる」
「夜は？」
「ジャカルタです」
「うれしい」
ジンの聞かれてはならないことばをかき消すようにラナンが入ってきた。
「ミスタージャムわかってますか？」
「わかってる」
「練習しましたか？」
「自信がない」
「みんな楽しみにしてるから」
「わかってる」
「ハーブティーです」
「ありがとう」
ジンはラナンを見ていた。
ジンとカラオケに行ったことがない。
まずいかもしれない。
ジンは１階の売場に呼ばれて出て行った。
華美美鈴をチェックしてみた。
「華美美鈴です」
「ウランバートルにいます」
「ゲルで使っていただくことにしました」
「フロリダに帰ります」
神出鬼没である。
ウランバートルの話しなど聞いたことがない。
サマンサからメールがきた。
「ウランバートルの空港から離陸できない」
「飛行機の格納庫に閉じ込められた」
「メールが届いたら返事して」
「届いた」
湯花邪無はゆっくり飛び出した。

「夕方まで外出します」
ジンにメールしておいた。
ジンがどこにいるかわからない。
10時30分40分で着く。
湯花邪無は迷わず飛び乗った。飛行機で考えなければならない。なんなんだ。
サマンサはアメリカにも電話できるはずだ。アメリカから誰か助けに行ったことはない。
国家では動けないのだろう。
格納庫のカギがないのだろう。どうしよう。
11時15分には到着ロビーにいるだろう。
チンギスハーン空港を調べた。
格納庫が５つある。
端の１番小さな格納庫がプライベートジェット用だろう。
格納庫に行くにはどうすればいいのだろう。
次の飛行機を調べた。13時30分ジャカルタ発だ。
湯花邪無は何も持っていない。パスポートと財布をズボンの後ポケットに入れている。スマホはシャツの胸だ。上着はアースカーに置いてきた。
手袋をした。
トイレの隣の職員通路のドアを開けて急ぎ足で進んだ。先に何があるのかわからない。キョロキョロしていたら疑われる。
帽子が必要だ。左のロッカー室に入って見回した。
カギがかかっていそうだ。
左から３番目のロッカーを開けてみた。カンだったが当たった。帽子を借りて外へ出た。
２人すれ違った。
何も気にしていない。
この帽子はどういう帽子なのかわからない。
空港スタッフの帽子には間違いないようだ。
そのままの勢いで多分滑走路へ降りる階段を下りた。
こんなふうにここまで来れていいものかと思ってしまう。

左に大きな格納庫が見える。手前の格納庫が１番小さい。
「何番目の格納庫？」
短いメールをサマンサに送った。
返事を待つまでもなく１番小さい格納庫に向かった。
誰かが出てきた。
湯花邪無は目であいさつをしてそのままドアが閉まる前に中に入った。
驚いたことに飛行機はゼロだった。
いきなり焦ってきた。
さっき出て行ったオトコがドアを開けた。
カギをしたいようだ。言葉がわからない。間違えて入った雰囲気を身体で示して外に出た。
どうしよう。
次の格納庫に行くしかない。
サマンサからメールがない。どうしたのだろうか。
次の格納庫はカギが締まっていた。
汗が溢れるのではないかと思ってきた。どうすればいいのだろう。
サマンサはなにをしているのだろう。手でも縛られたのだろうか。
仕方なく３番目の格納庫に向かった。これはかなり大きい。
その時２番目の格納庫が開いた。飛行機が出てきそうだった。急ぎ足で２番目の格納庫に向かった。
人が少ないのはどういうわけだろうか。
大型のプロペラ機が出てきた。
一瞬だがサマンサを見た。
そして奥に見慣れた小型ジェット機があった。どこかに連れ去られようとしている。
湯花邪無は、瞬間にプロペラ機の前に出て手を振った。
飛行機は止まった。
バックするような仕草をした。これでバックするとも思えないのだが、不思議と飛行機はバックした。
「どうしたのだ」
英語だった。

湯花邪無はサングラスをした。
「嵐が来る」
「聞いてない」
「一緒に来てくれ」
「機長１人なのか」
「そうだ」
湯花邪無はどこに連れて行けばいいのかわからない。
「ちょっとレーダーを先に見てくる」
「急いでいるんだ」
「気象室に行ってくれ」
腹立たしそうに太った機長は出て行った。
湯花邪無は急いでプロペラ機に入った。
タイヘンである。サマンサもジムも２人の警備員も眠っていた。どうしたらいいのかわからない。
「湯花邪無なの？」
後から華美美鈴の声がした。
サングラスを外して華美美鈴を見た。
ものすごく驚いた顔の華美美鈴がいた。
華美美鈴はサマンサの頬をビンタした。続いてジムをビンタした。ものすごい音がした。そのまま２人の警備員の頬をビンタした。
「３分で出発してくれ」
ジムは走ってプライベートジェットに向かった。ジムが機長なのだろう。
「サマンサどうしたんだ」
「多分コーヒーにクスリが入っていた」
「急いで」
「いつもありがとう」
湯花邪無は小型ジェットがプロペラ機の横を通れるかどうか確認して建物へ急いだ。
「待って」
華美美鈴だった。
「またサイン送るから」

「わかった」
湯花邪無は脱兎のように駆け抜けてロッカーのノブに借りた帽子をかけて職員通路から出た。
どこからかの飛行機が着いたのだろう。お客さんがゾロゾロ歩いていた。
一瞬でその中に紛れ込んで外に出た。そのままチケット売場に向かった。
湯花邪無がジャカルタから乗った飛行機の帰りのようだった。12時10分発である。
湯花邪無はそのままチェックカウンターへ向かった。
誰も追われることなく飛行機に乗った。
５つの格納庫が見える。
１機の小型ジェットが飛び立った。
湯花邪無が見慣れた華美美鈴のプライベートジェットだ。
「ただいま」
「おかえりなさい〜」
13時30分だった。
「夕方までかと思った」
「お昼はなんでした？」
「食べたいの？」
「ラナン〜」
「なんでしょうか」
「ミスタージャムがお昼残ってるか聞いてる」
残っていたマーボ豆腐のようなお昼ごはんを食べた。
「ニューヨークに着いた」
サマンサからメールが届いた。
華美美鈴を襲っているのは誰なのだろうか。
プロ集団であることは間違いない。
アースバッテリーに反対する人達がプロ集団に頼んでいるのだろう。湯花邪無が、そんなプロ集団を手玉にとっている状況ができている。おかしなことだ。ただ湯花邪無は、華美美鈴の事だったら身体が瞬時に動いてしまう。すごいアイデアが閃いてしまう。
ただ敵を探ることは困難だと毎回思う。

はっきりしているのは、日本の戦車の会社だけである。
日本の戦車の会社は、戦車にアースバッテリーを使いたがっている。自動車で80キロしか出せないパワーである。戦車が動かせるわけがない。強力パワーのアースバッテリーを開発させたがっている。拒否している先里風香を誘拐したい。そのために先里風香とコンビでアースバッテリーの普及に飛び回っている華美美鈴を拉致したいのだ。
他にも、日本には、アースバッテリーに拒否反応をする集団がいそうである。日本だけでもこうである。どこに行くにも狙われると考えた方が好ましいのだろう。そのために、ジムとサマンサと２人の警備員が常に華美美鈴を守っている。それでも、ジムたちはプロ集団に出し抜かれて湯花邪無に電話してくる。
湯花邪無はビジネスマンで大学教授である。スパイの訓練など受けてはいない。しかし、どういうわけだか、いつもすごいアイデアが閃いてしまう。
「晩ごはんはいらないのね」
「ええ」
「オーナーだからね？」
「わかってます」
ジンは17時30分に帰宅した。
18時10分前になってラナンがやってきた。
「出るけど」
「わかった」
「ミスタージャムのアースカーで行く」
「近くじゃないのか」
「近いけど駐車場があるから便利だ」
「わかった」
カラオケなのだが食事もメインになっている。４人で２回目だ。十代の女性なのだが湯花邪無がいて緊張することはなくなった。
「すごい食べるから驚いています？」
「私もけっこう食べる」
「そうですね」
「和食の料理教室どうですか？」

「インドネシア料理より難しいかもしれない」
「なにが難しいですか？」
「今度の先生は食材のカタチにこだわるから」
「あんなふうには包丁を使えない」
「豪快じゃないんだ」
「繊細な先生です」
「ミナとは会ってるんですか？」
「連絡はありません」
「うわさになってましたけど」
「ミスタージャムはミナに食べられちゃうんじゃないか」
「私は料理に興味がある」
「スパイスの会社の社長だから」
「ミナは教室の新しいイケメンに熱を上げてるって話しです」
「よく知ってるな〜」
湯花邪無はヘイジュードとイマジンを歌った。
２００年前に流行った音楽だ。ジャカルタの若者に流行っている。
「早いじゃない」
「お酒を飲まないから」
「みんなどうした？」
「お店を替えてお茶しています」
「先に帰ってきたの？」
「ジャマになりそうだったから」
「いまごろはミスタージャムの話になってるね」
「明日東京までメールが走る」
「シャワーするけど」
誘われている。
10月24日だった。
「鶏かゆだから食べて行って」
「わかった」
「新宿だよね」
「ええ」

「わたしは上海に行ってくる」
「え？」
「上海を見てくる」
「ジャカルタと東京とカサブランカと次は上海だから」
「お願いします」
湯花邪無は、いつものようにジャカルタ空港から羽田に向かった。
羽田で有村聡と真野裕也が待っていた。

豫園

「よくわかりますね〜私の動きが」
ウランバートルに行ったことがバレたのだと思った。偽名で飛行機に乗っているわけではない。調べればわかる。ただ、華美美鈴がウランバートルで格納庫に閉じ込められて危うくプロペラ機で拉致されそうになったことは誰も知らないはずである。
「何か用事ですか？」
「上海に行くことになってるが危ないと思っている」
「華美美鈴ですか？」
「なにをしに行くんですか？」
「新幹線だ」
中国の新幹線網は世界で１番である。メキシコシティー方式をやるのだろうか。
メキシコシティーの新幹線が動くのは２１１５年の６月10日である。まだ８ヶ月はある。
「それでいつ行くのですか？」
「10月26日だ」
ウランバートルで拉致されそうになったばかりである。
「上海なんか危ないと思っている」
「行くのですか？」
「華美美鈴を守る予算をもらっていない」

「情報だけを上げないといけない」
「なぜ私に話すのですか？」
「湯花邪無は助けられる」
「私は何もしていない」
「証拠はないが湯花邪無が動いていると思っている」
「私は何も情報がない」
「中国なので華美美鈴を拉致したりしないとは思う」
「いいですか？」
湯花邪無は、有村聡がウランバートルのことを何も聞かなかったのでホッとしている。閉じ込められて拉致されそうになったことは誰も知らないのだと思った。自分がウランバートルに出向いたことを調べられていない。
しかし、今度の上海は、調べられそうである。
「おはよう」
「おはようございます」
「歌が上手になったんですって？」
「え？」
湯花邪無は驚いてしまった。
ジニが一緒に階段を昇りながら話してきた。
「みんな知っているのですか？」
「まあ〜知っていると思います」
「上手くなってはいないと思う」
「ミスタージャムおはよう」
水野まさみが張りのある声であいさつした。
「おはようございます」
「歌が上手になってきたんですって？」
このぶんだとだれかれとなく聞かれることになると思った。
「かろうじて歌えているんです」
「イマジン歌ったんですって？」
牧野由香がコーヒーを煎れてきた。
ジニはウソでしょ？という顔をしている。
「何もありませんか？」

「順調です」
「今日はジンが上海に行ったんですって？」
「そのようです」
「自分で行ったんだ」
「準備をしたいようです」
「お店ですか？」
「ええ」
「私も行ってきていいですか？」
「どうぞ自由にしてください」
牧野由香とジニは驚いた顔をした。
こんなことを言うオーナーなどいないといった顔だった。
みんな忙しそうに出て行った。
湯花邪無は中国新幹線を調べた。ネットに詳しく出ている。
中国は広いからだろうが、新幹線網がすごい。飛行機網もすごい。なにせ人口が多いのだ。しかしこのところインドに何から何まで抜かれている。人口が何といってもすごい。中国は人口減少に陥っている。世界人口も２２１４年には現在の１００億人が70億人に戻るらしい。もう肝心の中国の人口が減っているのだ。
中国の人達みんなが豊かになったからだ。一足先に豊かになった日本では、もう８４００万人しかいない。豊かを維持したいためにあかちゃんを生まなくなるのだ。
それでも日本では豊かを維持したい人が多いのだ。
現在では上海や北京の人達も東京と同じようになっている。
中国も人口が減少するのだ。もういけいけではやっていけない。電力も厳しくなる。第２新幹線なのだが、アースバッテリーを使いたいのだろう。
中国の人は商売上手である。アースバッテリー新幹線が完成したら世界に売り込みそうである。アフリカ諸国はみんな豊かになりそうである。１００年後には新幹線網ができているだろう。アースバッテリーの可能性が高い。なにせ新幹線は電気を喰う。
中国には、時速５００キロのリニア新幹線も走っているのだが、上海ー北京第２新幹線はアースバッテリーにするのだろう。リニアはなにせ電力喰いな

のだ。アメリカにもリニア新幹線が走っているが、赤字路線になりそうである。アースバッテリー新幹線では電気代がタダである。赤字にはならない。
日本のリニアは10年は喝采を浴びたのだが、電気を喰い過ぎて赤字路線になっている。人口が８４００万人になって、集客がタイヘンである。
日本は、アースバッテリーを開発した先里風香とその普及に身体を張っている華美美鈴が出身者としていながら、日本国内の電力供給バランスを保とうとしている。
先里風香は日本に帰るとアース戦車やアースプレーンなどの武器開発のために拉致されることは確実である。
華美美鈴が日本の武器製造会社に拉致されそうになるのは、先里風香が狙いである。
それとは別に、先里風香と華美美鈴がジャマの勢力がいくつもある。暗殺できればそれでいいのだ。
こんな状況で上海に行くことは危険である。
ウランバートルでは拉致されそうになった。多分、日本の武器製造会社が関与しているのだろう。
しかし、上海では誰が襲うのかわからない。
中国の体面もあるので、公式の席では狙わないだろう。湯花邪無は、あれこれ考えてしまう。襲う勢力の立場で考える。湯花邪無は念のためにジャカルター上海のフライトスケジュールを調べておいた。頻繁にある。バス並みである。
上海で会議である。ホテルであろう。予想されるホテルを調べた。
「ミスタージャムお昼です」
「今日は頼まなかったけど」
「わたしが水野さんに頼まれました」
「まだ帰れないからわたしのごはんをミスタージャムにしてくれ」
「行きましょう」
「水野さんはどこですか？」
「小田原のお客さんです」
「今日はすき焼き風ドンブリです」
「おいしそうだ」

牧野由香がやってきた。
湯花邪無の検索履歴を見られるとヤバイ。検索履歴はすぐにクリアやーするしパソコンには常にロックをかけている。
「ミスタージャム和食の料理教室はどうですか？」
「まだ１回しかやってない」
「美人ですか？」
湯花邪無は返事に困った。
こんな質問がくることなど想像もしていない。
「繊細な人だって聞きました」
「水野さんからですか？」
「ミスタージャムに紹介したって聞きました」
「いつかここのお昼をお願いします」
「そうなるとうれしいんだけど」
16時になって水野まさみが帰ってきた。
「おつかれさま」
「わさびを業務用で入れてくれだったのですがお断りしました」
「価格が合いません」
「おっしゃってることはわかるんですけど」
「わさびはそう簡単には増やせないから」
朝から出かけて16時である。かなりねばられたのだろう。
「お店に行ってきます」
「なにかありませんでしたか？」
「何も聞きません」
水野まさみはネットショップのスタッフの部屋に向かった。
「おさきに〜」
「おつかれさまで〜す」
スパイス湯花の正面玄関の売場にいる社員たちはどうしてこうも声を揃えられるのか不思議である。お客さんは一瞬ビックリするのだが、湯花邪無を見て納得する。
北千住のスーパーマーケットでスマホのアース鍋を調べた。
ゴーヤチャンプルを食べないといけない。沖縄そばを探した。珍しいことに

沖縄そばを売っていた。
明日の朝ごはんにパンを買った。まだ食パンが残っていたかもしれない。あまりにもカレーパンがおいしそうだった。
チューハイにしてゴーヤチャンプルを食べた。
アース鍋にして料理に失敗がない。集中して調理するからだろう。
華美美鈴のニュースは何もない。ホントに上海に行くのだろうか。虹橋駅のホテルで打ち合わせをする可能性があるのだが、情報はない。真野裕也はありもしない話をしたのだろうか。
10月25日だった。
湯花邪無は、用事はないのだが羽田に向かっていた。
「懸案になっていた第２上海ー北京新幹線のアースバッテリー化の検討に入りました」
華美美鈴ではこの記事は出てこない。
中国新幹線で出てきた。しかも、今朝である。
しかし、華美美鈴が上海に行く話しは出ていない。明日のことだ。もしかしたら華美美鈴は、もう上海に入っているかもしれない。
「今日はジャカルタに来るのか」
ジンからメールだった。
「今向かっているが今日と明日は大学のことで忙しいかもしれない」
「そんなことは聞いていない」
「もうすぐ搭乗する」
湯花邪無はヤバイと思った。
華美美鈴のことが頭にはまっている。何かあったらすぐに出られるように状況づくりをしている。
「おはよう」
「おはようございます」
スパイスｙｕｈａｎａは土曜日でも通常通り営業している。繁華街にある。土曜日や日曜の方がお客さんは多い。
みんな土曜日曜も含めてシフトして勤務している。週４日勤務制である。
「今日と明日は忙しいの？」
「ああ〜かもしれない」

「今晩は？」
「ジャカルタです」
「う・・・・」
ジンはうれしいという言葉を飲み込んだ。リニがやってきたからだ。
「ハーブティーです」
「ありがとう」
「今日は忙しいんですって？」
湯花邪無はヤバイト思った。こころが躍っているのだ。ボロを出してしまいそうである。
「ちょっと大学に行かないといけない」
「お昼はどうしますか？」
「大学で食べます」
「わかりました」
まずいことになったと思った。
真野裕也は、華美美鈴が上海に行くのは26日だと言った。今日は何も起こらない。それでも用事もないのに大学に行くハメになってしまった。
「わたし上海に行くから」
「どうしたんですか？」
「リーマイと一緒に行くから」
「わかりました」
「なにかありますか？」
「ジャカルタは順調です」
「わかりました」
湯花邪無はどうしたものか迷った。
「大学に行きます」
湯花邪無はリニに聞こえるように大きな声で言って下へ降りていった。
「出かけてきます」
「行ってらっしゃい〜」
湯花邪無は、アースカーで大学へ出かけた。
「浦東空港から虹橋に向かっているがリムジンに閉じ込められたと思う」
サマンサからのメールである。

湯花邪無はアースカーで大学ではなくてジャカルタ空港に向かわせた。10時22分である。10時48分には乗りたい。80キロしか出ないのでおまわりさんに止められることはない。
急いでゆっくり５分前に搭乗した。
ジンとリーマイと同じ飛行機になるわけはないが、アースカーで着替えをした。グリーンのジーンズのパンツに白のシャツ若葉色のジャケットである。ジャケットのポケットにパスポートと財布とスマホを入れた。手に何も持たないことにした。サングラスを忘れないように持った。湯花邪無を知っている人が見ても、湯花邪無とは思えない。ブラックの軽い皮のスニーカーにした。足音も出ない。
ジェームスボンドという映画が１３０年前にはじまって50年前までやっていた。
自分がジェームスボンドみたいだと感じた。
11時36分だった。急いでタクシー乗り場に向かった。サマンサからのメールは10時22分である。１時間14分が経過している。
湯花邪無は目をこらして浦東から虹橋までの状況を見ようとしていた。サマンサにメールしたいのだが、スマホを確保されていたら湯花邪無がわかってしまう。
サマンサからのメールは、メールの発信先が暗号のようになっている。特殊な方法なのだろう。
湯花邪無のメールでは湯花邪無である。
「あなたは誰ですか？」
「上海ですか？」
最悪の場合にも言い逃れができるようなメールをサマンサに送った。
返事が返る気配はない。
華美美鈴たちのリムジンはホテルに行ったのだろうか、それともどこかに拉致されたのだろうか。
湯花邪無は、考え込んでいたのだが、どうしたらいいのかわからない。
「浦東空港から虹橋に向かっているがリムジンに閉じ込められたと思う」
サマンサのメールを読み返してみた。
返事がないから閉じ込められたことは間違いない。

ケータイも取り上げられただろう。
「上海にはリムジンタクシーはあるのですか？」
「１台は今日走っている」
「何台あるのですか？」
「もう１台は今日は動かない」
「タクシー会社はいくつあるのですか？」
「浦東空港はうちだけだ」
「その１台は今動いているのですか？」
「何がしたいのだ」
「夕方２台使えるかと思って」
「誰か来るのか」
「空いてなかったらリニヤーで虹橋に行くけど」
「２台同時には空かないと思う」
「１台はどこに行っているのだ」
「わからない」
「どうするのだ」
「手配するのか」
「リニヤーにする」
「夕方だと車が混むからその方がいいだろう」
「午前中は混まないのか」
「そうだ」
「リムジンに乗っている人と連絡がとれるのか」
「ケータイを使えばいい」
なんとか運転手から情報を得ようとするがうまくいかない。
「みんなリニヤーに乗るのにどうしてタクシーなんだ」
「意味がわからない」
「バンドの方へ行くことがほとんどだ」
「急用を思いついたのでそこで止めてくれないか」
カンである。湯花邪無はバンド方面に向かおうと思った。
11時52分だ。10時22分から１時間30分が過ぎている。
「バンドに行ってください」

「リムジンタクシーを見なかったですか？」
「さっき豫園で見た」
「そこへ行ってください」
「バンドはどうするのだ」
「次にバンドに行く」
どうして豫園にいるのだろうか。
わけがわからない。
そもそも華美美鈴を拉致した人物は何をしようとしているのだろうか。虹橋のホテルの明日の会議に出席しなかったらいいのだろうか。
華美美鈴は明日動くはずなのにどうして今日動いたのだろうか。
「あそこにリムジンがいるけど」
通りの反対側の豫園の入り口近くにリムジンが止まっている。
「ここでいいです」
横断歩道の手前で止めてもらってそっとタクシーを降りた。
「待ちますか」
「ありがとう待たないでいい」
目立たないように湯花邪無は横断歩道を渡った。
人ごみに紛れてリムジンに近づいた。
いきなりサマンサとジムと２人の警備員が現れた。
驚いている湯花邪無を見ないで４人は豫園に向かった。
そしてドアから華美美鈴が現れた。
「あなたはやっぱジェームスボンドみたいだ」
「あなたがここに来るか賭けてみた」
華美美鈴は湯花邪無を見ないまま言った。
「わたしと豫園を10分歩いて欲しい」
「みんなにムリを言った」
「リムジンは10分待ってくれるから」
危険である。
湯花邪無は華美美鈴と並んで歩いた。
最悪の場合は守らないといけない。
「明日は会議があるのですか？」

「わたしが来ることを誰も知らないはずだけど」
「私のカンだけど」
「誰もわたしだと思わない」
「でも危険だ」
「だから10分にした」
「どうして」
「あなたと豫園を歩きたい」
「ジムとサマンサと２人の警備員がストレスになる」
「あれ食べながら歩きたい」
いい匂いがする小麦粉の焼き物のようだった。
「後にいて離れないで」
華美美鈴は湯花邪無の腕を掴んで後に隠れた。
「２つください」
イケメンの湯花邪無を見て民族衣装のおねえさんが紙の袋に移してくれた。
みんな湯花邪無を見ている。
「どうぞ」
「ありがとう」
「誰もわたしに気がつかない」
「あなたばかり見てる」
「おいしい」
「この路地に入ろう」
豫園みやげをたくさん露天のように売っている。
中国娘のような目立たない服装で楽しそうに歩く華美美鈴を誰も気がつかない様子だった。
「あれはカリカリギョーザ？」
「ええ」
「あれも食べたい」
「それはどうするのですか？」
華美美鈴は口にゼンブ入れてしまった。
「２つください」
「食べながら歩くからそのままでいいです」

華美美鈴は左手で湯花邪無の右上腕を掴んだままだ。
トレイのような紙の包装紙である。両手を使わないと食べられない。
湯花邪無と華美美鈴はカリカリギョーザを食べながらゆっくり露天のような路地を歩いた。誰も振り返らない。
10分くらいすぐに経ってしまう。
どこからジムが現れて２人の前を横切った。
「時間だからリムジンに帰る」
「こんな楽しい時間をありがとう」
華美美鈴はまた湯花邪無の右の上腕を掴んだ。
「いい匂い」
「ここで一緒にごはん食べられたら最高なのに」
「急ぎましょう」
「わたしリニヤーで虹橋行くことになってるから誰もここにいること知らない」
「リムジンはいつ予約したのですか？」
「今日いきなり」
「わたしはまた賭けに勝った」
「また次も勝ちたい」
華美美鈴は、湯花邪無を見ないまま、掴んでいる腕を離してリムジンに乗り込んだ。
ジムとサマンサと２人の警備員もどこからか急に現れてリムジンに乗り込んでアッという間に出て行った。
湯花邪無は前に止まっていたタクシーに乗り込んだ。
12時49分だった。
湯花邪無は13時42分のジャカルタ行きに飛び乗った。
ジャカルタ空港で牛丼をテイクアウトしてアースカーで食べた。運転はアースカーに任せた。
湯花邪無は空港や上海で写真など撮られたくなかった。今日は大学に行っているのだ。学食でごはんを食べていることになっている。
途中のコンビニでコンビニコーヒーを買ってしばらく考えた。
華美美鈴にますますはまってしまうと思ってしまう。四六時中華美美鈴のこ

とを考えてしまうのではないかと心配になる。ジンがいるのだ。
それでも笑いがこみ上げてくる。
湯花邪無はゴミ箱に牛丼のカップを捨ててスパイスｙｕｈａｎａに向かった。
「ただいま〜」
「おかえりなさい〜」
15時20分だった。
「おかえりなさい〜」
リニがやってきた。
「ジンはまだです」
「どこですか？」
「上海です」
「上海のどこですか？」
リニは湯花邪無の顔を見た。おかしなことを聞くという顔だった。
「わかりません」
まさかジンに見られるようなことはなかったと思う。
「コーヒーですか？」
「ハーブティーがいいです」
「珍しい」
「どうしてですか？」
「わたしが出すのをダメしたことがないから」
「帰りにコンビニコーヒーをしたから」
「ハーブティーをお持ちします」
「お願いします」

上海－北京第２新幹線

ジンは17時近くになって帰ってきた。
心配だった。
まさか豫園には行かないとは思うのだが上海にいたはずである。

「待ってたの？」
「どこに行ったんですか？」
「南京西路」
「繁華街で少し高いんだけど」
「他には」
「南京西路を歩き回った」
南京西路と豫園はコンセプトが違う。オフィスに豫園を選ぶことはない。ジンが豫園に行くことはないようだ。
「わたしシャワーするから鍋見てて」
「噴くかですか？」
「噴かないようにしてある」
「見てればいいんだ」
ジンは素早くシャワーに向かった。
湯花邪無は、華美美鈴を検索した。明日26日に虹橋のホテルで会議がある。上海ー北京の第２新幹線にアースバッテリーを使うかどうかだ。
何もない。
華美美鈴がすでに上海に入っていることもニュースになっていない。
湯花邪無は検索履歴をクリヤーした。
ジンは今日も積極的だった。
「どうしたんだ」
「明日がなくても後悔しないようにする」
10月26日日曜日だった。
「今日はなんなの？」
シャワーのままパンを焼いていたジンが聞いた。
「東京に行く」
「用事？」
「私用だ」
「わたしはフツウの仕事だから」
「お願いします」
湯花邪無は、ジンよりも先にタベットのマンションを出た。
今日は華美美鈴が上海の虹橋のホテルで会議を行う。どういう会議になるの

か湯花邪無には見当もつかない。
たまたまの日曜だから空けておきたかった。
ジンには東京に行くと言ったのだが香港に向かった。上海の近くに今日はいた方がいいと思ったのだ。カンである。
香港空港のホテルのカフェでコーヒーをして過ごそうと思った。
先里風香の『よろいってなんだ』を読みはじめた。
湯花邪無にとっては香港は穴場である。中国の出先はすべて上海である。上海では突然に出会うことがあるかもしれないが香港では可能性が薄い。
12時になってホテルの中華レストランにお昼を食べに向かった。
少し豪華なコースのお昼を食べていた。
「14時に会議なのに華美美鈴が見つからない」
湯花邪無はすぐに支払いを済ませてチケット売場に向かった。12時22分に乗れる。
今日は小さなバックを持っている。飛行機で背中に背負うスタイルに替えた。両手を空けておかないとダメだ。
12時45分には虹橋空港からホテルに向かっていた。いくつもホテルがあるのだが最も大きなホテルにしようと思った。
「第２新幹線の会議は何時ですか？」
「14時です」
「４階ですか？」
「８階です」
「ありがとう」
短く聞くと短く応えてくれる。忙しいからだ。
多分14時に華美美鈴がいなかったらそれでいいのだろう。華美美鈴のパワーがなかったら第２新幹線はリニヤーになるかもしれない。そしたら中国の電力は更に厳しくなるのだが、リニヤーの人々は安堵だろう。
ホテルから連れ出すことも考えられる。
もう１度サマンサのメールを読んでみた。
「14時に会議なのに華美美鈴が見つからない」
12時８分だった。
トイレは自分の部屋にある。

いなくなる状況がわからない。
８回の会議室なのだが会議室より下には泊まらない。15階くらいのはずである。
一瞬、華美美鈴に賭けをされているのではないかと思った。部屋を当てさえすればそこで待っている。
とりあえず８階で降りてみた。
まだ静かだった。
13時だった。誰もいない。８階というアナウンスもされていないのだろう。
今日は26日である。
26階に向かった。
エレベーターを降りてサマンサのホントに驚いた顔が目の前にあった。
瞬間に華美美鈴がホントに見えなくなったのだと思った。
「最後に見たのは？」
「12時までわたしと一緒に部屋にいた」
「ジムに話しがあると言って部屋を出てそのまま」
「部屋に呼べばよかった」
「ジムたちは？」
「ホテルの出口を見張っている」
「駐車場を見張っている」
「湯花邪無が入ってきたのもわかっていた」
「華美美鈴はジムと話しをしたのですか？」
「話してない」
「階段があるんだ」
「わたしはここにいないとジムたちが困る」
「何号室ですか？」
「２６１４」
湯花邪無は２６１４に走った。
階段のドアがあった。
26階である。
ここから駐車場に降ろされた。それとも上か。
湯花邪無は一気に上に走った。34階までだった。35階へはバツがつけて

あって黄色いテープが貼られてあった。
34階に出てみた。オフィスのようだったがまだ使用していないようだ。どこかまでがホテルでそこから上はオフィスらしい。
35階への階段を昇った。
真っ暗になった。目を凝らして35階の階段のドアを開けた。
日の光だけだが明るい。工事中のようだった。誰もいない。
小部屋の仕切りをやるところなのだろう。資材が置いてあった。見て回ったが隠れる場所などない。
36階に上がった。
かろうじて見える階段のノブを回した。
35階と同じ工事中だった。隠れ場所などない。
湯花邪無は36階のドアに資材を持ってきて日の光が階段まで入るようにして37階に向かった。
何階まであるのかわからない。
37階も35階と同じ状態だった。
湯花邪無は急いで38階に向かった。
下の駐車場にも行かないといけない。少し焦っている自分を感じていた。
38階は床の工事をやっているらしかった。誰もいない。
階段ホールとエレベーターホールができているだけだ。
エレベーターホールの向こうに資材が積まれている場所があった。一応見ることにして近くに寄ってみた。
人だった。恐怖に縮んでいるように見えた、手は後で足と口をテープでグルグル巻きにされいた。このまま鼻を巻かれていたら危ない。
「私だ」
華美美鈴がガバッと向き直った。
華美美鈴の目は恐怖と驚きで見開いていた。
「サマンサハサミを持って38階に来て」
「いたのですか？」
「無事だ」
「35階でバツになっているからかまわず昇って38階だから」
強力なテープだとわかっていた。湯花邪無の手では外せない。口のテープは

外せる。
華美美鈴はずっと目を見開いたままだった。
「お願い」
華美美鈴が何を言いたいのかすぐにわかった。
手足をテープでグルグル巻きにされた華美美鈴を抱いて唇を合わせていた。
すごくながい時間だったのではないかと思った。
バタンとドアが開く音がした。
サマンサとは限らない。
「イヤだ」
イヤがる華美美鈴を離して立ち上がってみた。
サマンサだった。
「ジムたちも来ます」
サマンサは黙っている華美美鈴の後ろ手で縛られているテープを慎重に切った。そして足のテープも切った。
「テープも持って行きます」
「わたしが先に行きます」
誰か来るかもしれない。
「あなたはホントにジェームスボンドね」
華美美鈴が小さな声で言った。
「もっとキスしていたかった」
２６１４の部屋に入ったときジムも２人の警備員も不思議そうな顔で湯花邪無を見ていた。
13時36分だった。
「わたし会議に出ないといけない」
「シャワーして着替える」
ジムと２人の警備員は慌てて湯花邪無に握手を求めて部屋を出ていった。
サマンサは華美美鈴の着替えを選んでいた。
「どうぞ」
「５分でシャワーしてください」
サマンサは湯花邪無に言った。
華美美鈴はその場で湯花邪無を見ながら脱いでいた。湯花邪無も素早く脱い

でシャワーに向かった。
「顔を洗わないと汚れてる」
２人で顔を洗った。そのまま唇を合わせた。
「どこか傷があるか見て」
湯花邪無は華美美鈴の全身を視た。
「大丈夫そうだ」
華美美鈴は、安心したように唇を寄せてきた。
トントンとドアを叩く音がした。
「ありがとう〜先にホテルを出て」
「５分で出て」
湯花邪無はバスタオルで顔を拭きながらシャワー室を出た。
サマンサが衣服を揃えてくれていた。
サマンサはシャワー室に向かった。
スマホの時計を見た。13時42分だった。
エレベーターホールに向かった。ジムが止めておいてくれた。13時47分にはホテルから空港に向かっていた。
誰も気がついていないと思った。
誰かが華美美鈴を拉致して38階まで運んだのだが誰だかわからない。もう誰でもいいのだろう。この時間である。犯人は成功したと思っているに違いない。
華美美鈴は会議には出席できないと思っているに違いない。
湯花邪無は14時21分の虹橋ー羽田に乗った。
華美美鈴が第２上海ー北京新幹線の会議に出席できていることは確実である。
少し早いのだが北千住のスーパーマーケットに寄った。白いワインを買った。アース炊飯器のスイッチを入れた。ゴーヤチャンプルが１つ残っている。
水ギョーザを３皿つくろうと思う。時間があるからだ。ニラを買って白菜を買った。
ワインを買ったのだがチュウハイにした。水ギョーザにゴーヤチャンプルだ。

今日は疲れた。
ごはんを食べて少しウトウトした
19時になっていた。
華美美鈴を検索してみた。
「14時からの第２上海ー北京新幹線にアースバッテリを使用することにプレゼンテーションを華美美鈴が登場しました」
結果が出ていない。
まだ決定されていないのだろう。
どうしてもシャワーをしたかった。顔を洗っただけだ。ずっと華美美鈴とキスをしていた。
ますます華美美鈴にはまってしまう。

今日の南極は暖かい

10月27日月曜日である。
湯花邪無は新宿のスパイス湯花に向かおうとした。
北千住のマンションの駐車場に有村聡と真野裕也が待っていた。
「昨日上海に行っているが」
「華美美鈴は何もなかったようだが」
「仕事で上海に頻繁に行っている」
「ジャカルタの社長にも頻繁に行ってもらっている」
「私が上海に入ったかどうか調べたのですか」
「香港に入って上海に入っているが」
「香港でも仕事したい」
「華美美鈴と会ってないのか」
「もちろん」
「華美美鈴に危険はなかったのか」
「私にはわかりません」
「第２新幹線はアースバッテリーに決まったそうだ」
「わかりました」

「仕事があるんですが」
有村聡と真野裕也は道をあけてくれた。
アースカーで上海ー北京第２新幹線を検索した。
まだ華美美鈴がプレゼンを行ったという情報だけである。
有村聡と真野裕也はどうして決まったと言ったのだろう。特別な情報ルートがありそうである。
「おはよう」
「おはようございます」
スパイス湯花のみんなは今日も明るかった。
「ミスタージャムおはようございます」
「何かありますか？」
「スパイス湯花は順調です」
「今日は八ヶ岳に行ってきます」
「なにかあるのですか？」
「わさびの森のスタッフルームを大きくしている」
「寒くなるので急いでいる」
「わたしが行って工事を進めてくる」
「２人はわさびが忙しいから」
「お願いします」
水野まさみは急いで出て行った。
「コーヒーにしました」
「ありがとう」
牧野由香がやってきた。
「お昼もここでいいですか？」
「お願いします」
「他に何か」
「ありがとう平気です」
「お店にいますから」
「わかりました」
お昼前だった。
「上海北京第２新幹線がアースバッテリーに決まりました」

上海のライブテレビが報じた。
「２１１８年４月１日開通の予定です」
簡単な結果だけのニュースだった。
華美美鈴はずっと襲われ続けている。どういうわけだか湯花邪無がジェームスボンドのように助けに出かける。実際には、ジェームスボンドのようにカッコいいわけではない。もしカンが外れたらとんでもないことになっている。
いつもギリギリなのだ。
「ミスタージャムごはんだけど」
「きょうのお昼は栗ごはんです」
「珍しいですね」
「最近食べたことないでしょう？」
「ええ」
「おいしい漬物しかありません」
「それにお味噌汁」
「おいしそうだ」
「今日のごはんは誰ですか？」
「20歳のコンビ」
「若いのによくつくれるな～」
「若いからおいしいかどうかわかりません」
20歳のコンビがつくった栗ごはんはおいしかった。
湯花邪無も和食の料理教室に行きはじめているのだがこんなにおいしくつくれるかわからない。
「おいしい」
「調理はスキかどうかだし実践の回数だから」
牧野由香がいいことを言った。
確かにそうだ。調理をメンドーがっていたらいつまでもおいしいごはんはつくれない。
「ちょっと出かけてきます」
「どちらですか？」
「福岡です」

湯花邪無は13時30分羽田発の福岡行きに乗っていた。
べつに急いだわけではないし急に思いついたわけでみない。社長ではないからスパイス湯花にいるとつい口を出してしまう。
福岡といっても30分で着いてしまう。
もつ鍋を食べて帰ろうと思ったのだ。
ついでに博多ラーメンを買って帰ろうと思った。
スパイス湯花のお店は新宿にしかない。全国にはネット販売である。博多のお店からネット販売でもつ鍋を取り寄せられる。しかし今日は博多に来てみた。
九州も人口が少なくなって熊本でクマが現れてニュースになっている。１００年前には九州にはクマはいなかった。
日本人は移民を受け入れないからこのまま人口は減少し続けるのだろう。多くの島では無人島になってきている。
博多はさすがに人口が減少している雰囲気はない。屋台でもつ鍋もあるのだが、立派な和食のレストランに入ることを決めて、百貨店に向かった。
どんなスパイスが売られているのか見たかったのだ。もちろんスパイス湯花のスパイスは販売していない。
北千住のマンションに帰ってシャワーをしてコーヒーを煎れていた。
いきなりニューヨークのライブレテビが入ってきた。華美美鈴をキーワードに入れている。勝手にスイッチが入るようになっている。録画もしてくれる。
「みなさんおはようございます」
「わたしは今南極基地にいます」
「今日１日で南極のアメリカ基地をアースバッテリーに切り換えます」
「今日の南極は暖かくてペンギンと散歩しています」
南極だと誰も襲えないだろう思った。
南極空港はあるのだろうか。調べてみた。アメリカの南極観測基地は大きくて滑走路も備えている。ニューヨークまで１２０分である。
湯花邪無は飲みかけのハイボールに手をつけられなくなった。
昨日上海で拉致されていたのだ。
上海や南極の話しはずっと以前に決まっていたのだろう。スケジュールどお

り動いているのだ。
昨日の上海の話しは誰も知らない。
10月28日だった。火曜日である。
シャワーをしてコーヒーとパンを食べていた。
テレビがどこもスイッチをつけない。華美美鈴のニュースがないのだ。
サマンサからも何もない。
いつもの時間に羽田からジャカルタに向かった。
誰も知らないことなのだが、アースカーで華美美鈴を検索する自分が少し緊張しているのがわかる。
華美美鈴がどこかに出かけると必ず誰かが襲うのだ。
華美美鈴が憎いわけではない。アースバッテリーを止めたいのだ。アースバッテリーの普及を止めたい。このままだと、世界の動力はアースバッテリーに移行してしまう勢いである。
悔しがる組織や人が大勢いるのだ。
世界のアースバッテリーの応援者も事故があれば華美美鈴にスルーするのだろうと思う。
華美美鈴は大きなリスクを背負っている。

今度は札幌ラーメン食べに行きたい

「おはよう」
「おはようございま～す」
どうして声が揃ってしまうのか不思議である。
「ずっと音信フツウだったけど」
いきなりジンが言った。
「昨日は福岡にもつ鍋を食べに行きました」
「今度行きましょう」
「今度なんかじゃ来ない」
「ああ～今晩でもいいです」
「ジャカルター福岡ある？」

「トランジットでも50分に30分だから」
「ジャカルタに帰るの？」
「ええ」
「北千住には誰かいるんだよね？」
「以前にはいました」
「今日はいないんだ」
「北千住から明日早くジャカルタに帰るから」
ジンは多分ジャカルターー羽田ー福岡を調べていると思った。
「ミスタージャムおはようございます」
「今日はリニは休みの日なのでわたしがコーヒーを煎れました」
ラナンがコーヒーを持ってきた。
「今日のお昼はどうしますか？」
「ここで食べます」
「わたしと一緒でいいですか？」
湯花邪無はジンを察したがジンはネット検索に忙しそうだった。
「ジンはクアラルンプールに出かけますから」
「ああ～お願いします」
「お店にいます」
ジンはチラッとラナン見た。
「スマホにメールするから」
17時50分羽田行きに乗って19時福岡行きに乗れである。
「わたしクアラルンプールに行くから」
「わかりました」
北千住のマンションは、沢風ゆりと住んでいた。カギを持ったまま音信不通である。いつ帰ってくるかわからない。ジンをマンションに入れるのは危険である。それに部屋をキチンと整理しているはずであるが抜けているかもしれない。化粧品などは捨てたはずである。
ジンも前から狙っていたはずである。北千住には日本のオンナがいると思っている。多分、やっとチャンスが巡ってきたのだ。ダメだと言っても来るだろう。さっき、以前には一緒に住んでいたと言ったのだが理解しただろうか。

いろいろ気になってくる。
華美美鈴も検索してみた。まだ南極なのだろうか。何も情報がない。
「ミスタージャムお昼だ」
「ガドガドだ」
「おいしそうだ」
「今度のスパイスの講義はなに？」
「ターメリックだ」
「誰が手伝ってるの？」
「ガランにお願いしている」
「うれしいだろうね」
「トレイ持って」
湯花邪無は独身になっている。ラナンも湯花邪無には興味がある。なにかと突っ込んで聞いてくる。
昼から明日の大野真理子料理教室を調べた。
ギリギリにならないと何をやるのかをホームページに載せない。
明日はサンマの蒲焼らしい。サンマのおろし方はどうするのかわからない。
華美美鈴は南極からどうしているのかわからない。南極では襲いにくいと思った。今日は助けに行きにくい。ジンがベッタリなのだ。夜もだ。
気になるがどうにもならない。
「お先に～」
「おつかれさまでした」
湯花邪無の言葉によって何を言うか決めてあるようだ。
今度は予想できないようなことを言ってみようと思う。
少し早く出てジャカルタ空港で待った。
19時の羽田—福岡に乗った。
ジンはどこにも見えない。乗るはずである。電話もない。
「後だから」
いきなり後からジンの声がした。
「席が違うから出口で待ってて」
「わかった」
インドネシアー日本は通行がフリーである。パスポートは提示するがそれだ

けである。
「こんなおいしいモツ鍋食べたのはじめて」
「贅沢ね~新宿でもあるでしょ？」
「まあ~」
「日本酒頼んでください」
ジンにしてみれば誰も知らないところである。しかもボディーガードのようなオトコが一緒である。酒がすすんでしまう。
「22時35分に乗るから」
「イヤだ」
「ホテルにしますか？」
「イヤだ」
「北千住に行く」
「だから22時35分に乗るから出ます」
「お勘定」
「終わっています」
ジンは羽田に着いた頃はシャンとしていた。
「ドキドキしてきた」
「これ〜ジャカルタのミスタージャムのアースカーと同じね」
「ええ」
「運転しないんだったらキスしてよう」
「事故あるかもしれない」
「ジャカルタより明るいんだね」
「ジャカルタはお酒がないから」
北千住のマンションではしっかり歩いていた。
「どうぞ」
ジンは何も言わずに入って行った。
「キレイにしてる」
「トイレ」
「コーヒーでも」
「うん」
オンナの歯ブラシでも探すのだろうか。

沢風ゆりと住んでいたのだ。痕跡は何かあるだろう。
「シャワーしてくる」
「どうぞ」
「ミスタージャムの下着でいいから」
「パジャマも」
湯花邪無は慌てて下着を探した。
新しい下着など用意していない。
「使ったものだけど」
「わかってる」
「１人でシャワーするから」
「コーヒーやっています」
「うん」
「タオルは棚だから」
「わかった」
こういう時間にでも沢風ゆりが入ってくるかもしれない。
カギを持ったままである。
それはそれで仕方がない。
「コーヒー」
「ありがとう」
「シャワーしてくれば？」
ジンは隅から隅までオンナの匂いを探すのだろうと思った。
なにか発見するに違いない。
時々は華美美鈴もここにいたのだ。
小部屋には入って欲しくないのだが入るだろうと思う。少なくとも、華美美鈴との接点だけは探られたくない。ヒントも見つけてほしくはない。
「明日空港まで送ってくれるでしょ？」
「ええ」
「何時に起きればいい？」
「６時？」
「朝ごはんつくるから」
「冷蔵庫調べた」

「冷凍庫のおかしな鍋はなに？」
「いっぱいあるけど」
「そのまま出してスイッチ入れたら調理できる」
「なにが入ってるの？」
「ブリダイコンとか」
「あなた自分で調理してるの？」
「料理教室も行ってるし」
「タベットのマンションでは何もしないけど」
「北千住では自分しかいないんだから」
「昔はいたわけでしょ？」
「今は自分でごはんをつくってる」
「タベットでもやって」
「ジンのごはんには敵わない」
ジンはサッサとベッドルームに向かった。
「小さいＴシャツないの？」
「パンツも大きいし」
みんな脱ぎ捨てながら言った。
「福岡で買い物すればよかった」
「ここにわたしの下着いっぱい置いとけばよかった」
「今度来たときそうする」
「他の女来ても驚くように」
ジンはタベットのジンより荒々しくなっていた。
「なにも用意してない」
「あかちゃんできるかもしれない」
「でもお願い」
「このベッドにもマーキングしておく」
湯花邪無はスマホのアラームを忘れていた。
「起きてごはん食べて」
「なにしていいかわかんないからパンあったから焼いた」
「コーヒーと」
ジンはもうキレイにしていた。

湯花邪無はなにも言わずに慌ててシャワーに向かった。
「今度札幌ラーメン食べに行きたい」
羽田でジンは言った。
ジンが日本に来ることはなかった。日本には湯花邪無の日本のオンナがいると暗黙うちに信じていたからだ。触りたくなかった。
沢風ゆりがいたのだ。
帰ってくるかもしれない。帰ったらどうするか考えないといけない。ジンを悲しませるようなことはしたくはない。
もし華美美鈴のことを話したら驚き悲しむだろうと思う。墓場まで持っていかないといけない。
「おはよう」
「おはようございま〜す」
湯花邪無はコーヒーショップで時間を合わせた。
「ミスタージャム今日は大野真理子さんですか？」
「そうです」
「何時ですか？」
「15時です」
「コーヒーですか？」
「紅茶にしてください」
「珍しい」
「水野さんは？」
「運転免許更新でお昼までかかるそうです」
「なにかありますか？」
「順調だと思います」
牧野由香は紅茶を煎れてきた。
「何かあったのですか？」
「平気です」
おかしな会話になっている。
「お昼はどうされますか？」
「ここで食べます」
「わかりました」

「わたしと一緒でいいですか？」
「うれしいです」
会話がおかしい。
ジンが東京にいたことを知られたくない。
少しは和食を研究しようと思う。
どうせならスパイスと和食が好ましい。
大野真由美はスパイス使いらしい。
ワサビやショウガや山椒や七味くらいしか思い当たらない。
今日のサンマの蒲焼などはどうしているのだろうか。
「ミスタージャムごはんです」
「わかりました」
「なにしてるんです？」
「和食とスパイス」
「研究しているんですか？」
「まあ～」
「ワサビやってるじゃないですか」
「今日はなんですか？」
「焼き鳥ドンブリです」
「聞くだけでおいしい」
「いい匂いがしてきた」
湯花邪無はながくジャカルタに住んでジャカルタ人のようであるが、焼き鳥ドンブリなどと言われると、それだけでまいってしまう。日本人なのだ。
「私は渋谷へ行きます」
「大野真理子さんによろしく」
「運転免許は平気ですか」
「ありがとうございます」
湯花邪無は少しは緊張している。
はじめての和食の料理を自分で調理してみるのだ。
１回目の10月22日は大野真理子のおでんを食べるだけだった。今日はサンマの蒲焼を自分でやるのだ。
「さっそくですがサンマと食材を買ってきてください」

「メモを渡します」
「ノンビリしてると時間がなくなります」
「誰かリーダーを決めたほうがいいかと思います」
「買うのはお米とサンマだけです」
「調味料はここにありますから使ってください」
「サンマは１人１尾です」
「お米は１合です」
「買出しの途中で自己紹介をしてください」
「それでは行ってらっしゃい」
７人はお互いの顔を見てメモを持って腰を上げた。
「この中でプロになろうとしてる人はいますか？」
湯花邪無が声をかけた。
若手の調理人風のオトコが手を上げた。エレベーターの中だ。もう１人はオンナだ。
「もうお店に出ているのですか？」
「下働きをやっています」
「どちらかリーダーをやれますか？」
「わたしがやります」
「はちまき娘です」
「26歳です」
「オレはヤクです」
「22歳です」
「サエコ25」
「花嫁修業です」
「キニです」
「食物学科の２年です」
「ジョウタ67」
「離婚されて１人で生きないといけないから」
「ケイコ主婦だけどお手伝いさんがなんでもするから調理したことがありません」
「湯花邪無」

「新宿でスパイスのお店をやっています」
「奥さんいるんですか？」
「婚約者のような人がジャカルタにいます」
キニがいきなり聞いてきた、
すごい美人である。日本人ではないかのような美人である。
はちまき娘は書かれた地図にあるスーパーマーケットに向かった。
渋谷に素材を売っているスーパーマーケットがあるとは知らなかった。
「大野真理子さんのも買わないといけない」
湯花邪無が言った。
「帰ったらすぐ調理だろうからお金を集めてください」
「お金を集めます」
はちまき娘は歩きながらスマホで割り算をしてみんなからお金を徴収した。
こんなところは、ミナの料理教室で慣らされてきた。
「先にごはんを炊きます」
「炊飯器を２つ使ってください」
「今日は白いごはんですから何もありません」
「サンマのおろしをやります」
大野真理子はいきなりはじめた。
わたしを見てである。
言葉で何も教えないタイプのようだ。
湯花邪無はマイ包丁を持って来ていた。
ミナの料理教室では、魚を３枚におろすことなどしなかった。もっと大雑把である。
みんな大野真理子の包丁の入れ方を見ながら自分も包丁を入れる。
「ウロコはあまりないけど一応落とします」
「頭は思い切って」
「下から腹を開けます」
「腹わたを出して洗ってください」
「水を拭きとって」
「腹から切り込みを入れます半分まで」
湯花邪無は大野真理子の手元を見に行った。

「背から同じように切り込みを入れます」
「尾に包丁を当てて頭に向かって切り取ります」
湯花邪無はまた大野真理子の手元を見に行った。
「オレのサンマはグチャグチャだ」
「諦めないで煮てしまえば同じようなもんだから」
「逆側も同じようにして骨だけ外します」
「わたしももうダメ」
「ケイコさんとジョウタさんは余りの２匹使ってください」
「ありがとう」
はちまき娘はもう完全に仕切っている。
みんな驚いたようにサンマの蒲焼きを食べた。
おいしい。
湯花邪無は北千住のスーパーマーケットに寄った。
晩ごはんを食べた感覚がある。
水ギョーザがアース鍋に残っている。
お湯割りで食べることにした。
サンマを３尾買った。下ごしらえをしてアース鍋で蒲焼きの準備をしようと思った。
今日やらないと忘れてしまう。
さっきよりは手際がよい。
簡単に３つのサンマの蒲焼きのアース鍋ができた。
華美美鈴を検索したが何もない。南極を出たのだろうか。

『fasterbigger3』

２０１６年１月

げんじあきら


Faster
Bigger
3
げんじあきら

fasterbigger3

著者　　　げんじあきら
＊本書は（株）ボイジャーのRomancerで作成されました。